

一橋大学バレーボール部 第7回海外遠征（韓国）報告書



文責 3年宮川遥菜、2年王偲叡、2年田村彩佳

目次

I 遠征内容

- ・概要
- ・遠征総括
- ・日程詳細

II 部門別報告

企業訪問部門

- ・総括
- ・在大韓民国日本大使館
- ・COEX
- ・韓国三井物産
- ・三菱 UFJ 銀行ソウル支店
- ・Nidec 韓国

ソウル大学交流部門

- ・総括
- ・交流試合
- ・討論会
- ・合同市内視察
- ・全体感想

III 事前学習

- ・総括
- ・事前レポート課題
- ・「毎日韓国語」

IV 参考資料

- ・収支報告書
- ・参加者名簿
- ・交流計画書
- ・討論会スライド

I 遠征内容

～はじめに～

私たち一橋大学体育会バレーボール部は、如水会、およびOBOGの皆さまのお力をお借りして、2025年2月6日から2月10日にかけて韓国を訪問、企業見学やソウル大学校（以下ソウル大学）との交流をして参りました。バレーボール部にとって海外遠征は7度目でしたが、無事成功を取めることができました。

頂きましたご支援・ご協力に対し深く御礼を申し上げます。誠にありがとうございます。今回の海外遠征につきまして以下の通りご報告申し上げます。

～概要～

(1) 日程 (2025年2月6日～2月10日)

2月6日

羽田空港発 (大韓航空 KE2106 便)

ソウル金浦国際空港着

COEX 訪問

2月7日

在大韓民国日本大使館 訪問

韓国三井物産株式会社 訪問

三菱UFJ銀行ソウル支店 訪問

Nidec 韓国株式会社 訪問

2月8日

ソウル大学バレーボール部との交流試合、討論会、夕食会

2月9日

ソウル大学バレーボール部との合同市内視察

2月10日

ソウル金浦国際空港発 (大韓航空 KE2103 便)

羽田空港着

(2) 参加者

一橋大学体育会バレーボール部 男子部 (四年3名、三年4名、二年7名、一年13名) 女子部 (三年2名、二年5名、一年3名)、付添OB2名 合計39名

このほか、竹内誠也OB、山浦拓OBがソウル大学との交流(2月8日)に現地参加

(3) 訪問先

COEX (ソウル特別市江南区三成洞 159)

在大韓民国日本大使館広報文化院（ソウル特別市鍾路区中学洞 14）

韓国三井物産株式会社（ソウル特別市中区水下洞 67）

三菱 UFJ 銀行ソウル支店（ソウル特別市中区南大門路五街 831）

Nidec 韓国株式会社（ソウル特別市江南区駅三洞 825-18）

（4） 交流先

ソウル大学男子バレーボール部

ソウル大学女子バレーボール部

（5） 交流会場

ソウル大学校冠岳キャンパス Sport-Centre Complex（A71-1 棟）（ソウル特別市冠岳区新林洞山 56-1）

（6） 宿泊場所

東横 INN ソウル江南（ソウル特別市瑞草区瑞草洞 1337-27）

全体総括

文責 宮川遥菜

今回の一橋大学バレーボール部における、海外遠征は7回目になる。前回の遠征は、2023年1月であり、コロナウイルスの爪痕が残るような遠征だったが、今回は、コロナウイルスによる、制約を受けることなく、遠征を実施することができた。

またこれまでアジアを中心に訪問してきたが、我々として初めての韓国となった。韓国は、私たちにとって、地理や、歴史、文化、近年ではKカルチャーなどが、非常に結びつきが強い国である。だからこそ、今回より日本に近い、韓国を訪れ隣国の理解を深められたことは世界へ踏み出す一歩とも言えるだろう。

今回の遠征の特徴としては、2点ある。

第一に、事前学習の実施である。韓国はその歴史的背景から多様な視点を持つべきテーマが多く、より深い理解を得るために、OBOGの方々の協力を得て事前学習を行った。学習を進める中で、問題の複雑さや異なる立場からの多様な意見があることを認識し、現地で同世代の学生の生の声を直接聞きたいという思いが強まった。事前学習にご協力いただいたOBOGの皆様に、改めて感謝申し上げる。

第二に、ソウル大学の学生との交流の深化である。これまでの遠征では、バレーボールを通じた交流が中心であり、試合の枠を超えた対話には限界があった。しかし、今回はソウル大学側の提案もあって、ソウル大学の学生とともに班別に市内を視察した。この市内視察を通して、これまでよりもソウル大学の学生とより深い部分まで話すことができ、韓国の文化や、日本と韓国の相違、普段感じていることをより生の声で知ることができた。また、単なる国際交流にとどまらず、一人の友人として関係を築くことができたと感じている。ソウル大学学生は彼らの勉学や生活がある中で、市内視察のルートの提案から、一日に渡って、当日の交流をしてくれた。大変な部分があるだろうに、嫌な顔ひとつせず、案内してくれた優しさはこれ以上ないものだった。今回の交流を通じて、私たちが韓国、や韓国の人々について理解することはもちろん、ソウル大学の学生も日本について理解を深めてくれていたら幸いである。

今回の韓国遠征では、身近な国、韓国について、バレーボールをともにプレーすることをはじめとして、様々な角度が見られた遠征だった。本遠征に対し、ご支援、ご尽力をいただいた如水会やOBOGの皆様に心からの感謝の意を表明するとともに、参加した部員たちがこの経験を活かし社会で活躍できる人材になることで恩返しとしたい。

日程詳細

2月6日（木曜日）1日目

6時45分に羽田空港に集合し、日本時間9時45分発の大韓航空 KE2106 便でソウル金浦国際空港に向かう。韓国時間（時差は無し）12時20分に到着。現地ガイドのイさんと合流し、専用バスにて宿泊先の東横 INN 江南へ向かう。

ホテルに荷物を預け、地下鉄を利用し、訪問先企業である COEX に向かう。COEX とは「Convention & Exhibition Center」の頭文字をとった略称であり、大規模な展示会や国際会議が開催される施設である。また、ショッピングモールや水族館、映画館、図書館など多彩な文化・商業施設を併設しており、ビジネスとエンターテインメントが融合した複合施設となっている。ここでは、実際に国際会議を行うホールや、韓国の芸能産業を象徴する音楽・ダンスの収録スタジオ、大型の図書館（ピョルマダン図書館）などを見学し、貴重な体験となった。

2月7日（金曜日）2日目

この日ソウルは最低気温 -11°C を記録し、非常に厳しい寒さとなった。計らずとも気候の違いを痛感する機会となった。

地下鉄にて在韓国日本大使館へと移動し、10時頃に到着。ここでは、広報文化院の山本一等書記官によるお話を聞き、日韓関係や、教育・スポーツ面での日韓交流の実情について学習した。お話のあと、質疑応答の時間も取られ、上級生・下級生問わず多くの質問が出された。

昼食を挟んだ後、韓国三井物産へと移動し、中山経営企画本部長兼業務管理本部長から説明をいただいた。総合商社が実際に海外でどのように事業展開をしているか、また韓国市場で実際にどのようなビジネスが行われているかを学んだ。

Nidec 韓国では、山崎会長よりビジネスモデル、韓国市場の動向、主要顧客向けの製品情報、CSR 活動についてお話いただき、Nidec の成長戦略や経営理念についても触れられる機会となった。

三菱 UFJ 銀行ソウル支店では、高田副支店長より企業や金融業界についてはもちろん、韓国での生活や将来社会人として働くことになる私たちへのアドバイスなど、ぎっくばらんにお話を伺うことができた。

2月8日（土曜日）3日目

ソウル大学冠岳キャンパスへと移動。開会式では一橋大学とソウル大学の両主将による挨拶が行われ、まずは男子が討論会、女子が交流試合を行い、途中で男女を入れ替える形で交流プログラムが進行した。討論会では、「日韓の大学生活の違い」と「厳しい受験競争と

学歴社会の解決策」という 2 つのテーマについてグループディスカッションを行った。事前に各部員がテーマについてレポートを作成するという準備を行っていたこともあり、慣れない英語の討論会でも比較的容易に自分の意見を伝えることができたように思える。また、ソウル大生側も自身の原体験等を基に、意欲的に考えを伝え、刺激のかつ建設的な議論ができた。また、テーマごとにグループで話したことを全体の前でプレゼンする時間も作り、発表者はやや緊張しながらも、しっかりと英語で考えを表現できていた。

交流試合では、ネットの種類やボールの空気の入り具合が日本と違っており、また普段私達が使う体育館と異なり、土足で進入可能なコートだったため滑りやすく、慣れない環境でのプレーを強いられることとなった。特にソウル大学の男子チームは兵役を経験した選手が多いためか、体つきが逞しく、平均身長も高いことから、フィジカル的にはかなり不利に見えたが、私たちの個々の技術や連携プレーによって、試合を優位に進められた。女子の試合においても、一橋大の技術力が光り、安定した繋ぎから得点を重ね、勝つことができた。

試合と討論会を終えた後は、近くの飲食店でともに夕食をとった。ここでもソウル大学のメンバーと多くのコミュニケーションをとることができた。英語で会話することはもちろん、ソウル大生の中には日本語が堪能なメンバーも多く、かなり高度で複雑な話題でも会話ができた。お互いの文化や生活、バレーボール競技という共通点など、様々なことについて情報交換ができ、仲を深めることができた。

2月9日（日曜日）4日目

この日はソウル大学と混合でグループに分かれて班別行動とした。ソウル大学側からの提案により、ありがたいことにソウル市内を案内してもらった企画が実現した。グループごとに関心がある箇所を視察し、歴史や文化を体験する一日となった。視察した場所は班によって異なるが、景福宮といった歴史的な場所から、明洞といった若者が集まる街でポップカルチャーを体感することまで、幅広くできた。過去の海外遠征と比べても、交流相手の大学生と全員がここまで長時間交流をするという試みは初めてであり、多くの部員が連絡先を交換し、将来お互いの国を行き来してまた会いたいと話をするなど、国を超えた友情が芽生えることとなった。

2月10日（月曜日）5日目

10時にホテルのチェックアウトを済ませ、付近で各自お土産を購入する時間をとったのち、12時過ぎに専用バスで金浦国際空港へと移動。若干の遅延があったものの、大韓航空KE2103便で帰国。19時頃に羽田空港に到着し解散。無事に韓国遠征の全日程を終える。

II 部門別報告

部門 1：企業訪問

企業訪問 総括

文責 田村彩佳

【日時】2025年2月6日（木）ー7日（金）

【場所】Coex、在大韓民国日本国大使館、韓国三井物産、
三菱UFJ銀行ソウル支店、NidecKorea

【概要】企業訪問総評

今回の企業訪問では、韓国企業や政府機関、日系企業の韓国法人を訪問し、企業文化や韓国ならではの経営やビジネスの戦略、韓国での働き方について直接お話を聞くことを主眼に置いた。韓国との関係をより身近に感じるようになるとともに、部員の将来の選択肢や社会に関する視野をより豊かにすることが目的だ。

今回の企業訪問では、Coex、在大韓民国日本国大使館、韓国三井物産、三菱UFJ銀行ソウル支店、NidecKoreaの皆様にご協力をいただき訪問する機会を得た。

Coexと在大韓民国日本国大使館への訪問は、一橋大学の教授に仲介していただき訪問が実現できた。日本の3つの大企業への訪問は、如水会ソウル支部に連絡を取らせていただき実現ができた。

Coexは今回訪れた唯一の韓国本社の企業であるが、館内見学ツアーが主だったためもう少し事業内容や施設経営、集客戦略など内部のことについても聞けたら日本企業との比較ができてさらに学びが深まったのではないか。大使館では今回の遠征が日韓の将来に資することを部員全員が自覚し、その次の日以降のソウル大学バレーボール部の皆様との関わり姿勢がより前向きで積極的になったと感じる。また、事前学習ではバレーボール部OBの大使の方にも日韓関係の歴史、友好関係のフェーズ、今後の見通しなどの日本政府の考えを紹介していただいた。事前に学習したことで日韓の課題について向き合いつつ、ポジティブな動きをしていくというマインドを共有したため、講義がより濃密になった。大企業の韓国法人訪問について、今回は今までの遠征以上に多くの企業の方にご協力いただき、海外遠征史上一番の訪問数に増やすことができた。今までは一つの業界が多かったが、今回は総合商社、金融、メーカーに伺わせていただいた。業界や会社のバックグラウンドによって現状の認識や視点、考え方も大きく異なるので複数の会社に訪問できたことは企業理解を深める上で非常に有意義であった。韓国の産業や取引企業の特徴をうまくとらえつつ、自分たちの強みを自覚して現地企業としのぎを削っていくという点では、企業の力強さや柔軟性、情熱を感じ取り、自らの仕事に誇りとやりがいをもって活躍されている様子に強い憧れと、将来への期待を膨らませることができた。

次の海外遠征は2年後の2027年であるが、今回のご縁を大切にさらに内容をパワーアップさせた海外遠征、企業訪問となるように尽力したい。

お忙しい中、ご協力いただいたすべての皆様に感謝申し上げますとともに、今後のさらなるご支援を賜りたくお願い申し上げます。

企業訪問 (Coex)

文責 島田寧桜

【日時】2025年2月6日

【場所】COEX

【概要】

コエックス (COEX、Convention & Exhibition の略) は、ソウル特別市江南区にある大韓民国を代表する大型のコンベンション・センター。2000年秋にアジア欧州会合 (ASEM) 第三回首脳会合の会場になったことで、世界的に知名度が高まった。1979年開設。併設するコエックスモールはアジア最大の地下ショッピングモールで、地下鉄2号線サムソン駅、現代百貨店とも連結している。ファッション、ビューティー、アクセサリ、レストランなど260を超えるサービス施設及び店舗、さらにアクアリウム、韓国最大の映画館、展示会、セミナー、企画展などを観覧できるスペースもあちこちに備えられている。ファッション・マルチ・スクエアでは、若者層をターゲットにしたヤングカジュアル、ユニセックスカジュアル、ジーンズカジュアル、イージーカジュアル、雑貨などのショップを揃えている。365日季節や天気に関係なくショッピングを楽しむことができるとして、現地民からも愛されている施設である。

【訪れた感想】

展示施設、コンベンション施設として用いられる COEX は、アジア欧州会合、FIFA ワールドカップの国際メディアセンター、G20 首脳会合などとして用いられた重要な施設であり、その雰囲気は厳かであった。化粧室付近には、コートをかけるためのスペースが専用で設けられており、寒い国で、国際的な施設ならではの仕組みに触れることが出来た。

展示施設では、大型のフリーマーケットが行われており、手芸作品、小物、葉書、似顔絵などが販売されており、多くの客で賑わっていた。日本のフリーマーケットやコミックマーケットでは、営業にあたっての申請などの影響か現金のみの取り扱いが多いが、ここでは多くの場所でキャッシュレス決済ができ、日本と韓国のキャッシュレス普及度の差を感じた。

また、施設内には有名な図書館、ピョルマダン図書館があるのだが、高さ13メートルの書架の淡い色彩がスペース全体を柔らかく包み込む憩いの書齋をコンセプトに、さまざまなテーブル、そしてパソコン作業ができる電源コンセントなども完備されていた。1階から吹き抜けとなっている地下1階のスペースを見下ろすような形で配置されている椅子は

ゆとりある読書ができるよう独立したスペースが確保されている。

ピョルマダン図書館にはおよそ5万冊の蔵書を配架しており、1階は文学・人文学、地下1階には趣味・実用書関連の書籍があり、外国語原書コーナー、著名人の書斎コーナー、iPadで見ることができる電子ブック、特に海外の雑誌など約400種類の雑誌を取り揃えた雑誌特別コーナーもあるという。韓国語で「ピョルマダン」は「星の庭」を意味するが、本当にプラネタリウム空間にいるかのように、星の数ほど本が並んでいた。

企業訪問 (Coex)

文責 羽鳥 邦彦

【日時】2025年2月6日

【場所】Coex

【概要】

Coexとは、「Convention & Exhibition」の略称で、1979年の開館後、様々な国際展示や国際会議、文化・芸術・スポーツイベント等を開催してきた大型のコンベンションセンターを持つグローバルMICE企業である。

Coexモールというアジア最大のショッピングモールも併設しており、若者層をターゲットとしたファッションや雑貨ショップが立ち並んでいる。

訪問当日、私達は2010年のG20首脳サミットが開かれた講堂や、訪問時に執り行われていたイベント(K-Illustration Fair)、K-popの複合施設としてアカデミー、カフェ、ポップアップストア等を運営しているKtown4u、併設するCoexモール内のピョルマダン図書館の視察を実施した。

【感想】

Coexが国内外の様々な文化的交流を積極的に促進しようとする姿勢が垣間見えて興味深かった。コンベンションセンターでは先述したG20首脳サミットやアジア欧州会合、さらにはFIFAワールドカップの国際メディアセンターとして活用された際の写真を拝見し、彼らが政治やビジネス、スポーツ等様々な分野のインタラクション増加に寄与しようとしていることが見えた。

また、併設しているCoexモールでは、南側に三成駅に続く通路、北側には江南都心空港ターミナル(かつては大韓航空を始めとした各航空会社の事前チェックインサービスを提供していたが、新型コロナウイルスの影響により閉業。現在は仁川空港へのリムジンバスのみ運行中。)、それらを繋いだ中心にピョルマダン図書館があるという配置となっており、外国から来た観光客と地元客を繋ぎ合わせる仕組みを作ろうとしていたように思われた。

加えて国内文化の醸成という意味でもCoexは大きな役割を担っているように感じられ

た。私達が訪問した K-Illustration Fair においては、韓国のイラストレーターが創作したオリジナルキャラクターを中心としたフリーマーケットが開かれていたが、これも各オリジナルキャラクターが脚光を浴びる機会を設けることによって、国内のエンターテインメント活動を促進するドライバーの役割を果たしているのかと感じた。

さらには Ktown4u という K-pop の複合施設を設けることによって、世界的人気を誇る K-pop の本場の雰囲気を観光客に味わってもらうとともに、そういった人気があることを国民に見せていくことにより K-pop 文化の次世代を担う若者を教化する仕組みにもなっているのかと感じた。

企業訪問 (Coex)

文責 高橋靖智

【日時】 2025 年 2 月 6 日

【場所】 COEX Convention & Exhibition Center

【概要】 韓国遠征 1 日目、金浦国際空港に到着し、ホテルに向かった後我々は COEX を訪問した。COEX は韓国・ソウル特別市港南区にある韓国最大級のコンベンションセンターおよび複合商業施設である。正式名称は COEX Convention & Exhibition Center であり、国際展示場や会議の開催、ショッピング、エンターテインメントなど多様な機能を兼ね備えた韓国のビジネスおよび観光の中心地のひとつである。

COEX MALL に到着後、我々は 3 階にある講堂を見学した。この講堂は 2000 年に行われたアジア欧州会合に向けて設計され、その後も 2004 年の第 8 回国連環境計画 (UNEP) 特別総会や 2010 年の G20 首脳会合の会場にもなった。廊下に展示されていた国際会議の写真を見て国際交流の場としての COEX の存在を改めて認識した。



講堂の見学後は K-Illustration Fair を見学した。ここでは国内外のイラストレーターやグラフィックデザイン分野のアーティストたちがそれぞれブースを設置し、自らの作品を展示していた。イラストの中には日本のアニメや漫画の影響を受けた作品も多数あり、韓国においていかに日本のアニメ・イラスト文化が浸透しているかを実感した。

その後は Ktown4u を見学した。Ktown4u は K-pop の複合施設としてオフラインストア、K-pop アカデミー、カフェ、ポップアップストアを運営している。なかでも印象深かったのが K-pop アカデミーである。大規模ではなかったものの録音機器やダンス練習室など設備が非常に充実しており、生徒が練習に専念できる環境が用意されていた。K-pop は歌やダンスのレベルが高いことから世界中で人気を博している。その人気から韓国の経済全体大きな影響を与える「成長産業」の一つとして認識されているが、この産業の基盤を支える教育システムに感心した。

最後は COEX MALL の 2 つの階層にまたがって位置するピョルマダン図書館を見学した。この図書館ではおよそ 5 万冊の蔵書を配架しており、1 階には文学・人文学、地下 1 階には趣味・実用書関連が並べられ、その他にも外国原書コーナーや著名人の書斎コーナーが用意されるなど文化の融合地としての役割を果たしていた。それだけでなくテーブル、パソコン作業ができる電源コンセントが完備されており、人々に多彩な書籍だけでなく落ち着いた空間をも提供していた。



【感想】 COEX は単なる展示会場やショッピングモールにとどまらず、ビジネス、文化、エンターテインメントが融合した複合施設として、韓国の産業や観光の発展に大きく貢献していることを実感した。多様な施設や文化が一体となったこの施設は今後も国内外からの注目を集めると確信している。

企業訪問 (Coex)

文責 三上久遠

【日時】 2025 年 2 月 6 日

【場所】 Coex

【概要】

当日はまず係りの方の案内を受けホールに着いた。Coex は 1979 年の首脳会議に使用されたこともあり、建物や天井の大きさや荘厳なその景観は圧巻であった。次に向かったのは展示室であり、当日は日本でのコミックマーケットのような形で韓国のオリジナルキャラ

クターグッズの展示・販売をしていたため、日本と似た文化を体験しつつ韓国でアニメや漫画がいかに人気を得ているのかを実際に知ることができる貴重な機会となった。最後にセントラルプラザにて巨大な図書館を訪れた。地下1階から地上1階の天井まで伸びる本棚は大迫力であり、その高さは13mにも及ぶという。(下部添付の写真参照) およそ5万冊を収蔵しているこの図書館は観光客や市民の憩いの場として利用されているそうだ。その後韓国アイドルのボーカルレッスンに使用される部屋にも訪れ、画面を通してしか認知していなかった韓国のアイドル文化をより身近に感じる事ができた。

【感想】

全体的な印象として、韓国が日本と似ている部分が多くあるというのがあった。自分の高校が茨城県のつくば市にあることもあり、国際会議場を利用することが何度もあったためCoexの建物自体やホールと日本のものと比較しながら訪問させていただいていたが、整然とされ趣深い建物の作りは両国ともに共通していた。展示会においても、日本のコミックマーケットのように個々人が作成した同人誌やグッズ等の販売も行っており、大々的な催しではなかったため日本ほどの忙しさはなかったが、韓国の若者にもアニメ文化への関心があることを身をもって知ることができ、ここでも日本との共通点を見出すことができた。ただ、図書館を訪れた際は驚きを隠せなかった。日本の図書館とは一線を画すこの図書館はただ見上げることしかできず、その雰囲気を感じる事ができたのは人生でも何度も味わうことのできない経験であった。雑誌コーナーは海外雑誌も取りそろえられており、国内の雑誌のみでなく他国の雑誌を取り扱おうとする新たな視点を学ぶことができた。図書館をユニークにしようとするれば単に図書館としての規模を大きくすることは誰もが思いつくが、電子書籍や海外雑誌を取り扱うという現代に適したアイデアはグローバルな視点から生まれたのだろうと推し量ることができ、自分の視野の狭さを痛感し同時に視点の広さの大切さを再認識することができるよい機会となった。



(ピョルマダン図書館)

日本大使館訪問

文責 新屋貴之

【日時】 2025年2月7日

【場所】 韓国日本大使館

【概要】

海外遠征二日目に私たちは韓国日本大使館を訪問した。普段の生活では大使館の職員の方のお話を聞くことはなく、とても貴重な体験であり、とても充実した時間となった。職員の方にしていただいたお話では主に今年2025年が1965年の日韓国交正常化からちょうど60年ということで、近年の日本と韓国の関係性についてお話していただいた。そしてこのお話の中で、近年の日本と韓国の関係性について、正の部分と負の部分があることがわかってきた。まず正の部分では岸田文雄政権時の2023年に年一回、日韓の首相と大統領が互いの国で会談を行うシャトル外交を再開したことや今後の日韓外交について両国の複雑な外交問題を抜きにして、より協力し合える外交事項に関して協力していくことで合意したことなどがあげられる。しかし日韓関係には負の側面も存在し、例えば毎週水曜日に大使館前で行われるとおっしゃっていた慰安婦問題に関する反日デモや竹島に関する問題、日本の韓国に対する好感度の高さと韓国の日本に対する好感度の高さの食い違いなどの負の側面が近年の日韓関係でも存在している。こうした日韓関係の負の側面に対して、大使館の方は日韓の両国民の意識の改善が必要であるとおっしゃっていた。この意識の改善のためにはまずは互いの国民性を知ることが大切であることから今回紹介して下さった職員の方は両国の国民の間で行われるスピーチ大会や交流祭りなどを開催し、より両国民で交流し合うことを目的に働いているとおっしゃっていた。

【感想】

今回の訪問では日本と韓国の両国の関係性がどのようなものであるかがより解像度高く、理解できた。そしてその両国の関係性をより良いものとするにはより互いの文化を知っていく必要があると今回の訪問を通じてより強く感じた。その中で、このように韓国に実際に赴き、現地のソウル大学の生徒とバレーボールを通じてコミュニケーションをとれたことは自分の中で韓国に対する印象を大きく変え、より韓国について知るよい機会となった。この経験は自分の中で一つの大きな経験となった。



日本大使館訪問

文責 後藤ひな乃

【日時】 2025年2月7日

【場所】 在大韓民国日本国大使館

【概要】 韓国遠征二日目、我々は韓国の日本大使館を訪れた。当日対応してくださった山本さんから「最近の日韓関係と人的交流」についての説明を受けた。日韓間の国交正常化を果たした1965年の日韓基本条約から今年で60年の月日が経つこともあり、日韓関係はさらに注目を集めている。1998年の日韓共同宣言、2002年のFIFAワールドカップでは初の二か国共同開催をするなど日韓の友好的な関係がうかがえる。一方で2019年7月からの日本による輸出規制強化措置に反発して、韓国内で日本製品の不買運動が起こるなど日韓関係が危うい状態に陥ることも度々見られた。総じて日韓の良好な交友は、岸田文雄元首相と韓国のユンソンニョル大統領の友好関係によるものが大きいだろう。首脳会談を計12回重ね、国交正常化から60年に先立って日韓の協力と交流を持続的に強化する方向性を示している。両国で日韓関係についての世論調査を行ったところ、日本では日韓関係が回復していると回答する人の割合が高かったが、韓国ではいまだ関係が回復していないと回答する人の割合が目立ち両者の意識の差異がみられた。しかし、両国の国民はいずれも相手国の大衆文化に多く触れるほど好感度が上昇することも調査を通じてわかった。山本案の見解として

は、最近の若い世代の人々は直接相手のことを知り判断し、政治によって態度を変えない傾向が強いため、今後の日韓関係の更なる発展に期待できるとのことだ。日本大使館では SNS を通じて情報発信し、日韓フォトコンテストなどの交流イベントを直々に行っている。両者の文化に対する理解を深める目的で開催しているようだ。

【感想】日本大使館を訪れる前までは身構えていたが、いざ訪問してみると想像していたよりも居心地の良い空間であった。日韓関係は度々ニュースで話題になるが、実際の両国の国民が感じていることなどが調査を通じて理解することができたので興味深かった。私は韓国の大衆文化に興味があり、音楽、ドラマ、料理などを通じて韓国がどのような国であり、国民性が日本とどう違うのか理解しようとしている。ニュースの話題だけでは掴めない現地の人々の思いや感じていることに目を向けることが重要だと考えた。このことは韓国だけに限らず、他国に対しても向けるべき姿勢であり、私たち若い世代が担っていかなければならない課題なのだと思う。

日本大使館訪問

文責 入江万愛

【日時】2025年2月7日午前10時

【場所】在大韓民国日本国大使館公報文化院（ツインツリータワーB棟2階）

【概要】文部科学省から出向して在韓国日本大使館一等書記官を務め、主に教育やスポーツを担当されている山本剛様より日韓関係に関するお話を伺った後、部員からも質問を行った。以下、お話しいただいた内容をまとめる。1998年の日韓共同宣言を起点に両国の人的交流が深まりつつも、韓国では度々日本への反発デモが発生し、現在も毎週大使館裏で「水曜集会」が行われている。両国の国民感情についても、日本人の韓国に対する好感度は徐々に上昇しているのに対し、韓国人の日本への好感度は前者より低い状態で停滞している。ここには政治情勢も関係しており、日本政府は韓国における政権の動向に注目している。しかし、両国の若者は大衆文化を通して互いに良いイメージを抱くことが多く、直接的な交流により友好関係を築く事例もある。公報文化院としても、若者を中心とした日韓交流促進のためにお祭りや合唱イベントなど様々な事業を行っている。両国間には歴史や領土問題など「認識の差」により相容れない部分はあるが、このような文化交流の側面から両国民が互いを身近な存在として認識し、歩み寄ることは可能である。そして最後に、一人ひとりが日韓関係活性化のためのプレーヤーとして主体的かつ積極的に交流を深め、学びを得てほしいと我々に向けてメッセージを頂いた。

【事前勉強との関連】

事前勉強として、一橋大学バレー部 OB のお二人からオンラインでの講演会・ディスカッションを開催していただいた。外交に詳しい OB 様からは、米中関係の激化と経済的相互依存が特徴付ける新たな時代に突入した現在、近い立場にいる韓国との協力が求められているとともに、イメージにとらわれず対話を通して相手の意図を理解しようとする姿勢の重要性についてお話しいただいた。韓国勤務のご経験を持つ OB 様からは、現地での生活についてのアドバイスから韓国の政治・社会・経済、日韓関係まで幅広く知識をご共有いただき、韓国の現状を把握するとともに日本社会を相対化して見つめなおすことができた。お二人のお話を通して、国同士の関係を捉えるに際して国家と個人という二つの視点を用いることで、政治的な対立と人的交流を切り離して考えることが可能だと気づき、このことが大使館で山本様のお話を深く理解し、当事者意識をもって考えるにあたり大変役立ったと考えている。

【感想】

一連の学習を通して、これまで以上に日韓関係の改善に対して責任感を持って取り組まなければならないと感じた。現代の政治において若者が主要なアクターとなりうる場面は少なく、日韓関係については他の世代からも期待を受けているように思うが、その分政治と同様に若者の関心を要する問題だと考える。ただし、日本の若い世代は k-pop など娯楽として韓国の文化に日常的に接しており、文化交流へ発展するハードルも比較的低いのではないかと思う。また今回の海外遠征を経て、イメージではなく自分の経験に基づいた認識を持つことの重要性について身をもって学んだ。ソウル市内を案内してくれたソウル大の学生たちはとても優しく、立ち寄った飲食店の店員なども、韓国語が通じない私たちに伝わるよう工夫してコミュニケーションを図ってくれた。私は遠征中、日本人としてどう見られているのかが気になり身構えていた部分があったが、現地の人々との関わりを通してメディアにより形成された先入観が役に立たないことを実感した。今後日本で生活する中で、人との関わりを大切にするとともに、日本と韓国との橋渡し役を担う意識を持ちながら、自らが韓国で得た学びを広めていきたい。



企業訪問（三井物産）

文責 坂上光

【日時】 2025 年 2 月 7 日

【場所】 韓国三井物産

【概要】 三井物産は日本の 5 大商社の 1 つである。同社をはじめとする日本の総合商社のビジネスは、トレーディング（貿易・物流）と事業投資・事業開発（経営）に大別できる。こうしたビジネスを展開する中で、収益性のみならず社会性を重視したビジネスを展開してきた。一般に、韓国では、カントリーリスクとして「外資規制の強さ」がある。例えば、Google や Amazon といった米国企業はアジアの他の国々で成功を収めてきたが、同市場への参入は思うようにできていない。その恩恵もあり、韓国発の NAVER をはじめとする現地企業がその役割を担い、国内で台頭している。一方で、三井物産は日本の総合商社として最も早く韓国でビジネスを始め、韓国にとって外資系企業でありながら受け入れられてきた歴史がある。その証拠に、同国最大の財閥である三星（サムスン）の商事部門の名前は、同社に影響を受け、「三星物産」と名付けられた。韓国三井物産の特徴として、本社への利益貢献の少なさがある。その額は 8 億円で、社員曰くかなり少ない数字である。韓国三井物産の強みは化学品だが、他の分野においては、現地企業の競争力が強いことも少なくない。

【感想】 今回の視察を通して、大きく分けて 2 点の学びを得た。1 点目は、日本と韓国はビジネスにおいて不可分な関係にあるという点だ。Amazon や Google に代表されるような米国企業に対する国内の規制は強い一方で、日本企業に対しては、地理的、文化的、歴史的な親密性から、ビジネス上付き合わざるを得ない現状があるのではないかと考えられる。つまり、政治的な影響を除き、韓国はビジネス的には親日国であると言える。2 点目は、日本の総合商社は、社会貢献性をかなり重視したビジネスを展開しているということだ。韓国三井物産の 8 億円という本社への利益貢献の数字は、日系大企業の韓国支店における利益としてはかなり少ない。そのため、従業員の給与は本社の利益から補填している。こうした投資を本社が許容できるのは、社会性を重視するからに他ならないと考えられる。三井物産は歴史的に韓国の物流を支えてきた責任ある企業として、単に利益を追求する経営はできない。故に韓国の人々から必要とされ続け、今の地位を築くに至った。このことは、日本の総合商社が、グローバルにビジネスを展開する中で、日本のみならず世界から必要とされてきた 1 つの例であると言える。

企業訪問（三井物産）

文責 梶本剛志

【日時】2025年2月7日

【場所】韓国三井物産株式会社

【概要】

2日目は韓国三井物産株式会社に訪問し、駐在員の方からお話を伺うことができた。三井物産は61カ国125拠点に事務所を持ち、全世界にネットワークを築いている企業グループで19る。韓国支社に駐在している職員の方から、三井物産グループの概要や事業内容などを説明して頂き、質疑応答では一橋学生からの積極的な質問が行われ、大変有意義な訪問となった。以下では訪問の概要を総括していく。

お話を伺う中で、まず三井物産という企業の規模の大きさに圧倒した。上にも挙げたように61カ国125拠点に事務所を構え、広大なグローバルネットワークを有しており日本を代表する企業グループであることを再認識した。発展途上国に積極的に事務所を設け、新たなビジネスチャンスを積極的に探っており、さらなるネットワークの拡大を模索しているとのことであった。

以下は、職員の方にご説明いただいた三井物産グループの特徴である。1つの大きな特徴として、商品の分野ごとに事業部が分かれており、事業軸と地域軸が交わって成り立っている組織である、ということが挙げられる。7つのオペレーションセグメントが存在し16の事業本部に分かれており、これらの事業本部と海外の事務所が交わって組織構造化されている。具体的な事業部としては、エネルギーソリューション本部・プロジェクト本部・ベーシック、マテリアルズ本部などが挙げられる。海外の組織の力が強く、海外の事務所ごとに、独自で自由に動くことができるという強みを持っている。一方で、この構造のデメリットとして、管理が事業軸と地域軸の2重になる、指揮命令系統が煩雑になるなどがあげられる。事業経営に関しては、事業開発とトレーディングの両輪でビジネスを展開しており、韓国三井物産では種類も規模もトレーディングを中心にビジネスが展開されていた。韓国と日本の間の仲介として、東アジアや東南アジア、また欧州や米国などの諸地域とのネットワーク構築の役割を担っている。また他の国との共同事業も積極的に行っている。アブダビの企業とクリーンアンモニアを作る事業や、台湾での洋上発電事業など幅広い分野の事業に参入している。

今回の訪問では、三井物産グループの特徴以外にも、日韓の産業の類似点や日韓の共通課題についてお話しいただいた。東アジアに位置し、貿易立国であり、高度な産業技術を要している両国は、抱えている課題にも類似点が多く存在した。主な課題は、エネルギー、食料の問題や経済安全保障、少子高齢化や脱炭素社会の実現などである。韓国と日本の橋渡しのような役割を担い、両国を俯瞰し、ビジネスを用いてこれらの課題へのアプローチを試みる企業の姿勢に感銘を受けた。

企業訪問（三井物産）

文責 椎千悠

【日時】2025年2月7日

【場所】韓国三井物産株式会社

【概要】韓国三井物産は、日本の総合商社である三井物産株式会社が100%出資する韓国現地法人である。日本と韓国間のビジネスや、韓国発のグローバルビジネスの創出に取り組んでいる。韓国三井物産には鉄鋼製品、金属資源、エネルギー、基礎化学品、機能化学品（第1、第2）、プロジェクト、モビリティ本部、食料・流通事業本部の9の営業本部があり、原料から製品まで幅広いビジネスに取り組んでいる。事業形態も商品の輸出入などの貿易から、国内外での韓国ビジネスパートナーと投資事業まで多岐にわたる。

企業訪問当日は、韓国三井物産の事務所内まで通していただき、中山貴央様にお話を伺った。中山様のプレゼンを通して、三井物産株式会社や、韓国三井物産株式会社について学んだ。三井物産には16の事業本部があり、幅広い分野でビジネスに取り組んでいることや、事業部と地域組織が縦と横に交わっているため海外のビジネスが強く海外事務所が独自に動くことができることがわかった。また、韓国三井物産では、主にトレーディングと事業開発・事業経営を行っている。

【感想】私はこの企業訪問を通して、日本から海外にまで事業を展開している企業の目的を知れたと思う。今までに、このような企業の海外の事務所に足を踏み入れる経験はなかったため、海外への事業展開の意味について考えたことはなかった。しかし、韓国でわずか8億円の貢献しかなかったとしても、韓国に事務所がある意味として金銭的な貢献だけを求めているわけではないことを知ることができた。三井物産と韓国の企業、または国全体の繋がりが韓国三井物産の意義であるようだ。トレーディングのほかに行っている事業開発・事業経営は、韓国の企業との共同事業についてであり、やはり韓国との繋がりが大切にされていると感じた。また、三井物産は海外に114もの事務所を持つが、韓国には一つしかないため、より一層韓国三井物産株式会社の存在は、三井物産にとっても韓国にとっても重要なのではないかと思った。

企業訪問（Nidec 韓国株式会社）

文責 梶原慧大

【日時】2025年2月7日

【場所】Cambridge Building 20階

【概要】

2日目の午後は Nidec 韓国株式会社に訪問し、代表取締役会長と管理部長の方々からお話を伺うことができた。会長は一橋大学社会学部の OB で、大変好意的に企業訪問を受けて頂け、訪問中でも気さくに関わらせていただいた。訪問では、単に Nidec 韓国の概要や役割といったものにとどまらず、学生の将来を視野に入れた仕事全般に通ずる考え方や姿勢についてもうかがった。質疑応答では、学生からの積極的な質問に対してお二方が具体的にお答えしていただき大変有意義な訪問となった。以下では訪問の概要を総括する。

会長からのお話は簡単なあいさつと自己紹介の後に『仕事とは?』というテーマから始まった。会長が約 25 年前に入社されたときに配布された資料では『仕事とは「問題解決」の積み重ね』と記され、問題とは人・物・金にまつわる種々の出来事であり、これらを解決するためには 5W1H を見定めて行動することが必要であると伺った。さらにはすべての基本は当事者間のコミュニケーションであり、根本的にはコミュニケーション能力を磨くことが重要であるとも教えていただいた。大学の先輩かつ社会の先輩からのありがたいお言葉に感動するとともに、誰でも身に付けることが可能な基本的な能力を高めることが必要となることに期待と危機感を抱いた。次には Nidec 全体と Nidec 韓国の概要や役割、機能について具体的にうかがった。Nidec は『生・販・開・管』の 4 つに分かれて製造業を行っており、工場が生産を通じて会社の利益を生み出す、営業が売上を上げて会社を大きくする、研究開発センターが新製品を生み出して会社の未来を創る、管理部門が生・販・開のパフォーマンス向上のために組織横断的に接着剤の役割を担うことで成り立っている。韓国国内での開発営業や国内・国外での量産対応では顧客と Nidec 韓国、Nidec 本社、工場が有機的に関わりあって仕様の決定から販売までを行っている。Nidec 韓国は Huawei や Hyundai といった世界的な企業とのビジネスを行えることに韓国ならではの独自性を抱いていると伺い、納得感と Nidec 韓国という企業規模の大きさを感じた。ビジネスポートフォリオは IT から車載・家電へと転換しており、これは日本一般家庭の流れとは逆となっていた。にもかかわらず売り上げを伸ばしていった姿には大企業の鋭い先見の明をうかがえた。

今回の訪問では、上記のこと以外にも、韓国の市場や Nidec の製品についてもうかがった。韓国には様々な分野で世界有数の企業が多く存在することから、製造業にはいくつかの製品の波が生じており、それらを乗り越えるためには将来を見通す力や先入観を排した柔軟な発想、現場へのこだわりが不可欠となる。今までの大きな波を乗り越えて存続をし、100 年後も成長するために自社の理念にこだわり、新しい技術への研究・開発に励む企業の姿勢に感心した。

企業訪問 (Nidec)

文責 岩佐歩実

【日時】 2025 年 2 月 7 日

【場所】 ニデック韓国株式会社

【概要】

ニデック韓国株式会社を訪問し、代表取締役会長の山崎学氏と管理部・SPMS 営業部長の諏佐顕司氏のお話を聞かせていただいた。主な内容はニデック韓国株式会社とその事業についてであり、加えて私たち学生へのアドバイスも頂いた。以下にその要旨を示す。

ニデック韓国株式会社は 1999 年 12 月に江南に設立された精密小型モーターメーカーである。中心的な製品は会社設立当時は IT 関連モーターであったが、現在にかけて車載モーターと家電用のモーターに移行した。しかし HDD 等のモーターに使われた技術を掃除ロボット用モーターに利用するなど、社会の変化に対して柔軟な経営を行ってきた。現在の韓国市場には、脱炭素化の波、ロボット化の波、省電力化の波、物流革命の波、デジタルデータ爆発の波という「5つの大波」が押し寄せており、これらに対応するため、先入観を排した柔軟な発想力と現場の顧客の需要を先回りして商品を作るマーケティングを重視している。営業基本理念は①最大の社会貢献は雇用の創出であること②世の中でなくてはならぬ製品を供給すること③一番にこだわり、何事においても世界トップを目指すこととされている。また、世界の電力のうちモーターが消費する電力は約 50%と言われており、ニデックはモーターの省エネ化を通して環境負荷を低減させることで社会貢献を行っている。

【感想】

第一に、ニデック韓国株式会社の設立の中心的人物である山崎氏のお話を拝聴することができたのは貴重な機会であった。言語の壁がある中で会社を設立し事業を行ってきた経験についてお話しいただき、他者と丁寧にコミュニケーションをとることの重要性を改めて強く感じた。また、IT 関連モーターから車載・家電用モーターへのビジネスポートフォリオの変換から、どんな事業・製品もいつかはピークアウトするため、常に将来を見通し Funeral Biz.(顧客の突発的な需要に応えられる製品作り)を行うことが重要であるとのアドバイスを頂いた。メーカーという業界に限らずとも顧客の需要を常に先回りして商品・サービスを提供するという事は重要であり、今後自身が社会人として働く中で非常に指針になる学びを得ることができたと感じた。

企業訪問 (Nidec)

2年 腰原弘乃

【日時】 2025年2月7日

【場所】 Nidec 韓国

【概要】

当日は Nidec 韓国支部内の会議室で、事業内容のプレゼンテーションを受けた。内容は主に Nidec 韓国株式会社が実際にモーターを販売している顧客の事例と一橋大学を卒業された社長からの今後社会で生きていく上でのアドバイスであった。具体的には、3つのメッセージがあった。第1にコミュニケーション能力の重要性、第2に先を見通す能力の必要性、第3に先入観を排除した柔軟な発想力の大切さである。説明では、コンピュータの進化に伴って、IT分野の売上げが下がることを予想して車載のモーターの開発を進めたことにより売上げ減少の危機を乗り越えることができた体験を元に、「どんな製品でもいつかはピークアウトする」ということを強調されていた。経営者目線での全体を俯瞰した予測や行動の重要性への理解を深めることができ、今後社会に出て問題解決していく上での大きなヒントを得た。質疑応答では5名が挙手をした。本報告では以下、質疑応答の詳細についてまとめる。

【質疑応答】

まず、「コミュニケーションが重要とおっしゃっていたが、具体的にどのような方法を用いているのか」という質問に対し、社長は「会議の際に取引先の方の言葉を文書化しておくことで、後から双方の理解に齟齬が生まれないようにしている」と回答され、もう1人の社員の方は「真実は何かを曲げないことが重要である」とおっしゃっていた。次に、「韓国支社を立ち上げた社長にとって1番嬉しかった瞬間は何か」という質問に対しては「韓国に会社を立ち上げるという貴重な体験をしたこと」という回答をいただいた。また、「IT分野からの切り替えというお話があったがどのように未来の業績などを予想して方針を決めているのか」という問いに対しては、「周りから情報を得て行動している」という回答をいただいた。

【感想】

1から会社を立ち上げた本社の社長の行動からの教訓を得て、共通の意識を持っている会社であるため多くの業績をあげられているのだろうと考えた。多くのお話の中に深いメッセージが含まれており、このような貴重なお話をさせていただく時間を設けていただいたことに対し心から感謝している。

企業訪問（三菱 UFJ 銀行ソウル支店）

文責 河野右京

【日時】 2025 年 2 月 7 日

【場所】 グランドセントラルビル 26F

【概要】

はじめに、三菱 UFJ 銀行ソウル支店の方から UFJ とはどういった会社なのか、ソウル支店ではどのような活動を行なっているのかについてお話しいただいた。三菱 UFJ 銀行ソウル支店では、主に大企業向けの金融サービスを提供しているとのことだった。韓国国内では、国内企業が個人の住宅ローン向け融資などに大きな影響力を持つ一方で、企業にとっては MUFG を含めた外資系の銀行が影響力を強めているとのことだった。その中で、MUFG はトップクラスの外資系銀行とすることができ、韓国国内での影響力は世界的に見ても有数のものである。その後の時間は質疑応答であり、学年を問わずたくさんの質問が飛び交った。就活を経験中、または経験済みの 3、4 年生からは海外で働くことへの疑問や日本の他企業との関わりなどの質問がなされた。一方で 1、2 年生からは就活への漠然とした不安や、ソウルで暮らすことへの純粋な疑問が多く出たのだが、とても親身に寄り添った回答をいただけ、各部署がそれぞれの学びを得ることができた。

【感想】

今回はソウル支店駐在員の方 2 名からお話を伺うことができたのだが、お二方とも一橋大学出身であり、ソウルと一橋との強い繋がりを感じることができた。MUFG がグローバルな活躍をする企業であることは知っていたが、ソウルという身近な海外都市での影響力を具体的に学べたことでよりその認識を強めることができた。今後は機会があれば韓国以外の海外での日本の銀行の取り組みや影響を調査していきたいと感じた。また、質疑応答の際には非常にフランクな雰囲気できつくばらんにお話しただけのため、1 年生や 2 年生からも非常に多くの質問がなされたことが印象的であった。通常であれば、3、4 年生が主体になりがちな企業訪問で、これだけ下級生が主体的に取り組めたことは、それだけ今回の訪問が全部員にとって意味のあるものだったという証拠であるだろう。全体を通して、海外で活躍する日本の企業の実情を学べたことは、今後の自分のキャリアを描く上で非常に意義のあることだったと感じた。今回の学びをもとに、グローバルな視野を持った社会人と慣れるよう、よりたくさんの経験を積んでいきたい。

企業訪問（三菱 UFJ 銀行ソウル支店）

文責 向井蒼太

【日時】 2025 年 2 月 7 日

【場所】 三菱 UFJ 銀行ソウル支店

【概要】

日本の 3 つのメガバンクの一角である三菱 UFJ 銀行のソウル支店に訪問した。一橋大学バレーボール部から男子部、女子部計 18 名が参加し、三菱 UFJ 銀行のソウル支店の日本人お二方からお話を伺った。お話しの前半はお二人の自己紹介から始まり、銀行が社会において具体的にどのような役割を担っているか、また、その役割は日本と韓国でどのように異なるのかなどについて約 20 分お話しいただいた。後半はお二人への質疑応答の時間を設けていただき、部員からの質問にお二人がそれぞれ答えるという形がとられた。この質疑応答の時間が 40 分程取られており、部員のほとんど全員の質問にお答えいただいた。お二人が共に一橋大学出身であるということもあり、フレンドリーな雰囲気での質疑応答が行われ、三菱 UFJ 銀行の普段の業務のことから韓国と日本の文化的な違い、就職活動のことまで幅広くお答えいただいた。

【感想】

前半の企業説明のパートでは、銀行の社会的な役割について図表を用いて大まかな説明があった。また、その役割の日本と韓国の違いについての言及もあり、その中で三菱 UFJ 銀行は韓国国内で首位とはいかないまでも二番手三番手の融資額となっていることを伺い、非常に驚くとともに日本企業の強さを実感した。後半の質疑応答のパートでは、お二人が部員の中から学年ごとに一人ずつ指名していただき、各人がそれぞれ気になることを直接質問できていて、非常に有意義なものになった。私が日本、韓国の文化的な違いを実感した瞬間について質問したところ、実際のエピソードを交えながら丁寧に説明していただき、非常に興味深かった。お二人がなぜ三菱 UFJ 銀行を選んだのかについてもお聞きし、お二人とも銀行ではさまざまな仕事を経験できることが魅力であるとおっしゃっており、非常に魅力的に感じた。全体として質疑応答がメインであった今回の訪問だが、部員全員の幅広い質問に対して、多くの経験をもとに答えていただき、とても実りあるものになった。

企業訪問（三菱UFJ銀行ソウル支店）

文責 林陸

【日時】2025年2月7日

【場所】三菱UFJ銀行ソウル支店

【概要】韓国遠征2日目に一橋大学バレーボール部は2班に分かれて企業訪問を行った。そのうちの片方の班は三菱UFJ銀行へと訪問を行った。そこで一橋大学出身者である高田様と金子様からご説明を賜った。三菱UFJ銀行は日本国内では最大級の規模の銀行であり、50か国1600拠点以上に海外にネットワークを広げていて世界でも上位10番以内に入る大手の会社である。そのソウル支店は1967年に開設されスタッフは日本人約10名を含む総勢200人程度の規模の会社となっている。三菱UFJ銀行は貸出、預金、決済といった3つの大きな業務を行っているが、ソウル支店ではリテール業務など個人を相手に事業を行うのではなく、主に企業金融サービスをおこなっている会社となっている。質疑応答の時間では様々な参考になるお話をしてくださった。例えば、日本と海外での仕事の内容の違いなどである。日本と海外との大きな差の一つは海外では個人の裁量という面であり、海外でのほうが個人の裁量が大きく居心地がよく感じる人もいるということである。またもう一つの大きな差としては言語問題が生じるということである。英語を話すことができないと会社では厳しい状況になるということである。他にも海外にいることの良い側面として国民性を自分で感じるができるということがあるということも学んだ。日本と中国と韓国では国民性が異なるということだ。

【感想】私は三菱UFJでの企業訪問を通じて様々なことを学ぶことができた。まずは海外で働くということについてだ。この企業訪問の時点では私は大学1年生であり就活について本格的に取り組んでいるわけではないが海外で働くことは少し憧れがあった。高田様と金子様からのお話を伺うことで海外の職場の雰囲気やそこでのハードルなどについて知ることができて非常に貴重な経験であったと思う。また、地方で働くということについても伺うことができこれも将来を考える上で非常に参考になるものであったと思う。自分は地方で働くことについて少し抵抗を感じているが地方に馴染むことのできない人というのは少数派であるということを知り少し考えを改めることとなった。他に学んだこととして金融というのはお金を扱う仕事であり色々な業界に関われるということだ。金融はただお金を扱っている仕事だと思っていたのでこれは魅力的であると思った。総じて企業訪問では自分の視野を広げてくれるお話沢山聞くことができ非常に良い経験になったと感じた。

部門 2 : ソウル大学交流

ソウル大学交流総括

文責 王偲叡

【日時】2月9日（土）、2月10日（日）

【場所】ソウル大学校冠岳キャンパス、およびソウル市内

【概要】

9日に交流試合・討論会を行い、10日はソウル大学バレーボール部と合同でグループごとに市内を視察した。

【事前勉強との関連性】

討論会においては、事前に全部員に討論するテーマについてレポート課題を課した。討論会当日は、そのレポートを参照しながら意見交換を行ったため、慣れない英語でも比較的容易に自分の考えを伝えることができた。

出発前に、韓国駐在経験のある弊部OBさんに、韓国情勢についてのレクチャーを受ける機会があったが、そこで学んだことが生かされた。ソウル大学と交流するなかで、ソウル大生と食卓を囲む機会が度々あったが、食事の作法として、皿を持ち上げないことや、箸などを縦に置くこと、お酒を自分ではなく他人につぐこと、横を向いて飲むことなどを実践できた。実際、くだけた場面であったため、そこまで厳密にマナーを守る必要はなかったが、そうした文化の違い自体が話題として盛り上がり、お互いにとって学びとなる一面もあった。

【感想】

全体を通して印象深かったのは、ソウル大学の学生が非常にフレンドリーで、ホスピタリティにあふれていたことである。また、日本語が話せる学生が多く、彼らの日本語力、アニメや音楽をはじめとする日本のポップカルチャーに対する理解度の高さにも驚かされた。日本でK-POPが流行っていることもあり、共感する話題が多かった一方で、討論会のテーマにもあったように、学生生活の違いも垣間見えた。し烈な大学受験競争・学歴社会の現実や、兵役による大学の中断といった、日本では中々感じられない体験を生声として聞いたことは非常に貴重な体験であった。交流試合においても、韓国で使われているボールの種類が日本と違ったり、練習の仕方も異なっているなど、様々な発見があった。また、ソウル大学には選手しかおらず、マネージャーという存在がないため、試合中に私達のマネージャーが試合のデータを記録している様子に興味津々であった。こうした2日間の交流を通じて、文化の相互理解や英語力の向上といった成長が実感できる良い機会となったと考える。



交流試合(男子部)

文責 今村信吾

【日時】 2025年2月8日午後

【場所】 ソウル大学冠岳キャンパス 71-1 号館

【概要】

遠征3日目の午後、ソウル大学の体育館で交流試合を行った。まず、Aチームによる本戦3セットマッチと新人チームによる新人戦3セットマッチが行われた。その後、体育館の利用時間目一杯まで、Aチームが2セット、新人チームが1セットのゲームを行った。私からは新人チームの試合の報告と総評を行い、男子部1年の蛭子からAチームの試合の報告を行う。

新人チームの最初の3セットマッチは、1セット目が22-25、2セット目が22-25とストレート負けを喫した。1セット目は糸長のAクイックによる先制から始まるも、一橋のミスが続き相手に連続ブレイクを許してしまい、5-10と離される。その後は、互いにサイドアウトを取り合う展開が続く、14-19と点差をつけられたまま終盤へと突入する。ここから、北畑のツーアタック、高橋のブロック、藤原のサービスエースと2連続でブレイクし、17-19まで詰め寄った。しかし、相手の連続ブレイクを許してしまい、22-25で第1セットはソウル大学が勝利した。2セット目は、立ち上がりからソウル大学に連続ブレイクを2回許してしまい2-6まで離されるも、一橋も蛭子がサーブのローテーションで3連続でブレイクするなどの追い上げをみせ、10-9と逆転する。しかしすぐに3連続ブレイクを許してしまい、再び一橋が追いかける展開となる。その後は互いにサイドアウトやブレイクを取り合う展開が続く、21-20と逆転を果たして終盤を迎えるが、ソウル大学に4連続ブレイクを許してしまい逆転される。一度サイドアウトを取ったものの反撃空しく22-25と第2セットもソウル大学が勝利し、セットカウント0-2で新人戦の3セットマッチはソウル大学が勝利した。

最後に行われた1セットマッチは、25-14で勝利した。立ち上がり、北畑のサーブが走って相手のミスを生じ、7連続ブレイクを果たし、8-1と大きくリードする。その後も一橋のサーブミスから4連続ブレイクを許すなどでソウル大学の追い上げにあうが、18-14とリードを保ったまま終盤を迎える。ここから再び北畑のサーブが走り、サービスエースや相手のミスにより7連続でブレイクをして25-14と勝利した。

本戦とあわせて、総評を行う。本戦・新人戦ともに、サーブが走ると流れに乗れ、大きく差をつけることができた。普段の練習で使用しているモルテンのボールではなく、ミカサのボールで試合を行ったこと、土足でフロアを歩ける体育館であったためフロアがとてもしずかかったことなど、環境的な慣れが必要であったが、サービスエースをとれる、相手を崩せるサーブを打てたことは大きな収穫である。一方、一橋の失点を具体的にみると、クイックが合っていないかったり、OHのスパイクミスが目立ったりと、来る春リーグに向けて修正を要するプレーも見られた。今後は、各プレイヤーがこのような点にフォー

カスして練習を積んでいかなければならない。

【事前勉強との関連】

討論会の前後や次の日の市内視察で会話していると、韓国では中学・高校で日本のような規模で部活動は行われていないことが判明した。大学入試のことを考えた場合に、推奨されていないようだ。思わぬ部分で、苛烈な学歴社会の一側面を知ることができた。そのため、そのため、大学から本格的にバレーボールを始めたプレイヤーも多いと聞いた。また、多くの部員が兵役を経験していた。それも関係していると思われるが、身長も含めてフィジカル面ではソウル大学が一橋に大きく勝っているように思えた。全体的な印象としては、フィジカル面と技術面が不釣り合いであり、その背景として学歴社会と兵役という韓国特有の事象を感じることができた。

【感想】

本戦・新人戦あわせてセットカウント 4-3 であった。前述したように収穫もありつつ、反省点もある交流試合となり、春リーグにむけてさらなる研鑽を要すると感じた。試合を通じて、日本のチームのような声出しや日本でもみられる OH が内側に走りこむスタイルのバレーボールなど、日本のバレーボールと多くの共通点がみられた。また、試合中に一橋のマネージャーがとっているスコアについてソウル大学側から質問が出たり、プレーについて話をしたりするなど、討論会や合同での市内視察では得られない、スポーツを通じた交流ができ、とても実りのあるものとなった。

交流試合(男子部)

文責 蛭子倫

【日時】 2025年2月8日午後

【場所】 ソウル大学冠岳キャンパス 71-1 号館

【概要】

ソウル大学といういつものとは全く違うなれない環境の中での試合であるとともにボールもモルテンではなくミカサを使用したこともあり、序盤は自陣のミスが散見された。ただし、セットを重ねるごとに自分たちのやりたい形をいろいろ試すことができたり、プレイヤー全員が出場できたり、プレイヤーそれぞれに実りのある機会であったと考える。

本戦第一セット序盤は両チーム硬さが見られミスが見られ、6-5と拮抗した展開になる。しかし、ミドル糸長のクイックやレフト林、ライト蛭子のサービスエースが続き 12-6とリードをつける。その後も相手のサーブミスに助けられながら点差そのまま 20-1

4。終盤、自陣のミスが続き点差を縮められるもレフト山口やミドル島田の攻撃で流れを戻し25-19で勝利。第2セットは序盤から相手のミスとミドル糸長のクイックやレフト林のスパイクと3連続サービスエースなどで勢いに乗り10-2と大きくリードをつける。その後もミドル島田のダイレクト、レフト林、向井の攻撃がさく裂し勢いそのまま22-9。最後もライト蛭子のスパイクやサービスエースにより25-10で勝利。

予定では本戦はこれにて終了であったが、まだ時間があったため本戦はもう2セット行われることとなった。第3セット序盤は自陣のスパイクミスやサーブミスでながらを引き寄せられず拮抗した展開となる。ミドル島田やライト蛭子の攻撃により7-5と流れをつかみかけるも相手のブロックやスパイクに苦しめられ12-14とリードを取られる。その後もレフト藤原やライト蛭子が攻撃を続けるも自陣のミスが終盤まで続いてしまい流れをつかめず23-23。最後もスパイクミスや相手のブロックによって失点し23-25で惜敗。第4セットは序盤から相手のミスが続き4-1と良い出だしをきる。しかし、相手の攻撃がさく裂し5-5と追いつかれる。その後、ライト蛭子のサービスエースやミドル島田、レフト藤原の攻撃が連続で決まり、13-8と一歩前へでる。その後も相手のダイレクトやクイックに苦しめられながら点差を縮められるもレフト向井、藤原、ミドル島田、ライト蛭子ら攻撃陣が次々と攻撃をきめ、24-15と大きくリードを取る。最後もライト攻撃が決まり、25-16でセットを取る。



交流試合(女子部①)

文責 高橋舞衣

【日時】2025年2月8日

【場所】ソウル大学体育館

【概要】

本戦5セットマッチの他に新人戦を行う予定だったが、想定よりも時間に余裕があったため、本戦のローテーションで5セット、2年生以下の新人戦ローテーションで1セットを合計で行うことができた。ネットの高さは210cmと普段より低かったが、一面のみのコート設営だったため広さに余裕があり、長いラリーの続く試合となった。

本戦第1セットは立ち上がり、怪我から復帰したセッター高橋優のサーブで1-2の状況から5-2と走るも、緊張感からか守備が安定せず、中盤は20-19まで一進一退の攻防が続いた。しかし最後は相手のミスが続いて、25-20でセット終了。

第2セットも第1セットの流れを引きずったまま、リードを作れずに19-15と終盤まで競る展開に。守備の乱れは有りながらも、序盤にミドル高橋舞のフェイントが効果的に決まり、個々のサーブの調子が上がると共に徐々に西山・唐澤の両レフトの攻撃が点に繋がるようになり、25-19でセット終了。

第3セットは攻守がかみ合うようになり、序盤から流れを渡さずに25-8でセット終了。4-3から16-3まで唐澤のサーブで走ると共に、第2セットに引き続きミドル高橋舞・千代田の得点も伸び、セッター高橋優のトス回しが光るセットとなった。

【感想】

ソウル大学の選手は総じて高身長で、試合前はかなりの緊張感があったが、結果的に全セット取ることができて安堵すると共に、国や言語の壁を越えてバレーボールで交流することができたことを嬉しくも感じた。また、ソウル大学はボールを足で上げる場面も何度か見られ、繋ぎとしてベストとは言いがたいものの、そのようなボールを落とさない姿勢は見習うべきだと感じた。一方で、立ち上がりの悪さや連続失点の場面でなかなか雰囲気切り替えることができない点など以前からの自分たちの課題も多く痛感した試合となった。チーム全体でよく振り返りをし、商東戦・春リーグに向けた今後の練習に活かしていきたい。



交流試合(女子部②)

文責 唐澤茜里

【日時】 2025 年 2 月 8 日(土)

【場所】 ソウル大学体育館

【概要】

交流試合も中盤に差し掛かり、いつもと異なる会場の雰囲気にも慣れてきた。第 4 セット目、千代田のライトからのスパイクや、高橋(優)のサービスエース、唐澤のレフトからのスパイクで 10-5 と序盤からリードし、勢いに乗った一橋大学は、その後田村のサービスエースをきっかけに 13-9 から 12 点連続ブレイクし、25-9 で第 4 セットを獲得することができた。

第 5 セット目、唐澤のスパイクミスなどで、序盤ソウル大学に 4-1 とリードされたものの、田村のバックアタックで流れが変わった。そこから西山のレフトからのスパイクや高橋(舞)のセンターからのフェイントなどもあり、6 点連続ブレイクし、10-5 まで追い上げたことで、流れが一橋大学に移った。このセットも 4 セット目に引き続き、相手を崩す効果的なサーブが多く見られ、16-7 と点数差を 9 点まで引き離れた。しかし、相手のレフトからのコースを狙ったスパイクをディグすることが出来ず、17-10 と差を詰められる。そんな中で千代田がレフトからのフェイントで流れを取り返し、高橋(舞)のセンターからの攻撃も続いたことで、25-10 で第 5 セットも獲得することができた。

第 6 セット目は新人戦で、一橋大学は 1 年生、2 年生のみのチームで戦った。レフト唐澤・千代田、センター高橋(舞)・近藤、ライト田村、セッター高橋(優)、リベロ腰原というメンバー構成となった。序盤、高橋(優)の 2 連続サービスエースで 4-2 とリードした一橋

大学は、千代田のライトからのスパイクがはしり、9-4と点差を離した。その後、高橋(優)のツーアタックなども決まり、15-6となり、さらに点差を9点まで離した。しかし、相手のストレートを狙ったスパイクや、真ん中に落とす軟打などの多彩な攻撃で連続得点を許し、17-10と点差を詰められた。その後、相手のレシーブミス、千代田のフェイントなどで流れが一橋大学に移ると、唐澤のサービスエースも続き、25-10で新人戦も勝利を収めることが出来た。

【感想】

初めての海外の大学との交流試合で、序盤はチーム内に緊張感が漂っていたが、試合が進むにつれて、会場の雰囲気にも慣れることが出来た。しかし、初めて対戦する相手で、さらに3枚ブロックをするなど、あまり対戦したことのないスタイルのバレーをする相手に対して、試合の中で見つかる課題点をすぐに改善することが出来ず、次のセットにも引きずってしまうことが多くあった。これは海外遠征に限らず改善していくべき点であると思うので、今後の女子バレーボール部の課題として話し合い、変えていきたいと考えている。

また、ソウル大学との交流という面では、試合後の討論会や班別でのソウル市内視察を通して、異なる国の人とのコミュニケーションをどのようにとっていくのかということについて学ぶことができ、非常に有意義な時間となった。

ソウル大学との討論会(男子部)

文責 加藤 豪

【日時】 2025年2月8日午後

【場所】 ソウル大学冠岳キャンパス

まず一班、5、6人の班を7班作り各班で席について自己紹介をした。ひと段落ついたところで二年生プレイヤーの王による司会進行のもと、軽く我々の学生生活を紹介した後、討論会が始まった。

一つ目のお議題は日本と韓国の大学生生活の違いであった。ソウル大学の学生から様々なことを教えてもらった。学期の数が日本は四つで、韓国は二つであること。韓国のバレーは九人制で始まったこと。日本ではバレーボールを始めた人の名前を知らないが、ソウル大学の学生は韓国バレーのパイオニアのことまで知っていた。我々一橋大学バレー部は春と秋の二回リーグ戦があるが韓国は月に一回のペースであること。リーグ戦の名前が地名とその地で有名なものを組み合わせたものであること。韓国は大学が生協運営などのアルバイトを積極的に提供し、学校内で働く生徒が日本より多いこと。それによって奨学金をもらえる

そうだ。ただ、多くの生徒が応募するためなかなか職に就けないという。韓国では学校教育より大学生の教育の方が優れていると考える親が多いようで、ソウル大学のような有名大学の生徒の中には家庭教師として働いている人が多い。決定的な違いは韓国の大学生は在学中に兵役に行くということだ。一年生や二年生のタイミングで兵役に行く。そのため女学生より在学が長い。討論が終わった後、一つの班が選ばれ、三年山口が代表して大学生生活の違いを発表した。

二つ目の議題は韓国の厳しい受験戦争、学歴社会の改善策についてだった。現地の学生によると、ソウル大学の学生の割合は推薦合格が半分。入試合格が半分である。推薦入試では高校の生活や成績を基に審査されるため、人柄をよく見た審査が日本よりも行われていると感じた。ソウル大学の学生の目線からみた韓国の学歴社会の一番の問題点は医学部を目指す学生が何度も浪人してしまうことだという。現在の韓国の受験生の中には医学部にすすむことが大変すばらしいとされており、医学部以外大学ではないという学生も多いのだという。話をしていく中で日本よりも医学部に進学することの価値が高く見積もられていると感じた。この問題に対しての解決策を班で話し合った。ソウル大学の学生が、医者以外にも魅力的な将来はあるのにそれに気づいていないことが問題ではないのかという意見を提案した。一同それに賛成し、多種多様な分野の魅力を児童教育の過程で広めていくことが重要だという結論に至った。実際、ソウル大学に進学するような生徒は学校教育の中で勉強しかしておらず知見を広げるような機会は少ないのです、と学生自身が発言していた。

討論会全体を通して外国の学生とコミュニケーションをとることの大変さを痛感した。互いに共通言語である英語は第一言語ではないため伝えたい言葉をうまく英訳できなかつたら思っていることが伝えられない。そこにもどかしさを感じた。しかし、楽しさも大いにあった。英語で会話できているときは自分の英語が世界で通用すると感じる事ができた。さらに話をする中で、育った環境が違うにも関わらず、考えていることが似ている部分が多くあることに驚いた。これは実際に対話したからこそ分かったことだと思う。ソウル大学の学生はとてもフレンドリーで、我々とにこやかにお話をしてくれた。これからの日韓関係を担っていくのは我々のような若い世代であることを再認識するとともに、良好な関係へと向かう未来を展望することができた。

ソウル大学との討論会(男子部)

文責 糸長篤哉

【日時】 2025年2月8日午後

【場所】 ソウル大学冠岳キャンパス

今回のソウル大との討論会では、日本と韓国両国における学歴社会についてソウル大の方々と議論をした。7つの班に分かれて、二つのお題について議論をした。日本と韓国の大学生生活の違いについてと日本と韓国の入試の違いについてである。それぞれのお題について、30分ほど議論をしてから、そこで出た内容についてランダムに選ばれた2班が発表を

行った。私の班は一橋大学の学生三名とソウル大の学生二人と班を作った。一つ目のお題について話をしても、私を感じたのはソウル大の学生と一橋の学生の年齢の違いである。韓国では人によって異なるが、20歳を超えると約1年半軍役に行く関係で、バレーボール部に入ってから本格的にバレーボールを始めるのは軍役が終わってからとなってしまうのである、また韓国の学生は大学院に行くことも多く、大学院に行った学生もソウル大バレーボール部には在籍しているので、ソウル大のバレーボール部の学生の平均年齢は24歳ぐらいであるという。実際、僕らの班にいたソウル大の学生は一人が大学院の学生で26歳であり、もう一人の学生はまだ21歳であるが数か月後には1年半の間軍役に行くことになっているということを聞いて、日本の学生と韓国の学生の違いを大きく感じた。一方で、日本の大学と大学生活において、似た側面を感じた点もあった。それは激しい大学入試の一方で、大学に入ってから大学入試ほどの熱量を持つことが出来ていないということだ。日本も韓国も熾烈な大学入試競争を潜り抜けているが、欧米ほど単位取得や卒業に大きな労力が必要ではないため、入学してからは勉強だけでなく部活やアルバイト、学外での活動に学生たちは注力しているという。特に学外の活動や大学の勉強以外の資格などの勉強は就職活動の際に重要になってくるため、重要になるということを学んだ。韓国では財閥の力が強く、日本の学生以上に大企業志向が強いため、ソウル大の学生の多くも samsung や hyundai といった大企業に入社する人が多いという。また、日本と同じように韓国においても、以前までと同じように新卒で入った会社に居続けるというような雇用形態から、よりよい給与やスキルアップを求めて転職したりすることが一般的になってきているようだ。

次に二つ目の日本と韓国の大学入試の違いについて私が学んだことは、韓国が日本以上に学歴社会で受験産業が発展しているということである。韓国の方たちは、幼少期から塾に通い、高校生活の大半は受験勉強に費やしているという話がとても印象的であった。さらに韓国では「학원 (ハグウォン)」が一般的であり、夜遅くまで勉強するのが当たり前のようになっているという話を聞き、その過酷さに驚いた。また韓国の受験業界はとても発展しており、多くの学生が塾を多用しており、日本以上に「塾依存」の勉強を行っているということも学んだ。一方で、そのように受験産業が発展していることの利点もある。都心だけでなく地方においても、塾が多いことや、オンラインレッスンが発展しているため、地方に住んでいても教育の機会を得やすいことは、とても素晴らしいことだと感じた。このように韓国の受験が激しいものになっているのは、韓国では学歴社会で大学のブランドがその後の就職や人生の選択肢に大きな影響を与えるため、名門大学への進学を目指すプレッシャーが大きいからである。また韓国の「수능 (スヌン)」は1年に1度しか受けることが出来ず、出願することが出来る大学の数も限られているので、一発勝負の要素が強いため、日本のような私立の共通テストや個別試験があり、複数の大学を受けることが出来る入試の仕組みと比べると、かなり異なっていると感じた。また日本でも学歴が重要視される側面はあるが、近年ではそのような厳しい入試の仕組みだけでなく、学力以外の要素も考慮する AO 入試や推薦入試のような制度が増え、主流になりつつあるという点で日本と韓国の違いを感じ

て非常に興味深かった。

今回の話し合いを通じて、日本と韓国の学生生活の違いや、教育のありかた、社会の価値観の違いについても考えることが出来た。それぞれの制度には長所も短所もあるので、どのように改善できるのかという視点を持つことが大切だと感じた。

ソウル大学との討論会(女子部)

文責 西山湖心

【日時】 2025年2月8日

【場所】 ソウル大学校体育館（71-1 棟）講義棟

【概要】

遠征3日目に、ソウル大学バレー部と一橋大学バレー部が交流を行い、女子部同士・男子部同士で討論会を実施した。本レポートでは女子部同士の討論会について報告する。自己紹介ののち、第一部では「学業」「スポーツ」「学園祭」「休日」について意見交換を行った。第二部では「入学試験の競争激化と学歴社会」について、ディスカッションとプレゼンテーションを行った。各ディスカッションは、学生4～6名のソウル大学と一橋大学の混合グループで行われた。

【事前勉強との関連】

事前勉強として、①事前レポート課題、②外交に詳しいOBさんによるご講演、③韓国駐在経験のあるOBさんによるディスカッションの3つを実施した。

まず、①事前レポート課題では、「日韓の大学生活の違い」と「厳しい受験競争・学歴社会への解決策」について、個人ごとにレポートを作成した。レポートは全員で共有して互いに目を通し、討論テーマについてさらに考察を深めた。

②外交に詳しいOBさんによるご講演では、外交官としてのご経験を踏まえ、日韓の政治情勢を中心にお話しいただいた。どんな交渉も最後は人と人との関係であることや、対話を通して相手の意図を汲むことの大切さを学んだ。「この遠征をきっかけに人の情に触れることができるように」というOBさんのメッセージを受け取り、討論会においても、形式的なやり取りではなく、情で通じ合うディスカッションが実現した。

③韓国駐在経験のあるOBさんにご参加いただき、生活・経済・政治などをテーマに、現役とディスカッションを実施した。このディスカッションを通じて「韓国における親から子への影響力の強さ」など、新たに社会的な視点から日韓関係を捉えることができるようになり、当日の討論会でもより広い視野を持つことができた。また、「昼は反日、夜は親日」といった言葉があるように、韓国側の対日感情には二面性があることを認識し、日韓関係の向

上の難しさを痛感した。一方で、今回の討論会のような、同世代と利害関係なくフラットにディスカッションできる機会の貴重さにも気づき、より身を引き締めて臨むことができた。

【感想】

インターネット上での情報収集とは異なり、実際にソウル大学の学生を目の前にすると緊張感を覚え、事前学習講演でOBさんも仰っていた「最後は人と人の関係である」ということの間を肌で感じるこができた。討論会を終えて得た最も重要な収穫は、「学歴社会」というマクロなテーマから、「バレー部の活動」というミクロなテーマまで意見交換を行い、一貫した知見を得られたことである。例えば、ソウル大女子部は総勢40名ほどの部員のうち、約9割が大学からバレーボールを始めた初心者だった。これは中高でスポーツに取り組む（こができる）女子が少ないこが影響しているといひ、受験競争や学歴社会がこのような形で影響を与えているこがわかり驚いた。韓国では課外活動よりも学業を重んじる傾向が日本よりも強いという特徴について、「季節学期（追加で学費を払い休暇中も講義を受けるこができる制度）」の利用率の高さや、それに伴い休暇中の練習参加が任意である点など、実際の学生生活や部活動の制度に反映されている点も興味深かった。このような気づきを通じて、韓国では依然として勉学を最優先する風潮や競争の激しさが根強く維持されていると感じた。ソウル大学や一橋大学は、一般的に学歴社会の恩恵を受ける側に位置づけられるこもあり、当事者意識を持ってこの問題に向き合う難しさも感じた。しかし一方で、日韓ともに学歴偏重の風潮は若い世代ほど薄まりつつあるこを確認できたこと、そして国を超えて問題意識を共有し、建設的な解決策を共に導き出せたこは、大きな意義があるこ考える。

ソウル大学との討論会(女子部)

文責 高橋優奈

【日時】2025年2月8日

【場所】ソウル大学校体育館（71-1棟）講義棟

【概要】

遠征3日目に、ソウル大学バレー部と一橋大学バレー部が交流を行い、女子部同士・男子部同士で討論会を実施した。女子部は3班に分かれ、各班2名ずつのソウル大学の学生と討論を行った。第一部では、日韓の大学生活を比較するために、学業・スポーツ・学園祭・休日の過ごし方という観点での意見交換を行った。第二部では、日韓両国において問題となっている大学入試競争と学歴社会の原因と改善策についての議論を行い、最後に各班の意見を全体で共有した。

【事前勉強との関連】

事前課題にて日本と韓国の大学生活の違い、厳しい受験競争・学歴社会の改善策について学び、さらに韓国駐在経験のあるOB様による韓国遠征に向けたディスカッションで、実際に韓国で生活される中で感じた韓国の人々の受験への意識や学歴社会への考え方を学んで討論会に臨んだ。韓国の大学の入試システムや大学での勉強の様子、韓国での一般的な受験や大学、就職への考え方を事前に学んでいたことで、ソウル大学の学生の話をより正確に理解できたり、事前勉強だけではわからなかった実際の現地の学生の意見を聞き出すことができたりしたため、事前勉強は充実した討論会の実施に意義のあるものであったと考える。

【感想】

第一部の意見交換について、大学の図書館などの勉強ができる施設が夜遅くまで開いているという意見や、特に女子学生については大学入学以前のスポーツ経験がない人が多いという意見から、韓国の学生生活の中心は日本以上に勉強であるということがうかがえた。韓国の学園祭は学部ごとに行われるという意見からは、韓国の大学では学部ごとのつながりが強く、これは日本の大学ではサークルや部活動といった課外活動でのつながりが比較的強いこととの違いであると感じた。また、長期休暇になると日本へ旅行に行く友達が本当に多いということを知り、日本でも韓国の音楽に興味をもったり旅行に出かけたりする大学生が多いことを考えると、若い世代では日韓両国とも相手国への関心が高まっていることが分かった。

第二部の議論では、韓国の大学入試は高いレベルでの競争となっていて、そのため韓国の受験においてはどれだけ努力して自分の点数が伸びたとしても、周りよりも高い点数をとれるようになっていなければ意味がないという厳しさがあるというソウル大学の学生の意見が印象的であった。日本の大学入試では、合否はほかの受験生の点数との比較により決まるものの、受験においては自分が頑張った点数を伸ばすことにより焦点が当てられているように感じるため、受験競争の厳しさの種類が日韓で異なっていることが分かり、新たな視点を獲得できた。私が参加していた班では、受験競争が激化する要因としては日韓両国とも、就職活動において学歴が重視されるという現実があることがあげられ、これを改善するためには学歴という一つの観点から人を評価するのではなく、多様な観点から個人を評価するように意識改革を行うこと、学歴などの結果のみを重視するのではなく、その結果に至るまでに個人がたどってきた経過やどれだけ成長してきたかという過程をより重視することが必要なのではないかという意見でまとまった。

討論会全体を通して、国を問わず現在社会で起こっている問題を解決していくのは、自分たちのような若い世代であるということを強く感じた。今起こっていることから目をそらさず、今後も主体的に考える姿勢を持ち続けていきたい。

班別行動 9 班

文責 酒井雄太

【日時】 2 月 9 日

【場所】 広蔵市場→聖水→漢江→南山タワー

【概要】 ソウル大学のジャンチャン、ジャンミンに男子部酒井、河野、岩佐の 3 名がソウル市内を案内していただいた。事前に興味がある食事や文化等を共有し、ソウル大学の担当者様にルートを決めていただいた。当日は韓国の伝統的な市場である広蔵市場を視察し、昼食にトッポギとユッケを食べた。その後若者の街と呼ばれる聖水へ向かい、主力産業である美容用品の視察と夕食に韓国を代表する料理であるカンジャン・ヤンニョムケジャンを食べた。ジャンチャンの粋な計らいにより、レンタカーでソウル市内をドライブしていただき、川沿いの景色と南山タワーの夜景を見た。

【感想】 ソウル大学の学生や韓国という国柄の優しさ、おもてなしの心、ホスピタリティを強く感じた。英語でのコミュニケーションだったが、常に私たちの気持ちを配慮しながら案内してくれたことがとても印象に残っている。また買い物や食事をした際の無料サービスの多さにも驚いた。大量のキムチやナムル、スープがおかわりし放題だったり、1つ化粧品を購入するとトラベルセット 1 式や別シリーズの同製品もサービスしてくれるなどサービス品だけで元々の値段以上の価値があるような待遇だった。日本にはおかわりし放題のお店が少なかったり、化粧品を買っても試供品をいくつか入れてくれる程度のサービスが多いため韓国という国柄の優しさに触れたような気がした。加えて、日本から来た私たちに韓国の良さを全て感じて欲しいというおもてなしの心に感銘を受けた。同伴していただいたソウル大学の学生は 2 人とも男性であったが、女性マネージャーやお土産用の化粧品等現地で人気なものを詳しくリサーチしておすすめしてくれた。韓国ならではの経験をして欲しいという思いでレンタカーを借りておすすめの夜景スポットや現地の方がよく楽しんでいるラーメンに連れて行っていただき、ソウルの良さを全て感じて欲しいというおもてなしの心に感激した。

班別行動を通して丸 1 日よりカジュアルかつ深く現地の学生とコミュニケーションをとることができたため、お互いの国の違いや価値観や考え方について理解が進んだ。徴兵制度や現在の政治の不安定化など聞にくいことも意見交換することが出来た。最後には互いの将来の夢を語り合い、より成長して再会することを約束した。



班別行動7班

文責 山口堅大

【日時】2月9日

【場所】江南駅周辺

【概要】活動班7班の男子部山口、高橋、後藤、椎の4名は、ソウル大学女子バレーボール部のミンジ、ジミンにソウル市内を案内していただいた。事前に興味がある食事や文化等をグループラインにて共有し、彼女らにおすすめのルートを決めていただいた。我々の班は韓国のエンターテインメント産業に興味を示している人が多かったため、韓国有数の芸能事務所である、HYBE、JYP、SM エンターテインメントの三社をメインに案内していただいた。昼食は韓国の若者に人気があるパンケーキのお店「BATON」で、夕食は江南駅付近のチーズタッカルビを堪能した。最後にカフェにてお互いの大学生活の様子や、両国における国際的イメージの違いなどを話し合った。

【感想】今回のソウル市内視察は、彼女らの尽力により非常に充実した経験となった。ミンジ、ジミンの案内により、韓国のエンターテインメント産業に関する理解を深めることができた。HYBE、JYP、SM エンターテインメントの三大芸能事務所を巡ることができ、韓国の音楽業界の規模の大きさや、アーティストの育成システムについて実感する機会となった。

韓国の若者に人気のパンケーキ店「BATON」では日本のパンケーキとは異なるふわふわとした食感と、甘さ控えめのクリームが特徴的であり、新鮮な味わいを楽しむことができた。夕食のチーズタッカルビは、濃厚なチーズと甘辛いタッカルビの相性が抜群であり、韓国料理の奥深さを改めて感じた。

視察の締めくくりとして、カフェで大学生活や国際的なイメージの違いについて語り合った。韓国と日本の大学生活には共通点も多いが、学業と部活動のバランスや、就職活動に対する考え方に違いがあることを知り、興味深く感じた。特に、歴史的背景を考えると、日本と韓国の関係は複雑であり、1910年の日韓併合から続く歴史の影響を意識せざるを得なかった。しかし、こうした過去があるからこそ、現在のように学生同士が互いに文化を学び合い、率直に意見を交換できることは大きな意味を持つと感じた。

短い時間ではあったが、現地の学生と直接交流することで、歴史を踏まえつつも、未来志向でお互いを理解し合うことの大切さを実感した。今後もこの経験を活かし、国際的な視野を広げ、より良い関係を築いていきたい。



市内視察（班別行動）

文責 松本希海

【日時】2025年2月9日

【場所】東大門、梨泰院、江南

【概要】ソウル大学の方にソウル市内を案内していただき、現地の建築や食文化に触れた。東大門に集合し、昼食後に東大門 DDP・清溪川を視察。夕方からは梨泰院へ移動し、中心地を散策した。

【感想】

東大門：東大門は朝鮮王朝時代に現在のソウルを保護する城郭に設置された城門のうち、東側に建てられたものである。市街地から少ししか移動していないにもかかわらず伝統的な街並みと立派な門があることに驚いた。遠くから見てもわかる模様の細かさが、当時の建築様式の特徴がよく表れていると感じた。また、東大門の近くにはタッカンマリ横丁という、タッカンマリ（韓国風水炊き）を扱うお店が集まるエリアがあったため、昼食にタッカンマリを食べることができた。



写真1 東大門



写真2 タッカンマリ

東大門 DDP：東大門デザインプラザは運動場の跡地に 2014 年に建設されたソウルのランドマークである。デザインしたのは東京の新国立競技場の設計に携わっていたザハ・ハディット氏で、3次元の立体設計技法を用いて設計された非線形が特徴的で、東大門とは対照的になっている。周辺のビル群とも相まって近未来的な雰囲気があった。



写真3 横から見た東大門 DDP

梨泰院：こちらは古くから米軍基地の町として発展してきたということもあり、多国籍レストランがととても多かった。街全体でポップな雰囲気があり、どの店もネオンが明るく目立つ色になっていたのが印象的だった。また、ソウル大の学生に 2022 年のハロウィンに起きた転倒事故の現場にも案内してもらった。ただの坂道に見えるところで、150 人もの人々が亡くなってしまったということに強く衝撃を受けたと同時に、このような事故を起こさないためにも街の区画整理や入場制限などを通してきちんと対策をする必要があると

感じた。



写真4 梨泰院メインストリート

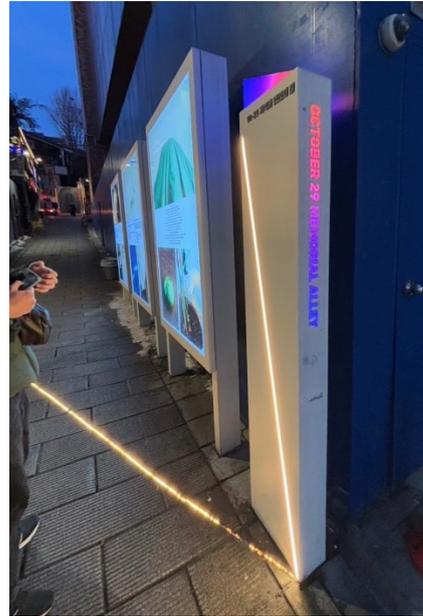


写真5 梨泰院転倒事故の現場

市内視察6班

1年 小林由依

【明洞】

我々の班は、ソウル大学の学生と合流後、まず明洞に訪れた。明洞は歴史上、朝鮮王朝時代には「明禮洞」と呼ばれていたが略して「明洞」になった。また、日本統治時代には「明治町」と呼ばれ、日本人居住区かつ商業の中心地として大変繁栄していた。そして、現代においても、ソウル市内で最も有名な繁華街として名高い地である。明洞を視察して感じたのは、日本の渋谷や原宿に近い雰囲気である。若者にあふれ、流行りの店や安価な屋台が立ち並ぶ姿は日本の渋谷や原宿でもみられる光景であり、親近感を感じた。

我々は明洞にて昼食としてサンナクチを食べた。サンは「生きた」、ナクチは「テナガダコ」を意味し、文字通り生きたタコをぶつ切りにし、ごま油などにつけて食べる料理である。タコの吸盤が口内に張り付く感覚は初めて味わうもので、とても不思議な感覚であった。韓国ではサンナクチのほかにもユッケや生レバーなど日本ではなかなか食べる機会のない生食の料理がたくさんあり、良い経験となった。



【韓服体験】

我々の班は、明洞を訪問後、バスにて移動し、韓服を体験できる店へ移動した。韓服とは韓国の伝統的な民族衣装のことで、女性用の韓服を「チマチョゴリ」、男性用の韓服を「パジチョゴリ」という。「チマ」は女性用のスカートを、「パジ」は男性用のゆったりとしたパンツをさし、「チョゴリ」は上衣をさす。韓服にはさまざまな色があるが、これは儒教を重んじて身分や性別、地位や年齢などによって区別するためであった。現代では正月やお盆、冠婚などのフォーマルな場以外ではほとんど着用されなくなっている。韓服は冬場に着るには非常に寒く、裾も長いので歩きづらい印象を受けた。また、上衣は日本の着物に似ていたが、下にスカートやパンツを履くことに特徴があると感じた。街中にも韓服を着た外国人観光客がしばしばみられ、京都で着物を着て散策するのと似たようなものなのかなと感じた。

班別行動2班

文責 藤原聖也

【日時】2月9日

【場所】安国→北村韓屋村→明洞→ロッテワールドタワー

【概要】市内視察2班の男子部藤原、蛭子、女子部宮川、入江はソウル大学のジュノにソウル市内を案内していただいた。当日は12時頃に安国駅でジュノと合流、2日目に訪問した日本大使館の側を通過してカンジャンケジャン伝統的な韓国料理のお店で昼食を食べた。昼食をとった後は10分ほど歩き北村韓屋村を訪れ、韓屋（ハノク）という韓国の建築様式を用いた家屋を視察し、この様式を用いたカフェに入り古典的な内装の雰囲気を楽しむ。

わった。その後はソウル地下鉄3号線に乗って明洞駅に向かい、韓国におけるキリスト教の重要な場所であった明洞大聖堂を訪問し、ロッテワールドタワーがある蚕室にいき韓国で定番の料理であるヤンニョムチキンを夕食として食べた。夕食後はロッテワールドタワーを登りソウル市全体の夜景を見た。

【感想】今回の韓国遠征での市内視察などを通じて私は新たに二つの気づきを得ることができた。一つ目は日本との類似性である。遠征に行く以前に私は韓国では食事をするときに茶碗を持ってはならないなど日本と違う点が多くあることを耳にしていた。確かに遠征を通して韓国と日本の相違点を感じたが、それと同時に韓国と日本の類似点も多く感じた。例えば、多くの韓国料理には白米があり、茶碗と箸を日本と同じように使っていた。市内視察の昼食で行ったカンジャンケジャンの店では、確かに全体的に辛い料理が多かったものの、キムチ、牛蒡、蓮根、蟹など日本の伝統的な食の中心である野菜や海鮮が用いられていた。またソウルの雑居ビルと高層ビルが入り組んだ雰囲気は日本に似ていて、マクドナルドやセブンイレブン、ダイソーなど日本で馴染みのある店舗も多く存在していた。二つ目は韓国人の人柄の良さである。韓国に行く以前、両国間は複雑な問題を抱えている事もあり私は韓国人に対し失礼であると感じがあまり良くないイメージを持っていた、その為日本人はあまり歓迎されないと思っていた。しかし実際は違っていた。まずソウル大学の学生はとても感じがよく、私が英語でうまく表現ができなかった際もフォロー入れてくれ、日本語や日本のアニメや和食などの文化にとっても興味を持ってくれていた。またソウルで様々な買い物や食事をしたが、いずれの店でもこちらが日本人であっても感じの良い接客をしてくれて、ご飯をサービスしてくれる飲食店もあった。私が今回の遠征で最も感銘を受けたのはこのような韓国人の良い人柄である。

ソウル市内視察

文責 近藤美崎

【日時】 2月9日

【場所】 狎鷗亭 北村韓屋村 景福宮 広蔵市場

【概要】

昼食、夕食において、韓国の伝統料理や地域文化に直接触れ、食文化や礼儀、思考の文化を体験した。北村韓屋村、景福宮にて、韓国の歴史ある建築物を視察し、米国や日本による支配を受ける前の本来の韓国の文化（朝鮮時代の文化）に触れた。いずれの体験も韓国独自の風土や歴史の中で芽生えた文化を十分に体験するものであり、韓国と日本文化の差異、そして共通点をより深く認識できるものであった。

【感想】

韓国の伝統料理であるカンジャンケジャン、一般的に広く食べられているサンナッチや牛肉ユッケを実際に食べた。そこで感じたのは韓国は日本に比べ、魚や肉類を生で食べる文化が浸透しているということだ。日本も寿司を代表し、生食文化が浸透していると思うが、タコは酢でしめる、生肉の提供は基本的に馬肉のみなど、韓国と比べて法や意識の制約が多いと感じる。

これは韓国の寒冷で乾燥の激しい気候により、雑菌の繁殖による食中毒が抑えられるからではないかと思う。風土の違いは食文化に大きな影響を与え、それらの違いは国の文化のアイデンティティを確立させる上で重要になると再認識できた。

景福宮を視察し感じたことは、朝鮮文化の華やかさとそれに伴う朝鮮王朝の権力の強さである。日本史において朝鮮王朝は室町時代の対等な関係性から江戸、明治をかけて徐々に日本の勢力下に置かれていたという関係性の遷移に注目されていた。しかし、今回の景福宮視察を通じ、朝鮮王朝時代に韓国に芽生えていたこの文化についても深く興味を持つことができた。

北村韓屋村視察にて感じたのは、日本の伝統的な建築と朝鮮の伝統的な建築の類似性だ。瓦や木組みの白壁など、江戸時代の武家にも似た、日本の伝統的文化建築と共通点を持っていることを実感した。

今回の視察を通じ、東アジアの国々は同じ文化圏にあることを強く再認識し、食文化や建築物だけでなく、思想や礼儀の文化の共通点についても興味を持つことができた。そしてこの文化的な繋がりを大切にし、現在の国際的な問題についても互いに歩み寄りながら解決していくことが大切だと感じた。

遠征全体感想

文責 山本華乃

討論会では、ソウル大学の学生の英語力の高さに驚いた。また、日本語を話すことのできる学生もいて感心した。日本では特に若者の中で韓国の音楽が人気であるが、ソウル大学の学生も日本の音楽をよく聞くと聞いていた。また、班別行動で韓国の街中を歩いていた際に、実際に日本の音楽が流れていた。韓国の文化だけが日本に流れてきているのではなく、日本の文化も韓国に広まっていることが分かった。

事前に設定されていたテーマである受験制度や大学生活についてソウル大学の学生の話聞いた。韓国の受験制度は日本よりも厳しいため浪人した方も多く、男性は大学在学中に兵役にも行くので、日本の大学よりも卒業するのに時間がかかると聞いていた。25歳の

方もいて驚いた。いつか韓国的高校生や大学生も、受験や兵役にとらわれずに、学生生活をもっと楽しめるようになったらいいなと思う。

ソウル大学の学生とバレーボールの話もした。韓国では毎月バレーの試合があり、大学ごとにどの大会に出るか決められるそう。また、6人制の大会も9人制の大会もあると言っていた。6人制と9人制の両方の練習をするのは大変そうであるが、9人制にはたくさんの方が出られるのでいいと思った。

4日目の班別行動では、念願であったチマチョゴリを着ることができた。スカートの裾が広がるデザインがとてもかわいかったが、生地が薄くかなり寒かった。韓国は寒いのになぜチマチョゴリには防寒性がないのか疑問に思ったので調べてみた。韓服や和服は洋服に比べて動きづらく機能が悪い。和服は場合に応じたバリエーションができていったが、韓服は改良されるのではなく、代わりに洋服が普及していったことがわかった。また、そもそも着る機会が結婚式や葬儀くらいである上に、キリスト教徒も多いため洋式のことも多いそう。確かに同じ班のソウル大学の方もほとんど着たことがないと言っていた。

今回の韓国遠征では外国の学生と交流して、バレーボールをして、韓服を着たり韓国料



理を食べたりと文化にも触れることができた。ソウル大学の方がプレゼントしてくれたイチゴとマスカットのタンフルがおいしかった。同じ班の方は来年日本に旅行に来るそうなので、その時はおもてなししたい。

遠征全体感想

文責 千代田奈々

本遠征では、5日間を通じて韓国の多様な側面に触れる機会を得た。ソウル大学への訪問では、現地の学生との交流を通じて、韓国の教育環境や学生の意識の高さを実感した。特に、英語を用いた討論会では、自身の英語力と韓国の学生の英語力との差を痛感し、日本と韓国の英語教育の在り方について考えさせられた。また、街中でも流暢な英語を話す人が多く、

韓国の国際的なコミュニケーション能力の高さを目の当たりにした。これは、教育制度の違いや英語教育への取り組み方の違いが大きく影響していると考えられ、今後の日本における英語教育の在り方についても再考する契機となった。

韓国の社会状況についても理解を深める機会があった。4日目の市内視察では、街中でのデモ活動を目撃し、韓国国内の政治情勢の不安定さを実感した。特に、若者層が積極的に社会運動に参加している様子が印象的であり、政治や社会問題への関心の高さが感じられた。一方で、韓国の若者との会話を通じて、日本文化に対する関心が高いことも知ることができ、日本と韓国の文化的な相互影響について再認識した。特に、日本の音楽やアニメ、ファッションなどが韓国の若者の間で人気を集めていることが分かり、両国の文化交流の重要性を改めて認識することとなった。

また、韓国の人々の親切さにも触れることができた。ソウル大学の学生をはじめ、街中で接した人々は非常に親しみやすく、積極的にコミュニケーションを取ろうとする姿勢が印象的であった。公共交通機関を利用する際や、道に迷った際にも親切に対応してくれる人が多く、韓国の人々の温かさを実感することができた。このような経験を通じて、異文化交流の意義を改めて感じるとともに、国際社会の中での相互理解の大切さを学ぶことができた。

本遠征を通じて得た経験は、単なるバレーボールの技術的な向上だけでなく、異文化理解や語学力向上にも寄与するものであった。韓国の現状を直接体感し、多角的な視点を持つことの重要性を学ぶ貴重な機会となった。また、韓国の学生との交流を通じて、主体的に学ぶ姿勢や積極的な議論のスタイルにも刺激を受けた。事前学習では、韓国には日本に対して嫌悪感を抱く人が多いと認識していたが、実際にはそのような印象は受けなかった。ただし、一部には反日感情を持つ人がいることも事実である。このような状況の中で、未来世代である私たちが日韓関係の改善に責任を負い、両国の文化交流を通じて関係をより良いものにしていくことが求められると強く感じた。今後の活動においても、今回の学びを活かし、より広い視野を持って取り組んでいきたい。

III 事前学習

総括

文責 王徳勲

今回の韓国遠征にあたって、主に「OBの方々による講演・討論会の事前レポート課題・韓国語学習企画」の3本柱で事前学習を行った。

OBの方々による講演は、政界・財界でご活躍される弊社OBお二方のお力添えを頂き実現した。外交に詳しいOBさんからは国際社会の趨勢、今後の日本の行方、日韓協力の可能性についてご講演頂き、韓国駐在経験のあるOBさんからは韓国現地でのアドバイス、韓国の過酷な受験競争、韓国の政治・経済、日韓関係についてお話を伺った。どちらの勉強会においても現役部員からの質疑応答の時間が設けられ、部員が主体的に学びを得られる機会となった。

討論会の事前レポート課題は、ソウル大学バレーボール部との間で企画された英語による討論会に備えて、部員の前提知識の獲得・共有・整理を目的に行った。各自、討論会で話し合われるテーマ（「日韓の大学生生活の違い」、「厳しい受験競争と学歴社会の改善策」）について、A4一枚以上のレポートを作成することを課題とし、なかには討論会本番に備え、英語で作成する意欲的な部員も見られた。

韓国語学習企画は、ソウル大学や現地の方と接するなかで、英語だけでなく現地語で交流することで距離を縮めやすくしたり、新たな言語に触れることで学びを得ることを目的に、部員が当番制で韓国語や韓国について部内で情報共有するというものである。私たちはこれを「毎日韓国語」と名付け、遠征前の一定期間実施した。

以上の3本柱で事前学習を行い、今回の遠征における学習効果、国際交流の充実度を上げることに成功したと感じている。以下では、部員が作成した事前レポート課題や毎日韓国語の内容を紹介する。

事前学習まとめ（OB講演・事前課題）

文責 大川碧渚

【概要】

本遠征では事前学習として、ソウル大学の学生との討論会で扱う2つのテーマについて事前に調べ学習を行った。1つ目のテーマは「日本と韓国の大学生生活の違い」で、2つ目のテーマは「厳しい受験競争・学歴社会の改善策」であった。各自2つのテーマについてA4用紙1枚程度にまとめ、知識を深めた。1つ目のテーマについては、韓国では良い企業に就職するためには高いGPAが求められ、部活やサークル、バイトなど自分のしたいことのために比較的自由に時間を使う傾向にある日本に対して、大学入学後も勉学に励む学生が多いということを知った。2つ目のテーマについては、まず、日本よりも厳しい受験競争がある韓国の大学入試制度について学んだ。受験競争において学校外での教育が必要になることから、富裕層が有利になってしまうという点に関しては日本とも共通しており、改善策は

日本と韓国共に有効なものであると考えられ、より身近な課題として考えることができた。

また、事前学習の一環として、弊部 OB のお二人にオンライン講演会を実施していただいた。外交に詳しい OB さんの講演会では、日韓関係について、取り巻く国際的状況や歴史的背景を解説していただき、知見を深めることができ、我々がどうしていくべきか考えるきっかけを与えられた。韓国駐在経験のある OB さんの講演会では、日韓の生活の違いや韓国内情について説明していただき、またたくさん質問にもお答えいただき、韓国に対するより実情的な理解を深める良い機会となった。事前学習と OB さんの講演会のおかげで、韓国で過ごす上での最低限必要なマナーを学ぶことができ、また文化や価値観の違いなど、現地の人々と交流する上で必要なことについても理解を深められたと思う。

【感想】

事前学習では、初めて赴く場所の文化や制度を理解しておく必要性が実感できた。例えば食事における小さなルールでも、守らなければ現地の人を不快にさせてしまう可能性はあるし、自分も逆の立場だったら良く思わないかもしれないため、自分たちがその場のルールに従うことが必要だと感じた。現地の人々と交流する上で、こちら側がそうした向こうの文化や制度に則って行動することで、友好的な関係が築けるのではないかと思う。最初はソウル大学の学生に失礼がないようにしなければと思わず不安もあったが、彼らは私たちにとても友好的で、調べただけではわからない韓国の文化について様々なことを教えてくれた。歴史的関係から反日感情を抱く人がいるということも事前学習において学んでいたため、このような交流はとても嬉しいものであり、実際に交流しなければわからないこともたくさんあるということも学べた。

今回の遠征で、日本と関わりの深い韓国の文化について多くの知識を身に付けることができた。ソウル大学の学生との交流を通して、歴史的背景や世の風潮について知識として持つておくことは重要だが、誰とどのように関わっていくべきか自分で考えて行動していく必要があると感じた。

事前学習まとめ

文責 北畑嵩虎

【日時】

事前課題：1/15 締切とし、各自行っている

OB 講演：2024/2/1 19:00~20:00

【場所】

OB 講演：zoom ミーティング上にて

【概要】

事前課題については、ソウル大学との討論会の際に討論する内容について事前に調べたものをまとめているものとなっている。テーマ①「日本と韓国の大学生生活の違い」について、

部員の多くが言及していたのが「教育システムの違い」「日常生活の違い」「就職活動への姿勢の違い」の3点であった。日本の大学の多くは広く学べる範囲が設定されており、学生は専門外の分野を学びやすい傾向にあるのに対し、韓国の大学の多くは専門科目を修めることが重視され、選択科目が少なく設定されている傾向にあるという違いがある。韓国の大学では深く学ぶ必要があるため、授業時間外での学習時間を多くとる学生が多い。これにより、日本の学生は自由時間が多く、その時間をサークル・部活やアルバイト、学生間でのイベントなどに割く傾向にある。対照的に韓国の学生は自由時間が少なく、さらにその時間を就職活動に有利に進められるようなスキルを身に着けるのに割く傾向にある。韓国では学力が重視されることで大学生活が就職活動と密接に関連し、インターンシップなどに2年生のうちから参加したり大学で良い成績をとることで就職活動が有利に進むことが違いを生み出している大きな要因だと考えられる。このように違いはあるものの、両国はともに厳しい学歴社会であり、その重圧が大学生にもかかっている。これらの問題の克服のために、テーマ②「厳しい受験競争・学歴社会の改善策」において部員の多くは大学入試や就職活動の形式を多様にすることで学力のみを基準として評価しないようにすることや、大学生のメンタルヘルスケアを充実させることで学生の心理的負担を少しでも和らげることが有効な手段だと述べていた。

OB講演について、韓国駐在経験のあるOBさんによるzoom上での講演を1時間ほど聴講した。韓国の生活や政治・経済の現状について多くお話しして下さった。

【感想】

事前に知識を入れておくことで討論会の際に意見交換がはかどったり、思いつかなかった解決案などが出てとても有意義なものにて、下調べの重要性を再認識した。またOB講演の中で、韓国では、民間企業では大企業に入ることが良しとされており、それがより過酷な就職競争、それに付随する受験競争の構図を作り出す大きな要因であること、現在韓国ではユン大統領の弾劾裁判が行われており、第一党が頻繁に入れ替わる関係上おそらく次の政権は反日的な政策を掲げていくことになるであろうことがお話の中で特に印象的だった。

～事前レポート課題～

2024 年度海外遠征 事前準備レポート

男子部 2 年 今村信吾

テーマ①：日本と韓国の大学生活の違い

日本と韓国の大学生活の違いは、2つの面から考えることができる。

1 つ目は、休学が当たり前となっていることである。K-POP アイドルや韓国人スポーツ選手をめぐる兵役の話題が日本でも度々取り上げられるように、いまだ戦争状態にある韓国では男性は 2 年間の兵役の義務の遂行が憲法で定められている。この期間はちょうど大学在学時に重なるため、韓国の大学に通う大学生の多くは兵役のために休学するのだ。また、韓国の就活はいわゆる即戦力の人材を求める傾向が強いため、大学在学中に資格を取得することやインターンで経験を積むことが就活を勝ち抜くために必要なのだ。また、GDP の 60%以上を貿易に頼る韓国では、社会において英語は必須のツールである。そのため、留学への意欲は日米中韓の 4 か国の若者のなかで観光の若者が一番強いという調査結果もあり、休学をして留学するというのも一般的なのだ。

2 つ目は、学業での競争である。前述したように韓国の就活は即戦力を求める傾向が強いが、これに加えて、GPA も就活で必要な要素となる。3.7/4 以上が大企業への就職の目安とされており、成績は相対評価なので、学生は日々の授業を必死に受けるだけでなく、テストが近づくと 24 時間開放の大学の図書館やカフェなどで勉強する。

このように、日韓の大学生の相違点は、兵役や就活のような社会のシステムの相違に由来するものが大きい。

テーマ②：厳しい受験競争・学歴社会の改善策

日本と韓国とでどちらで受験競争が激しいかと問われたとき、日本人であれば韓国と答える人が多いだろう。韓国の大学受験シーズンには、日本でも警察に試験会場に連れて行ってもらった受験生の様子が度々テレビで放送されている。この警察による受験生の送迎が印象的な熾烈な韓国の受験協競争は、「平準化」という政策によって引き起こされていると言われている。

「平準化」政策とは、ソウルや京畿道、釜山などの都市部を中心に、実質的に中学・高校への進学を無試験で行うことである。この制度によって、いわゆる「学歴」を左右する試験が大学受験に一本化されてしまったため、熾烈な受験競争が起きているのだ。また、この平準化政策によって、名門校が集まる江南地域は教育に有利とされ、富裕層の家庭が江南に移住しようとする。そのため、江南の地価は上がり続ける一方であり、ここに、受験における家庭の経済状況の差が現れる。加えて、平準化政策の外に置かれた高校をめぐっても貧富の差が顕在化する。「特殊目的高校」や「自立型私立高校」などは、実質的に富裕層の英才教

育機関として機能しており、これらの学校から「SKY」と呼ばれる有名大学などへ進学することが一般化されている。このように、韓国の熾烈な受験競争の裏には、政策的な綻びと学歴と富の格差の再生産という問題が隠されている。

このような問題は、日本でも起きているといえる。東京大学の合格ランキングの上位は、灘高校を除けば東京の国立・私立の難関中高一貫校によって占められ、これらの中学・高校に進学しようと思えば、小学校中学年からの塾通いが一般的なルートとなっている。また、このような中学校・高校に入学しても、大学受験に向けて塾に通うことが当たり前となっており、「学歴」を得ることには家庭の経済状況が大きな影響を与えている。また、昨今は上述のいわゆる一般試験による大学進学以外に、総合型選抜などと呼ばれる進学スタイルも一般化した。しかし、この受験形式に特化した塾が現れるなど、やはり受験・「学歴」の獲得には経済的な格差が大きな影響を与えている。

以上のように、日韓ともに受験の裏には、経済問題が付きまってくるが、これらを根本的に解決するには、「大学」という価値観に縛られない社会を形成することが必要なのではないだろうか。偏差値の高い大学に入学したから、高年収の企業に入社できる。大学を卒業することで、安定した職を手に入れられる。このような風潮を改善することが、受験競争と経済格差という問題を解決するのではないだろうか。

男子部 1年 藤原聖也

① 日本と韓国の学生生活の違い

私は日本と韓国の大学生生活の違いとして2つの点に注目した。1つ目は学生の勉強意識の違いである。日本の場合、大学によって多少の差はあるものの大学合格までの受験勉強が山場であり、多くの学生が勉強中心の生活から離れサークルやバイトに注力する。一方韓国では多くの大学生が勉強中心の生活を送る。図書館が24時間空いており、試験期間はたくさんの生徒が泊まりこみで勉強している。理由としては韓国の就職状況が挙げられる。韓国企業は日本と違い即戦力を重視する為、インターン、留学等の経験が求められるのである。

二つ目は韓国の学生はお酒をよく飲むということである。韓国の法律で19歳から飲酒が可能で実質的に1年生から飲むことができる。そのため韓国の学生は飲酒率が高く、ビールや焼酎などの度の高いお酒を好む。また韓国ではソジュという度の高いお酒が有名で大学生はよく飲むようである。韓国の有名な飲みゲームとして「369 (サムユック)」というものがある。参加者がリズムに合わせ1から数字を読み上げ、3、6、9の数字は言わず手を叩く。13や29でも手を叩いて間違えた人が負けというルールである。

② 厳しい受験戦争・学歴社会の改善策

現在の日本における学歴社会の問題点として私はある点に着目した。それは都市と地方間の地域格差という問題である。関東地方や関西地方は人口が多く、高校、大学が多い一方、地方では都市圏に比べ進学の実選択肢が少なく、進学の為に上京しても一人暮らしが必須となり経済的負担も増えてしまうのである。この問題点の解決策として私が考えたのは大学の講義などのリモート参加の促進というものである。これによって地方出身の人々は本来通うことが難しい大学の講義を受けることができる。この形態で卒業資格を獲得できるようにすれば、学歴社会における地域格差につながるだろう。しかし問題点も多い。明確な課題としては、大学の講義に出席して授業を受ける形で卒業資格を得た生徒と同様の学歴とするべきなのかというものがある。この部分に関しては議論の余地があるだろう。

男子部 1年 椎 千悠

テーマ①「日本と韓国の大学生生活の違い」

私は大学生生活における日韓の違いについて、勉強意識の差に注目した。韓国では幼少期から大企業への就職のために多くの親が子供に勉強させ、過酷な受験競争を乗り越えて大学に進学させる。韓国では GPA が 3.7 以上でないと大企業での就職は難しく、大学での成績評価も相対評価なため、多くの大学生が熱心に勉強に取り組んでいる。日本では熱心に勉強してつらい思いをしながら受験を乗り越えて大学に進学しても、入学後は部活やサークル、アルバイト、遊びなどに多くの時間を費やす学生が多い。一方韓国ではサークル活動を行わない学生が多く、大学生生活のほとんどの時間を勉強やインターン、資格取得に費やしているところが日本との大きな差だと思う。韓国では大学の授業で前の席に座るために開始時間より早く来て死に物狂いで授業を受け、授業中に寝ている生徒はいない。また、大学の図書館は 24 時間開いているため、テスト前は泊まり込みで勉強する生徒も多く、シャワーを浴びる時間もないときはパウダーで髪の毛の油分を誤魔化す人もいるほどだ。また、学科内の繋がりが強く、おそろいのジャケットを購入し、クアバンと呼ばれる自由に集まれる学科ごとの部屋もある。日本に比べてサークル活動が少なく勉強に集中する分、学科ごとの繋がりが大切にされているのだと思った。

テーマ②「厳しい受験競争・学歴社会の改善策」

私は、日韓の厳しい受験競争や学歴社会における問題点として、子供たちの過度な精神的負担があげられると思う。日本では、受験のために親が学習塾に通わせたり、より良い学校に入るために幼稚園や小学校から子供に受験させたりすることもある。大学入試や就職活動となると子供たちの自分の意思が尊重されることも多いが、小学生の受験は本人の意志よりも親の望みの方が大きくなることが多いだろう。一方韓国では、基本的に高校までは受験が行われないため、小さいころから大学入試に照準を合わせて教育する親が多い。大学入試の全国統一試験である大学修学能力試験の際には社会全体で受験生を応援している。日

韓ともに、受験生本人たちよりも周りの大人・環境によって作られた状況であり、それが子供たちに大きなプレッシャーとなっていることが問題ではないかと思う。この問題に対する改善策として、社会の価値観を変えることが一番重要なのではないかと考えた。特定の大学に入学し大企業に就職することだけが成功だという認識を改め、様々な生き方を尊重する社会を作るべきである。厳しい学歴社会が問題視される中、なかなか改善しないのは、この問題について考える人がまだまだ少なく、考える機会がまだまだ足りていないからだと思う。社会を変えるには、ひとりひとりが価値観を変えていかなければならないだろう。

男子部 1年・山本華乃

テーマ①「日本と韓国の大学生活の違い」

日本の大学生活は自由度が高く、サークルやアルバイトなど、学業以外の活動を楽しむ文化が根付いている。一方で、韓国の大学生活は学業や就職準備が中心で、厳しい競争社会の一端を担っている。韓国では大学の学費が高いため、多くの学生が奨学金制度を利用している。成績優秀者への奨学金が多く、学生間での競争をさらに激化させる一因となっている。

それぞれの国の大学生が置かれる環境や価値観の違いが、大学生活に大きな影響を与えていることがわかった。韓国は日本よりも学費が高いのにアルバイトがあまり一般的ではないのはなぜか疑問に思った。学生の間勉強し続けて良い企業に就職できればお金持ちになれるのか気になる。

テーマ②「厳しい受験戦争・学歴社会の改善策」

韓国と日本の受験制度を比較する。韓国の受験制度は主に修能と呼ばれる全国共通試験に依存しており、この試験結果が大学入学に直結する。修能試験は毎年11月に実施される。この日は「受験生優先」となる国家的なイベントであり、公共交通機関の運行調整、警察による受験生の送迎支援、航空機の離着陸制限などが行われる。日本では、共通テストに加え、各大学が実施する個別試験も重視される。また、推薦入試(高校の推薦状を基にした選抜。面接や小論文が含まれる場合が多い。)やAO入試(学力だけでなく、個性や活動歴を重視する選抜方式)など多様な選抜方法がある。学力試験以外の方法で大学に入学するルートが比較的多いのが特徴である。大学の入試は共通テスト後、各大学の個別試験が実施され、試験日程が分散している。そのため、韓国のように特定の日にすべてが集中することはない。韓国の受験戦争は日本と比較しても非常に熾烈であり、学歴社会が生み出す競争の激化と社会的影響が顕著である。一方、日本では多様な進路が選ばれる傾向があり、受験戦争の側面は弱まりつつある。ただし、両国ともに教育環境の改善や学生の精神的健康への配慮が今後の重要な課題となっている。

韓国は日本以上に学歴社会であると言われているが、その理由はこのような受験制度にあるのではないかと思う。多様な選抜方法を設けることで改善できるかもしれない。また、

各大学で個別試験を実施し受験生のチャンスを増やすことで、熾烈な受験戦争を緩和させることが期待できる。

男子部 1 年 糸長篤哉

① 日本と韓国の大学生活の違いについて

韓国の学生は熾烈な大学入試を潜り抜けて、大学に入学した後も成績や TOEIC の点数などが重要視される。そのため韓国の学生たちは入学後も厳しい競争を行い勉強に励んでいる。また、MT とよばれる合宿活動がさかんで、サークルやインターンへの参加も求められる。このように韓国の学生たちは就職の際に必要な実践的な能力を磨くために大学生活を過ごしている。一方で日本もサークル活動などは行われているが強制力はなく大学生活の中で特別にしなければならないことがないのでアルバイトを行ったり、趣味をしたり、するなど大学生活における自由度が韓国と比べて高い。

② 厳しい受験戦争と学歴社会の改善について

大学受験における都市と地方の格差については日韓両国で都市と地方での教育格差が大きな問題となっている。韓国と日本どちらにおいても首都圏の学校や塾のレベルと地方のレベルに大きな差があることや、地方から都心へのアクセスの悪さにより教育を受ける機会が制限されてしまっていることがこの教育格差の大きな原因である。これに対する両国の取り組みには少し異なる点が存在する。例えば韓国では塾の数などを規制する「学習塾規制政策」など政策が行われているが日本の地方においてはそもそもの塾の数が少ないためこのような制限はあまり意味をなさないように思われる。一方で両国で教育格差を埋めるために有効であると考えられるものはオンラインを利用した授業や教育システムの利用がある。これらを用いることで地方でも都心と同じレベルの教育が受けられるようになると思う

男子部 1 年 後藤ひな乃

① 「日本と韓国の大学生活の違い」

日本と韓国の大学生活の違いで最も興味深かったのは、サークル活動の文化の違いである。日本では軽音や映画などの文科系サークルから、サッカーやバレーなどの体育会系まで種類は多岐にわたる。新歓シーズンでは多数のサークルが勧誘を積極的に行い、複数のサークルに所属することで交友関係を広めようとする人もいる。週 2～3 回活動が行われ、大

学祭での発表や飲み会、合宿で親密度が高まる場合が多い。一方、韓国のサークルは同好会として活動しており、日本ほどサークルの種類は多様ではない。学生の多くは学業や資格取得に時間をかけるため、サークルに参加する生徒は限られてくるのだ。サークル活動はあくまで「趣味の延長」として捉えられるため、活動頻度も月に1～2回のサークルが多い。このように日本と韓国では学生のサークルに対する意識が異なるようだ。

②「厳しい受験戦争・学歴社会の改善策」

社会問題となりつつある受験戦争や学歴社会による格差を改善するために、私は教育の多様性を認める制度の導入と企業の採用基準の見直しが必要だと考えた。日本では大学以外にも専門学校や職業訓練校があるが、大学進学よりも社会的評価が低い。また留学は裕福な家庭の子供が中心であり支援制度が拡充しているとは言えないだろう。ここで専門学校の学費を公立大学と同等に引き下げたり、政府主導で専門職の育成や海外留学のための奨学金制度をサポートしたりするのが良いと考える。韓国では日本以上に大学進学が重視され、職業専門学校の評価が低い現状にある。ここで、生徒一人ひとりが本当に自分の進みたい道に進むためにも、国が特定の分野で専門教育を行う学校を認定し社会的評価を上げることが重要だと思う。また、韓国にはスタートアップ文化が存在しているが大学卒業後を前提としている場合が多い。発想力豊かな若者を支援するために、高校卒業後すぐに起業を目指す学生を国が前面多岐に支え、資金提供やビジネス指導を行うことが良いだろう。具体的な政策を通じて、「大学進学だけが成功の道」という風潮を変えることで、受験戦争の過熱を緩和し、社会全体の価値観を多様化させることができるはずだ。

女子部1年 千代田奈々

① 日本と韓国の大学生生活の違い

日本と韓国は、いずれもアジアにおいて高度な教育制度を有しているが、文化背景や社会的条件の違いから、大学生活にはそれぞれ独自の特徴が見られる。その中でも私は特に「休学制度の違い」に興味を持った。

韓国では、日本と比較して休学する学生の割合が非常に高いが、これには、「韓国国内の就職市場の変化」と「兵役制度の有無」という二つの理由がある。まず韓国国内の就職市場の状況について、韓国では2020年前後から大企業は定期採用を廃止する傾向にある。例えば、電子製品で有名なLGは2020年下半期を最後に定期採用を廃止し、通年採用に転換した。この傾向によって、韓国市場での採用規模が減少した一方で、採

用時の学生の能力が今までよりも評価されることとなった。そのため、韓国の学生は特定の選考知識よりインターンなどの職務経験を積むことを重視し、休学する人が増えているという。一方、日本において通年採用はまだ本格化しておらず、学業より職務経験を優先する学生は少ないように思える。実際、令和5年度の文部科学省の調査によると、日本の学生の主な休学理由は「海外留学」「精神疾患」「経済的困窮」と、韓国における休学理由とは異なり、日本では職務経験を目的とした休学は一般的ではなく、学生生活の中で学業を優先する傾向が強いことが窺える。

また、日本と比較して韓国の方が「休学」ということへのハードルが低い、というのも、日本と韓国の休学率の差異を生む理由として挙げられる。韓国では、男子学生に対して兵役が義務付けられており、多くの学生は大学2年生または3年生の時期に休学し、兵役に就く。兵役期間は通常2年間であり、その後、復学して学業を再開するのが一般的である。そのため、韓国において休学という制度は、大学生生活と兵役を両立させるための重要な仕組みとなっている。韓国の大学は男子学生が兵役のために休学、入隊、除隊、復学を繰り返す空間であるため、日本と比較した時、休学に対するハードルが低い結果として、韓国では休学が個人のキャリア形成やライフステージの一環として自然に受け入れられており、学業と社会経験を柔軟に両立させるための手段として位置づけられている。

② 厳しい受験戦争・学歴社会の改善策

日本と韓国では、教育において学業成績が重視されており、教育の多様性が十分に確保されていない。この結果、学生が進路を選択する際に学問分野の選択肢が狭まるだけでなく、将来のキャリア形成にも影響を及ぼしている。特に韓国では、全国統一試験である「大学修学能力試験（スヌン）」が、学生の進学やキャリアの大部分を左右する重要な要素となっている。一方、日本では「大学入学共通テスト」が同様の役割を果たしているものの、学生の進路選択において高校時代からの科目選択が影響するため、特定分野への偏りが見られる。韓国の教育システムは、特に特定の名門大学への進学を目指す構造が顕著であり、これが受験戦争の過熱を招いている。この過程で学生は、多様な学びよりも試験対策に集中せざるを得なくなってしまう。一方、日本では特定の大学を目指す競争は韓国ほど激しくないものの、大学入試における画一的な評価基準が、学生が多様な学問を自由に学習することを妨げていると言えるだろう。特に地方では、塾や専門学校などの教育資源が不足しており、学生が多様な学びの機会にアクセスすることが難しい状況がある。

このような学歴・成績重視の画一的な教育を改善するために、二つの策を提案する。一つ目は、大学入試の柔軟化である。現在の学業成績優先の入試方法に加え、ボランティア活動や研究プロジェクトなど、多様な実績を評価するシステムを強化するべきであると考えられる。現在、日本では「大学入学共通テスト」のほか、AO入試や推薦入試も取り入れ

られているが、依然として高校での成績が重視されている。評価基準を学業だけでなく、スポーツや、高校で扱う科目を超えた学問などに拡大することで、学生が本当に学びたいことを学べる環境にすることができ、教育の多様性を広げることができる。

二つ目は、キャリア教育を充実させることである。日韓ともに、多くの学生が進路に迷い、大学進学後も自分の適性を見つけられないまま卒業するケースが見られる。韓国では高校の段階から大学入試を意識した進路指導が行われているが、キャリア教育が不足しており、大学進学後に職業選択に苦勞する学生が多い。日本でもキャリア教育が進められてはいるものの、地域や学校によって実施内容に差があるため、一貫したサポートが不足している。そこで、両国とも、高校段階からより充実した職業体験やキャリア相談を実施するべきであると考え。早いうちから将来のビジョンを描けるようにすることで、学生が試験対策だけに偏らず、幅広い分野に関心をもつことができると考える。また、高校だけでなく、大学でのキャリア教育もより推進すべきであり、例えば、インターンシップを単位として認定し、実社会での経験を学業に活かせる仕組みを整えることが重要だと考える。

これらの施策を通じて、教育の多様性を高めることで、今の学歴社会や厳しい受験戦争といった社会問題を解決することができると思う。

女子部 2年 入江万愛

テーマ①「日本と韓国の大学生活の違い」

ここでは、トピックとして休業期間中の過ごし方を取り上げる。韓国の大学は基本的に2学期制であり、6月下旬から8月末までが夏休みで、12月末から2月末までが冬休みである。インターンや留学、旅行に行くなど日本の学生との共通点もあるが、ここでは日本と大きく異なる2つの事例について説明する。

1、「季節学期」の受講

季節学期とは、通常学期以外の休み期間中に開講される有料の講義である。単位数はおおよそ6～8単位以内であり、3～4週間の間で開講される。一橋大学にも集中講義といった類似するシステムが存在するが、異なるのは費用がかかる点である。1単位につき国立大学では平均2～3万ウォン（2000～3000円）、私立大学では5～10万ウォン（5～10万ウォン）かかる。季節学期を受講する理由として、落とした単位を取り返すため、早期卒業するため、4年生で就職活動に集中するためなどが挙げられる。韓国が日本よりはるかに厳しい学歴社会であることを踏まえると、この制度からも韓国の大学生の意識の高さを伺うことができるだろう。

2、兵役に行く

韓国では、原則18～28歳の男性に国民の義務として兵役義務が課せられている。入隊期

間は陸軍・海軍・空軍によって異なるが約 18～21 カ月で、4 年制大学に通う学生は 24 歳まで入隊を延期することが出来る。しかし、韓国の学生は 2 年生を半ばまで通い、夏休みから休学して入隊するパターンが多いという。また、就職活動における「ガクチカ」にも兵役での活動を使う学生が多いそう。例えば、研修でリーダーを担い優秀賞に選ばれたことや周囲とコミュニケーションを取り合い全員が納得できる勤務編成を組んだこと、自ら国境守備勤務に志願したことが挙げられている。このように、兵役と就活が結び付いている点も日本との違いであると感じた。

テーマ②「厳しい受験戦争・学歴社会の改善策」

ここでは、韓国で社会問題化している厳しい受験戦争・学歴社会をどうすれば解決できるのかについて論じる。私は、一つの案として中途採用の普及を挙げる。ソウル大学、延世大学、高麗大学などの名門校を卒業し、財閥企業に入社することのみが成功の条件となっている現状に対して、中途採用がより活発に導入されることで学歴社会の問題が緩和されると考える。具体的には、前職での経験やスキルを評価する採用プロセスを導入することでキャリア重視の雇用文化を形成することや、新たに政府主導で経験やスキルベースの転職用プラットフォームを設立することである。このような取り組みを通して、財閥以外の企業から財閥企業への転職を活発に行えるようになり、名門大学に入学する以外にも社会的成功が可能であるという認識を広めることができる。

Theme 1

Campus life in Japan and Korea differs in several ways, reflecting cultural and educational nuances. In Japan, university students often enjoy a relatively relaxed lifestyle, as the intense academic pressure tends to ease after high school. Club activities (circles) play a significant role in socializing, and part-time jobs are common. In contrast, Korean campus life often involves a greater focus on academics and competition, with students frequently participating in study groups and preparing for exams. Social activities like MTs (Membership Training) are popular, fostering group bonding, and many students engage in campus protests or activism on social issues.

Theme 2

The competition for university entrance exams in Japan and Korea is intense but differs in its structure and focus. In Japan, the competition is high, but students have multiple chances to take standardized exams like the National Center Test (now the Common Test for University Admissions). Admission often considers a combination of test scores, interviews, and

extracurricular activities. In Korea, the competition is extremely fierce, centered around the Suneung (CSAT), a single, high-stakes exam that significantly determines university admission. The emphasis on this one test creates immense pressure on students, making it a defining moment in their academic journey.

女子部 2 年 高橋舞衣

テーマ①韓国では大学の文化祭に kpop アイドルが呼ばれることが多いそうである。日本でも文化祭に著名人を呼んで講演会やライブを開くことはまれではないが、あくまでも催し物のひとつである事が多い一方で、韓国の文化祭におけるアイドルのステージはそれ自体が目玉であり、彼らにとっては人気になるための登竜門でもあるそうである。日本の文化祭は、受験生にとって各学校の雰囲気を見ることが目的となるが、韓国ではライブがメインイベントとなっており、楽しみ方が大きく異なっているように感じる。

テーマ② 韓国における学歴社会の弊害のひとつとして、教育費の高騰が問題になっており、韓国では少子化にもかかわらず教育費は上がり続けている。また、2019年のデータによると、韓国では大学教育費の61.7%を民間が負担する反面、政府は38.3%のみにとどまる。OECDの平均は反対に近く、要するに韓国では大学の学費が高いといえる。それにもかかわらず、多くの国民が厳しい受験戦争を経て大学に進学する理由は韓国が学歴社会だからであるだろう。

同様の問題は日本でも生じており、たとえば国立大学の1年間の学費は1989年には約33万円だったのが現在では約53万円になっており、私立大学(平均)では約57万円から80万円以上まで値上げされている。日本では公的な支出の中で教育費(教育機関への支出や教員の給与など)が占める割合は8%とOECD(経済協力開発機構)に加盟する36か国で3番目に低くなっている。一橋大学でも燃料費高騰を理由に、試験期間中の土日に図書館の大閲覧室が閉室されたことがあり、資金繰りが厳しいのだろうと感じる。

しかし、学歴社会を背景に大学への進学希望者が多いのをいいことに政府が教育への投資を減らすのは、大学を「学歴」のための機関に成り下がらせ、本来の大学の高等教育機関としての価値を下げることになるのではないか。学歴が就職活動の手段と化している現状を変えるためには、学歴がただの単語ではなく、どこで何を学んだかの内情を伴ってとらえられるようになるべきではないだろうか。そしてそれを実現するには、大学での勉強や研究がより広く価値を認められるようになる必要がある、そういった研究を充実させるためには国家の教育費支出を増やすことが必須だと考える。つまり、国家が教育費支出を増やすことでめぐりめぐって学歴社会の改善につながるのではないだろうか。

女子部 2 年 田村彩佳

①

日韓両学生の授業や試験に関する態度の違いについて考える。日本では、確かに試験前になれば図書館やカフェで勉強する人が増え、机に向かう時間が増えるだろう。しかし、試験前日にだけ詰め込もうとする学生を除き、徹夜で勉強に励み続ける情熱的な学生はごくわずかではないか。私を含めそのような学生は韓国の学生から学ぶべき姿勢があるのではないか。韓国に留学していた方のブログを拝見すると、図書館にほぼ住んでいる学生がいるようだ。韓国は受験競争が熾烈なことさながら、大学入学後も成績をかけた競争が続く。そのブロガーが見かけた図書館にしている学生は、2、3日は自宅や寮に帰らずともなんとかやっていけるような洗顔、歯磨きセットや、仮眠用の枕を持ち運びしているそうだ。また、試験期間は大学の図書館が 24 時間開館していたり、カフェも 24 時間オープンしていることもあるようだ。韓国の大学生は日本の学生よりも膨大な量の勉強をしているにも関わらず、就職も非常に狭き門であるとはよく見聞きする。日本の大学生は、学生として勉強するという本業を疎かにしてはいないか。改めて身の引き締まる思いだ。

②

就職における学歴社会について論じる。就職において、学歴フィルターを考えたり、感じたりすることがあるだろう。HR 総研の新卒採用における企業の「学歴フィルター」の実情に関する調査によると（※1）、企業の 39%がターゲット大学を設定しており、特に従業員が 1001 名以上の大企業ではその割合が 56%に達しているようだ。実際、2018 年卒業予定の就活生のアンケート結果によると、文系の 57%、理系の 51%が学歴フィルターを感じたことがあると回答しています。大企業では応募者数が多く、対応する人事の数が限られているため、学歴フィルターを参考にすることで採用人事の業務を効率化する狙いがあるという。一方で、学歴フィルターは選考の初期段階でしか使われず、人材がグローバル化の中で優秀な人材を採用するためには学歴フィルターが有効でない場合がある。そこで、最近ではスキルや資格も重視するようになってきているという議論もある。いずれにせよ、日本では企業が学歴を見ると明言すると批判される傾向があるため、学歴フィルターをスキルフィルターに変えるなどして、欲しい人材を求人するなどの工夫が必要なのではないか。韓国人ユーチューバーのジンさんによると、SKY の筆頭である「ソウル大学」出身者は一般企業には就職しないそうだ。会社を興すか、政府機関に入って研究をするか、医者や教授になるかである。普通の会社で、ソウル大出身者を見かけることはめったにないそうだ。SKY の他 2 校の「延世大学」「高麗大学」には大学の派閥があるので、サムスン、LG などの大企業に入ることができ、ソウルにある他の大学だと、それらの下のランクの大手企業に入れるようだ。韓国の就職は非常に難しいようだが、実際はどうか。

男子部3年 河野右京

① 日本と韓国の大学生活の違い

日本の大学生として過ごし、韓国の大学生活について調べる中で、それぞれの生活の中心が大学にあるか、それ以外にあるかというところに大きな違いがあると感じた。日本の大学生活は各自の興味のあることに時間を費やすためのモラトリアムとしての期間、韓国の大学生活は即戦力として社会で働くためのスキルや技能を身に着ける期間といった印象を持った。

具体的な違いとしては

- ・アルバイトに従事する学生数の差
- ・学業へ熱量の高い学生数の差
- ・学業成績の就職への影響、卒業への影響
- ・大学在学期間の差（兵役や転学などの影響による）

等が挙げられる。

日本人が大学生として過ごす理由のほとんどは4年間という自由な時間でやりたいことをやるためであり、その4年間で学業や旅行、アルバイトをこなすのである。一方で韓国では学業へ熱心に取り組む学生が多く、学業を通してよい企業に就職する、スキルを身に着けるなどの目的を果たすシステムであると考えられる。したがって大学生活の目的が時間の確保にあるのか、学業にあるのかが大きな違いだと考えた。

② 厳しい受験戦争・学歴社会の改善策

受験戦争の過激化: 現状と改善策

現状の問題点

1. 過度な競争とストレス

- ・大学入試が人生を左右する重要なイベントとされ、学生に過剰なプレッシャーがかかる。
- ・試験準備に膨大な時間を費やし、心身の健康を損なうケースが増加している。

2. 教育格差の拡大

- ・経済的に恵まれた家庭の子どもが、有料塾や家庭教師などの教育支援を受けやすい一方で、低所得家庭の子どもは競争に参加しづらい状況。
- ・都市部と地方の教育環境の格差が、地域間での不平等を助長している。

3. 学歴偏重社会

- ・学歴が社会的地位や就職の成否を大きく左右するため、偏差値の高い大学に合格することが成功の唯一の道と考えられがち。
- ・学歴以外の多様な価値観が軽視される。

4. 試験制度の限界

- ・短時間の筆記試験が合否を決定するため、学生の個性や才能が十分に評価されない。
- ・試験対策が中心になり、批判的思考や創造力の育成が後回しになる。

改善策

1. 試験制度の改革

- ・総合評価型入試の拡大
学業成績、課外活動、面接、小論文などを総合的に評価する入試制度を導入し、一回の試験結果への依存を減らす。
- ・複数回受験の機会を提供
年に数回の試験日を設け、受験生が自分に最適なタイミングで挑戦できる仕組みを作る。
- ・個別能力を評価する試験
科目ごとに専門性や興味を評価する入試を導入し、標準化された一律のテストから多様な形式の試験へ移行する。

2. 教育格差の解消

- ・教育費の支援
公的補助金を活用して、低所得家庭の子どもが質の高い教育を受けられるようにする。無償塾やオンライン学習の普及を促進。
- ・地方教育の強化
地方における教育リソースを充実させ、都市部と地方の格差を是正する。

3. 社会構造の変革

- ・スキル重視の採用制度
学歴だけでなく、実務能力や創造性を評価する採用基準を企業に奨励。インターンシップやポートフォリオを重視する文化を育てる。
- ・キャリアパスの多様化
専門学校や職業教育の地位を向上させ、学歴以外の道が成功への道として認識される社会を作る。

4. 学生のメンタルケア

- ・カウンセリング体制の強化
学校や地域でメンタルヘルスサポートを拡充し、受験のプレッシャーに苦しむ学生を支援する。
- ・受験に対する意識改革
教師や親に対しても受験の過度な期待を控えるよう教育し、学生の多様な可能性を尊重する姿勢を促す。

5. 社会全体の意識変革

・成功の定義を広げる啓発活動

学歴に頼らない成功例をメディアや教育現場で積極的に紹介し、多様な価値観を認める文化を育む。

・生涯学習の推進

大学入学や若い頃の学歴だけでなく、生涯にわたって学び直しが可能な社会を実現する。オンライン教育の活用や企業内教育を推進。

男子部 2 年 岩佐歩実

1. 日本と韓国の大学生生活の違い

韓国の大学では、一つの授業が 3 単位であることが多い。1 単位は 50 分の講義+10 分の休み時間で構成されることが多く、週に 3 コマ分その授業を受けることとなる。この三時間は 1 時間の講義+2 時間の講義というふうに 2, 3 日に分割されることもある。3 時間一続きの授業であることもある。これは日本の大学とは大きく違うシステムである。日本の大学では、一つの講義が 2 単位であることが多く、その授業は週に一コマであることが多い。その代わり、日本の大学では一コマは 90 分以上であることが多い。この二つの制度を比較すると、私は韓国の時間割の方が良いと考える。なぜなら人間の集中力は 15 分程度が限界であり 15 分を超えると徐々に集中力は低下してしまうと言われているため、一つの授業の時間が短く合間に休憩を取れる時間割の方が授業に集中して取り組めると考えるからだ。

2. 韓国の厳しい受験競争・学歴社会の改善策

韓国の厳しい受験競争・学歴社会の一番の問題点は、競争に終わりが無いことであると考えられる。韓国は高校まで入試がないのが一般的であり、高校までのすべての勉強の成果が大学入試で明らかになる。そのため親は大学受験を見据え子供を幼少期から塾に通わせたり家庭教師を雇ったりする。大学受験が近づいた韓国の高校生の平均学習時間は 11 時間弱であり一日のほとんどの時間を使い受験勉強に取り組んでいることがわかる。しかしそれほどまでに勉強に打ち込み名門大学に入れたとしても、大企業に就職するのは非常に難しいという。日本の就活は新卒一括採用でありポテンシャルが重視されるが、韓国の就活生には即戦力が求められる。そのため名門大学に進学したとしても、就活の場で他の高学歴の人と差をつけるため他のスキルを身につける必要があり、多くの韓国

の大学生は1年生の頃から資格取得やインターン、留学などに取り組む。このように、大企業に入れるかが人生を左右するという価値観のもとで、子供たちは幼少期から競争に勝つために勉強し、大学受験の後も就職競争に勝つために努力し続ける必要がある。

この現状を変えるための解決策として、企業が採用を行う際に学歴や資格や経歴などすでに身につけているスキルだけを重視するのではなく、その人の適性或性格、ポテンシャルなども採用の基準にしていくことが挙げられる。日本の就活においてももちろん学歴や資格は重視されるが、面接においては話し方や振る舞い、雰囲気といった観点も評価される。このように企業が学歴以外にも採用基準に取り入れることで厳しい学歴社会は緩和されるのではないか。

男子部1年 小林由依

1 日本と韓国の大学生活の違い

私は日本と韓国の大学の授業とカリキュラムの違いについて調べた。日本の大学は学部にもよるが比較的自由に履修を組むことができる場合が多く、特に文系はその傾向が強い。一方韓国の大学は、カリキュラムが厳密に構成されている場合が多く、特定の専攻においては、履修計画が非常に細かく定められている。また、碎石評価の競争が激しいため、学生は授業内容だけでなく評価基準も気にしている。

2 厳しい受験戦争・学歴社会の改善策

日本の大学入試は多くの場合、大学入学共通テストと二次試験の結果から総合的に合否を決定するのに対して、韓国の大学入試はスヌン（大学修学能力試験）の結果が非常に重要視される。例えば、一般入試（韓国では定時募集）において、日本の場合共通テストの点数が多少悪くても二次試験で挽回することが可能だが、韓国の場合スヌンの点数のみで合否を選別する。スヌンは多くの学生や家庭に非常に大きなプレッシャーを与えている。そこで私は日本と韓国の大学に対し入試制度の多様化を提案する。これはペーパーテストの結果だけでなく課外活動やエッセイ、面接などを入試の評価基準に組み込み、総合的に合否を判断する仕組みを導入することである。日本では私立大学の推薦入試はかなり一般化しているが、国立大学に関してはそうではない。また、奨学金や学費免除の制度を整備し、大学へ通うことへのハードルを下げることもまた重要である。

男子部1年 蛭子倫

テーマ①：「日本と韓国の大学生活の違い」

日本と韓国では大学卒業までの期間が大きく違うことを知った。というのも、日本では留年や留学をしなければ4年間で卒業することが一般的であるが、韓国では兵役や就活の影響から、4年で卒業することのほうが珍しい。韓国の男性は高校卒業後から入隊することができるが一般的には大学二年生から入隊し、兵役が終わってからまた復学生として大学に通うことが多いという。また、韓国では就活準備で休学をする生徒も多い。就職してから一から技術を学べる日本の企業とは違い韓国では即戦力となれる人材が求められるため資格の勉強やインターンのために大学を休学する生徒もいるのである。

さらに日本と韓国の大学生活の違いとして部活動やサークル活動の力の入れ具合の違いがあるということが分かった。日本では学業だけでなくサークル活動や部活動に力を入れる生徒が多い中、韓国では学業専念の大学生活が主流で日本のようにサークル活動が多様にあるわけではなくそういった活動をしている生徒も少ないということが分かった。

テーマ②：「厳しい受験戦争・学歴社会の改善案」

日本と韓国ではどちらも学歴社会が根付いているという問題がある。この問題の原因として大企業に就職するためには高学歴であることが大きな条件になる場合が多いからだ。日本でも学歴フィルターというものが存在しており学歴社会の実態を示している。これを改善する方法としては社会全体として学歴だけでなく実績や能力をより重視した企業側の採用や大学入学方式の適用を行うことが重要なのではないかと考えた。

男子部1年林陸

① 日本と韓国の大学生活の違い

私は韓国の大学の休学をしやすいというところが日本の大学に比べて魅力的であると感じた。この期間を語学留学や資格勉強などと自分のスキルアップに使うことができるということは人生において非常に有効であると思う。しかし、逆にこれを行っている人が多すぎて強制的にやらなければいけないという欠点もあるのかもと思った。また、日本とは違い兵役の義務があるということも個人的には、嬉しくない点であると思った。また、韓国の大学では日本の大学と違って授業の申請が早い順であるということが恐ろしいと感じた。受けたい授業を実力で勝ち取れるというのはあると思うが複数個希望の

授業があった場合物理的に不可能になってしまうのではないかと思った。

② 厳しい受験戦争・学歴社会の改善点

大学受験の就職活動への影響について考える。韓国では就業者のうちの最終学歴が大卒以上となっている人の割合が 50.5%となっている。2020 年の国勢調査によると日本での正社員の最終学歴が大卒以上となっているのは 31.8%となっていて差がかなりあることが分かる。しかし、日本での卒業予定の大学生の 86%が仕事が決まっていて、実際の就職率は 97.6%となっているのにも関わらず韓国では 69.6%である。この韓国の大学の就職率の低さというのが学歴社会の構造に関係していると思われる。これは韓国の人が企業に求める条件が高いということか、雇用の数が足りていないということが原因となっていると思う。改善策として考えられるのは大学ではなく最終的な能力で採用する人を決めるということと、中小企業への支援であると思う。なぜなら、優秀な中小企業が増えたなら大企業に行かないという選択肢が生まれ、それに付随して難関大学に行く必要もなくなっていくと考えられるからだ。

女子部 3 年 宮川遥菜

テーマ①「日本と韓国の大学生活の違い」

現在、私は日本で就職活動を進めている中で、韓国の学生がどのような就職観を持ち、どのように就職活動を行っているのかを深く知りたいと考えた。また、一橋大学には韓国からの留学生も在籍しており、彼らがどのような思いで日本に来ているのかにも関心がある。韓国の学生の就職活動(今回は学生生活の一部と考えている)の事情を理解することで、お互いをより深く知ることができると考えている。

韓国の就職活動は、日本の大学生と比較して特徴的である。韓国の大学卒業生の就職率は、過去数年で 60~65%程度と、日本の大学卒業生の就職率(95.8%)と比べて低い水準にある。この違いにはいくつかの要因がある。まず、韓国では「スペック重視」といわれるように、高度な専門資格やスキルが重視される。これにより、上位大学を卒業するだけでは不十分で、専門的な資格を持ったうえで就職活動を行うことが求められる。さらに、韓国では大学卒業後、すぐに就職活動を行うわけではなく、スキルアップや資格取得を目的に時間をかける学生も多い。

また、韓国の就職市場にはいくつかの厳しい現実がある。韓国の大企業の就業者数は約 300

万人で(従業者数の約 10%)、日本の 1400 万人(従業者数の約 30%)と比較して狭き門である。この点も就職競争の激化を招いている一因である。

就職競争が激化している背景には、韓国の少子化問題も影響していると考えられる。韓国の出生率は低下しており、少子化の進行に伴い、国内市場の縮小が懸念されている。これにより、韓国の学生はより少ない機会を巡って競争しなければならなくなっていると考えられる。これに対し、韓国の学生たちは海外の大学で学び海外で就職するという選択肢を取る学生もいる。近隣国である日本にも多くの韓国人留学生が来ている。(グラフ参照)



『コロナ禍の前後における外国人留学生数の推移 国・地域別分析 益財団法人アジア学生文化協会 白石勝己』
<https://www.abk.or.jp/wp-content/uploads/2024/08/558kousatsu.pdf>

しかし、海外進出を目指す学生たちには、文化の違いや家族との距離、孤独感などの課題も伴うのではないか。特に結婚相手に対する国籍の希望や、韓国を離れることへの不安が存在すると思われる。

実際に韓国に赴き、現地の学生たちと直接話すことで、さらに深い理解を得ることができると考えている。特に、韓国の学生が就職活動において最も重視している要素や、資格取得やインターンシップに対する具体的な取り組み、海外就職に対する動機や課題について聞きたいと考えている。また、アルバイトの経験や就労状況、結婚相手に対する国籍の希望、そして韓国を離れることへの不安についても確認したいと思っている。

これらの情報を元に、韓国の学生事情や就職活動の現状を理解し、異国の文化を知るとともに自身の今後のキャリア形成につなげていきたいと思う。

テーマ②「厳しい受験競争・学歴社会の改善策」

受験競争が子どもの健康に与える影響について考察する。

韓国では、大学受験に向けて、高校生活のすべてを受験勉強に捧げることが珍しくない。例えば、毎日 10 時間以上勉強するのが当たり前であり、24 時間営業の自習室も存在して

る。その結果、多くの学生は深夜2時から3時まで勉強を続け、平均睡眠時間が4～5時間という極端な生活を送っている。このような過酷な環境は、学生の健康にさまざまな悪影響を及ぼす。具体的には、強い眠気や集中力の低下、体全般の不調を引き起こし、成長期にある高校生の場合、体力がある程度あるとはいえ、長期的には成長の妨げとなる恐れがある。一方、日本でも似たような現象が見られる。過度な勉強は、成長を抑制したり、強いストレスを感じさせることがある。このような状況が悪化すると、自殺という深刻な結果を招く場合もある。実際に、日本では若者の死亡原因の3割から5割を自殺が占めており、この背景には受験競争の影響があると考えられる。

こうした両国における受験勉強による健康被害を解決するために、以下の2つの対策が有効であると考えられる。

1つ目は、**効率的な勉強の重要性を認識すること**である。長時間勉強すること自体が目標となりがちだが、健康を損なうほどの勉強は長期的な成果を得られない。私自身の経験からもこれは実感している。大学受験時、深夜まで必死に勉強を試みたことがあったが、眠気に襲われ、頭に何も入らず、ただ時間を無駄にしてしまった。このような経験から、勉強時間を確保することも重要だが、健康を害さない範囲で集中力を保ちつつ行うことの重要性を再認識する必要がある。

2つ目は、**学校や社会全体で健康を重視した取り組みを推進すること**である。例えば、学校では長時間学習を求めるのではなく、効率的な学習方法を教え、適切な休息を取る重要性を啓発する教育を行うことが考えられる。また、家庭や地域でも、学生が学業以外の活動に参加し、バランスの取れた生活を送れる環境を整備することが求められる。

受験勉強は確かに学生の未来を決定する重要な要素である。しかし、その過程で健康を犠牲にしてしまえば、本来の目的である学問を深めることや個人の成長に逆行してしまう。効率的かつ健康的な勉強方法を推奨し、学歴社会の改善に向けた取り組みを進めることが必要である。

Report on Discussion Themes

Theme 1: Differences in University Life between Japan and Korea

Job-hunting

In the course of my current job-hunting activities in Japan, I have become deeply interested in Korean students' views on occupations and their approach to job hunting. Mitsubishi University also has Korean students, and I am also interested in their motivation for coming to Japan. I believe that understanding the job-hunting situation of Korean students (which they consider part of their student life) will deepen mutual understanding.

The job-hunting activities of Korean university students are distinctive compared to those of Japanese university students. The employment rate for Korean university graduates has

hovered between 60% and 65% in recent years, much lower than the rate for Japanese university graduates (95.8%). There are several factors contributing to this difference. In Korea, “specs,” or advanced professional qualifications and skills, are emphasized. Simply graduating from a top university is not enough; specialized qualifications are often required to find a job. In addition, many students in Korea spend time after graduation improving their skills and acquiring qualifications before seeking employment.

Furthermore, there are several harsh realities in the Korean job market. The number of employees in large companies in Korea is about 3 million (about 10% of all employees), compared to 14 million (about 30%) in Japan, which means that opportunities for employment in large companies in Korea are very limited. This has intensified competition for jobs.

Korea's declining birth rate has also played a role in intensifying employment competition. The declining birth rate and shrinking domestic market have forced Korean students to compete for fewer opportunities. As a result, many Korean students are considering studying abroad or seeking employment outside of Korea, and Japan has become one of the most popular destinations.

However, there are challenges for students seeking opportunities abroad, including cultural differences, physical distance from family, and loneliness. Concerns about the nationality of their future spouse and anxiety about leaving Korea may also arise.

We believe that visiting Korea and engaging directly with local students will provide greater insight. Specifically, we aim to understand the factors that Korean students prioritize in their job search, their efforts to obtain qualifications and internships, their motivations for seeking employment abroad, and the challenges they face. We also want to explore their part-time work experience, employment status, hopes regarding the nationality of their life partner, and concerns about leaving Korea.

By gathering this information, we hope to understand the realities of Korean students' lives and job-hunting activities, deepen our knowledge of overseas cultures, and use this information for our own career development.

Theme 2: Countermeasures against fierce academic competition and the spread of entitlement mentality

Considering the impact of academic competition on children's health

In South Korea, it is common for students to devote their entire high school life to university

entrance exams. For example, it is common for students to study for 10 hours or more every day, and self-study facilities that are available 24 hours a day are easily accessible. Students study until 2 or 3 am, and the average hour of sleep is only 4 to 5 hours. This extreme routine has serious health consequences. Specifically, it leads to intense sleepiness, poor concentration, and overall physical malaise. For high school students in their growth spurts, prolonged exposure to these conditions, while initially tolerable with their young physical strength, may hinder their long-term growth.

A similar phenomenon can be seen in Japan. Excessive study time hinders physical growth and induces a great deal of stress. In extreme cases, this stress can manifest itself in tragic consequences such as suicide. In fact, suicide accounts for 30% to 50% of all deaths among young people in Japan, and academic competition is believed to play a major role in this alarming statistic.

I believe that the following two measures are effective in resolving the health hazards of studying for exams in these two countries

1. recognition of the importance of efficient study methods

The dominant view is that studying for long periods of time leads to academic success, but this approach is detrimental to health and counterproductive. My personal experience underscores this point. During my preparation for college entrance exams, I often studied late into the night but was unable to absorb the information effectively due to sleepiness. This not only rendered the time spent pointless, but also negatively affected my health. Therefore, it is important to reaffirm the importance of focused and efficient study without sacrificing one's health.

2. promotion of health

Second, schools and society as a whole should promote initiatives that emphasize health. For example, instead of forcing students to study for long hours, education should be provided to teach them how to learn efficiently and the importance of adequate rest. Families and communities should also create an environment in which students can participate in non-academic activities and lead a balanced life. Studying for entrance exams is certainly an important part of a student's future. However, if health is sacrificed in the process, it goes against the original purpose of deepening academic studies and personal growth. Efficient and healthy study methods should be encouraged to improve the academic environment.

男子部 2年 向井蒼太

2025/01/15

● 日本と韓国の大月生活の違い

日本と韓国の大学生活には、入試制度、学費、授業スタイル、キャンパス文化、就職活動、生活環境など、さまざまな面で特徴的な違いが見られる。まず、日本の大学進学は「大学入学共通テスト」と各大学の個別試験を経て決まるが、進学後は比較的自由的な大学生活を送れる傾向にある。一方、韓国では「スヌン（大学修学能力試験）」が進学を左右する重要な試験であり、入学後も厳しい成績管理や競争が続く。学費面では、日本は国立大学の学費が比較的安い一方で、私立大学の負担が大きく、奨学金制度では「貸与型」が主流である。一方、韓国では学費全般が高く、政府の支援による「登録金半額」や「給付型奨学金」が普及しているが、経済的負担は依然として大きい。

授業や大学生活においても違いが際立つ。日本の大学では、授業への出席が重要視される場合もあるが、学生の自主性が重視される傾向にあり、サークル活動やアルバイトが学生生活の重要な一部を占める。これに対して、韓国の大学では厳格な評価基準が採用され、授業の成績や出席状況が就職活動に直結するため、学生の競争意識が非常に高い。また、日本のキャンパス文化ではサークル活動やゼミの研究が盛んであり、学生は趣味や興味を深める時間を多く確保できる。一方、韓国では「MT（Membership Training）」と呼ばれる合宿やクラス単位の集団活動が重視され、上下関係や先輩後輩の文化が色濃く反映されている。

就職活動についても、日本では大学3年生の後半から一斉に始まる「新卒一括採用」の仕組みが一般的であり、企業は学歴だけでなく学生の人柄や適性を重視する。一方、韓国の就職活動では、学業成績や語学力（特に英語）、資格の有無が大きなポイントとなり、厳しい競争を勝ち抜くためにインターンシップや関連経験が重要視される。生活環境についても、日本では実家から通う学生が多いが、都市部では一人暮らしをする学生も多く、比較的のんびりとしたキャンパスライフが特徴である。これに対し、韓国では多くの学生が寮生活や下宿を選択し、学業や資格試験の準備などで忙しい日々を送っている。

このように、日本の大学生活は自由度が高く、多様な経験を追求できる環境が整っているのに対し、韓国の大学生活は競争的で、学業成績やキャリア形成への集中が特徴的である。これらの違いは、それぞれの国が求める人材像や社会の文化的な価値観を反映しており、学生生活の在り方にも大きな影響を与えているといえる。

● 厳しい受験競争・学歴社会の改善策

厳しい受験競争や学歴社会を改善するためには、教育制度や社会全体の価値観を見直し、多角的な取り組みが求められる。具体的には、入試制度の改革として一発試験に依存しない多様な評価基準や学力以外の資質を評価する仕組みを導入し、教育の多様化を進めることで学生の個性を尊重し、キャリア形成に関する教育を強化する必要がある。また、社会においては学歴に依存した雇用基準を見直し、スキルや経験を重視する採用基準を導入するとともに、学歴による差別の解消や待遇の是正を図ることが重要である。さらに、教育機会の平等化を推進し、奨学金制度や地方教育の充実を通じて経済的・地域的な格差を解消し、学歴に偏らない多様な成功モデルを社会に示すことで、価値観の多様化を促すべきである。同時に、受験競争による心理的負担を軽減するために学生のメンタルケアや親世代への啓発を進め、学歴以外の才能や個性を尊重する文化を醸成することが求められる。これらの施策を通じて、学歴に依存しない多様な生き方が尊重される社会の実現を目指すことができる。

男子部1年 高橋靖智

テーマ① 日本と韓国の大学生活の違い

日本と韓国の大学生活の違いの一つとして、大学在学中の就職へ向けた準備の充実度の差があげられる。日本の大学生活は「人生の夏休み」と称されるほど自由度が高く就職活動に関しても大学三年生から本格化することがほとんどである。サークル活動やアルバイトに力を入れる学生が多く、就職活動が始まるまではのんびりとした雰囲気があるように感じる。

一方で、韓国では4年生大学に通う新卒学生の就職率は過去5年間60～65%の間を推移しており、日本の新卒学生と比較すると30%も低い値となっている。このように就職競争の厳しい韓国では大学で優秀な成績を修めることや就職に有利な資格を取得するために勉強に力を入れる学生が多いそうである。実際に勉強にイそしむ学生を支援するために大学側が24時間オープンの自習室を提供したり、試験前には学生に無料でジュースや菓子パンなどの軽食を配布するそうである。

このように日本では大学合格が最大の山場とされているのに対して、韓国では大学入学後の厳しい競争を迫られることから大学入学後の就職に向けた学業をはじめとする準備という点で顕著な違いが生まれている。

テーマ② 厳しい受験競争・学歴社会の改善策

私は韓国における厳しい受験競争・学歴社会の改善策を考えるうえで韓国の就職活動の実態に着目した。韓国での競争が厳しい理由の一つとして、大企業や公務員試験の人気の高いことがあげられる。日本でも大企業と中小企業の間で格差は存在するものの韓国ほど

顕著ではないのが現実である。実際、月収差は1.5倍程度であるうえ、年功序列型賃金制度があるために、中小企業でも長期的に勤めればある程度安定した収入が得られる傾向にある。一方で、韓国では賃金格差が2倍近くあることに加え、財閥主導の経済構造の影響で市場での競争が厳しく、中小企業は労働条件を向上させる余裕がないのである。そこで日本が実施しているような中小企業支援策を取り入れるのが効果的だと考える。例えば、最低賃金引き上げによる中小企業の負担を軽減するための助成金(例：業務改善助成金)の交付や、賃金を一定割合以上引き上げた場合に法人税を軽減するといった減税措置があげられる。

このように大企業と中小企業間の格差が比較的小さい日本の政策を部分的に取り入れることで韓国における格差も是正され、結果的に就職活動での厳しい競争も緩和されると考える。

女子部2年 腰原弘乃

日本と韓国の大学の違い

韓国には日本に比べて才能や努力に関して厳しい面があるのではないかと感じていたが、今回の事前学習で実際にそうであるということがわかるような事実を多く知った。

まず、基本的に大学に入ってしまうさえすれば卒業がそれほど難しくない日本に比べて、韓国の学生は大学に入ってからかなりの努力をして就職の準備をする必要がある。具体的にはインターンや資格、留学などを行っている即戦力のある志願者が求められているため、大学と別に学習塾に通ったりサークル活動などよりも成績維持のための勉強を優先したりする。

そのような過酷な状況もありつつ、施設などの大学の環境面ではかなり優れており、そのような大変な大学生活の支えになっているといえる。

韓国の受験戦争が過酷な理由

日本では中小企業が99%以上あり、雇用でいえば70%以上の方が中小企業で働いている上、中小企業であっても技術や給与の面で大企業に劣らない国が多い。一方で韓国には日本の中小企業に当たる会社が極めて少なく、給与などの待遇の面では大企業に比べて劣っている事が多い。そこで生徒たちは大企業に入る事を強く望み、受験も過酷になる。

日本でも数十年前までは受験戦争といわれるほど受験が厳しかったが、子どもを守る社会にする為に西洋式のゆとり教育を取り入れたことで詰め込み教育や学歴社会が少し緩くなり、大学名や私立に入る事にこだわる気魚油が減った。

北欧のような子供の個性を尊重し、学歴に縛られないような自由な教育制度にすることは、ただ勉強のできる子ではなく柔軟な考え方や姿勢をもつ子が育ち社会全体としてはいいことだと思う。しかし、それは政治や社会福祉などが充実しているという基盤があるからこそ実現するものであると考える。韓国も学歴に縛られず、子どもを自由にしてあげるべきだと安易に指摘するのはやや無理があるように感じる。

上記したような大企業と中小企業の割合や格差、に加えて中国でいう科挙のような試験を受け、出世することで品階の上がる貴族階級である両班という制度の考え方が根強く残っているため、自分の子供を楽にしてあげる為に財閥の会社に入れてあげたいと思う親が多いことも大きな要因の一つである。

先進国として自分が変えることのできない出自によって大きく環境や身分が変わる事が一定以上はないと思っていたが、実際には韓国には財閥の存在が大きく、それゆえにそれなりの中小企業もつぶされてしまうのではないかと感じた。

中国や韓国の学生にはとても賢いな、と感じるような子が多くそれだけ努力してきたのだなと尊敬に値する反面、まだ性格が形成されていない遊び盛りの幼少期のうちから勉強三昧になってしまう事は、同じ経験をした大人たちがそうしなくてもいいように改善すべき問題だと感じる。しかし、そう簡単には解決できないような深く根付いた社会構造だと思うので時間をかける必要があるだろうとも感じる。

男子部3年山口堅大

① アルバイトについての違い

日本と韓国の大学生のバイトの違いにおいて、最も奇抜で面白いのは、韓国の優秀な学生のバイトがほとんど家庭教師に限定されている点である。この現象は、両国の労働市場と教育システムの違いを鮮明に反映している。韓国では一般的なアルバイトの時給が極めて低く、日本の約3分の1程度である。そのため、学生たちは効率的に稼ぐために、高時給の家庭教師を選択する。この状況は、韓国社会の激しい学歴競争と密接に関連している。

さらに興味深いのは、韓国の学生が履歴書にMBTI（性格診断）の結果を記載することである。これは、企業が学生の性格と職場との相性を重視していることを示しており、日本では見られない独特の慣習である。また、韓国では一人でお店を任されることが多く、自由度が高い。例えば、コンビニのレジで客がいない時は携帯を使用したり、椅子に座ったりすることも可能である。これは日本の厳格なマニュアル文化とは対照的で、韓国のバイト文化の柔軟性を表している。

これらの違いは、両国の社会構造や価値観の違いを反映しており、大学生のバイト事情を通じて文化の多様性を垣間見ることができる。

② 韓国の厳しい学歴社会の改善策

韓国の厳しい学歴社会の改善策として、以下の施策が有効だと考えられる。まず、大学の構造調整を進めることが重要である。韓国政府は既に「大学適正規模化計画」を実施しており、2025年までに大学の入学定員を1万6197人削減する予定である。これにより、大学の質の向上と需給バランスの改善が期待できる。

次に、入試制度の改革が挙げられる。近年、韓国では「修能」（大学修学能力試験）を中心とした選考方式の比重を増やす動きがある。これにより、私教育への依存度を下げ、公教育の重要性を高めることができる。さらに、高等教育機関の多様化も重要である。4年制大学を減らし、専門学校を増やすことで、労働市場のニーズに合った人材育成が可能になる。

最後に、学歴による賃金格差の縮小が必要である。大企業と中小企業の処遇水準の格差を是正し、学歴よりも能力や適性を重視する雇用システムを構築することで、過度な学歴競争を緩和できる。

これらの施策を総合的に実施することで、韓国の厳しい学歴社会の改善が期待できる。

男子部3年 松本希海

① 日本と韓国の大学生活の違い

最も大きな違いとして注目したのは、学食である。これに注目したきっかけは、YouTubeで韓国の大学生活の様子を発信しているインフルエンサーを見たことである。そのインフルエンサーは「beksu rika」という人で、学食の献立をほぼ毎日ショート動画で投稿している。興味深いと思った点は二つある。一つ目は毎回キムチが献立に入っていることである。日本食で言うお漬物の立ち位置だとは思いますが、キムチが韓国の食文化に強く根付いているということが分かった。二つ目は値段がとて安い点である。調べてみると、韓国の大学の学食は約500円でバイキング形式らしく、日本の大学に比べるとリーズナブルに食べられるのが魅力的だと思った。

② 厳しい受験競争・学歴社会の改善策

日本の学歴社会で問題となっているなかで私が注目した点は二つある。一つ目は入試制度の厳しさである。受験生の多くが塾に通って長時間勉強しなければならず、レベルの高い大学へ行くために浪人する人も少なくない。さらに大学入試方法は年々多様化しており、対策が難しい問題が多く出されているイメージがある。

韓国で問題となっているなかで一番耳にするのは、受験生への過度なプレッシャーである。受験生が試験に遅れないように警察や市民が協力する場面をテレビや新聞で見たことがある。社会全体が受験生に協力的なのは一見良いことのようにだが、学生の精神的・身体的健康に悪影響を及ぼすのではないかと思う。

日本と韓国に共通する問題として受験生の負担の大きさがある。良い教育を受けるためには相応の努力が必要なことは前提とするが、大学進学以外の進路を考えている若者に不当なプレッシャーを与えないようにする対策を検討した。その結果、良い大学へ行くこと以外のキャリアパスも視野に入れることがプレッシャー軽減につながるのではないかと考えた。社会全体で学歴以外の価値を認められるよう、意識改革をしていく必要がある。

男子部 3 年 島田寧桜

① 日本と韓国の大学生活の違い

授業面：日本の大学では、講義形式の授業が一般的で、教授が一方向的に講義を行い、学生はノートを取ったり、質問したり。グループワークやディスカッションは、それほど多くない。韓国の大学では、講義形式に加えて、グループワークやプレゼンテーション、ディスカッションなど、よりインタラクティブな授業スタイルが取り入れられている。学生は積極的に授業に参加することが求められることが多い。

生活面：日本は比較的自主的な生活を送る傾向。大学は勉強する場所であり、学生は自分のペースで勉強を進める。サークル活動やアルバイトなど、課外活動も盛ん。韓国は、日本よりも学業に集中する傾向がある。大学は、勉強とキャリア形成の場と捉えられており、学生は授業以外にも、資格取得やインターンシップなど、将来に役立つ活動に積極的に取り組むことが多い。

② 厳しい受験競争、学歴社会の改善策

受験戦争では、知識量や記憶力、試験対策に特化した学習が重視されがち。そのため、創造性、批判的思考力、問題解決能力、コミュニケーション能力など、社会で真に求められる能力が育ちにくいという問題がある。受験生は、常に成績や進学を意識し、過度なプレッシャーにさらされ、これが、学習意欲の低下、不安感、うつ病などの精神的な問題を引き起こす可能性がある。受験戦争では、画一的な評価基準によって、個々の生徒の個性が重視されない傾向にある。

これらの問題を解決するための、各セグメントの対策

教育制度：多様な進路選択を促進し、入試制度を見直し、思考力や創造力を育む教育を重視する。

社会：学歴偏重の採用基準を見直し、能力や経験、ポテンシャルを重視する社会を構築する。

個人：学歴だけに価値を見出すのではなく、自分の興味関心や強みを活かせる進路を選択する。

男子部 1年 北畑嵩虎

テーマ①「日本と韓国の大学生活の違い」

韓国の大学生活は日本のそれよりも厳しい、卒業までに休学などで時間がかかる

→資格や好成績をとるために勉強にかなり重きを置いている、インターンや兵役などで休学する要因が多い

カフェがたくさんある（学内の施設が充実している）

→学生が快適に勉学に励めるようにしてある

総じて日本の大学は勉強を頑張らなくてもどうにかなる代わりに施設充実度が低めである
それでも私は日本の大学がいい（勉強しなくてよいから）

テーマ②「厳しい受験戦争・学歴社会の改善策」

日韓両方で就活において出身大学が重視される傾向にあるが、特に韓国において顕著

→韓国には日本における中小企業のような企業が少なく、財閥系の大企業の力が強い

→財閥系企業の変革が一番理想的だが難しい

現状では外国語高校のように、特殊なカリキュラムによって有名な大学への進学が比較的容易な高校と、一般の高校のようにそうでない高校があり、都市部に住んでいるかどうかというところでも進学のしやすさにばらつきが出ているのではないかと思う

→高校教育までの水準を全国で一定化していくことで公平性自体は増すと考える。また実際にこの動きは韓国国内で進み始めているようだ

日本においては、近年では「ガクチカ」というものが重視され始めている

→日韓両方であるが、ガクチカに資格だけではなくいろいろな観点から着目すべきなのではないか

海外留学経験や資格などは結局お金があればできたり取得しやすかったりしてしまうという面があるので、アルバイト経験などにも比重を重く設定してあげるのも一つの手だと考える。

女子部 2 年 高橋優奈

テーマ① 「日本と韓国の大学生生活の違い」 韓国の大学生は、日本の大学生よりも学業最優先の大学生生活を送っていると思う。日本の大学生生活では、学部や学科による違いはあるが、サークルや部活動に力を入れるのか、アルバイトに力を入れるのか、勉強に力を入れるのかなど、学生が自由に自分の行動を選択できる。

また、大学のその先にある就職活動においても、大学の成績が大きく関係することは少ないが、どの大学の学生であるかといういわゆる「学歴フィルター」はいまだに存在しているためにネームバリューのある大学に「入る」ことが重要視される風潮もある。大学入学がゴールとなりやすい環境で高校時代に勉強していたうえに、大学に入れば自由度の高い生活を送ることができるというイメージがもたれているため、これまでの勉強から解放されたと感じ、学業にそこまで重きを置かない大学生生活を送る学生が日本には多いのではないかと思う。一方で、韓国ではよい大企業に就職するためには大学でよい成績を修めることが必要であり、大学進学後も競争が続くと聞いたことがある。大企業への就職を目指さなくてはならない社会的な風潮により、韓国の大学生は学業最優先の生活を送らざるを得なくなっているのだと思う。プレッシャーが長期にわたって続く環境での韓国の大学生生活、自由に選択できる幅が広いからこそ自分自身を見つめなおす必要がある日本の大学生生活それぞれに、違う大変さや充実さがあるのではないか。

テーマ② 「厳しい受験競争・学歴社会の改善策」 地域間格差が大学受験に与える影響について考える。はじめに地域間格差について、日本では多くの大学が東京をはじめとする都市部に集中しており、それだけで地方に住む高校生にとっては受験に至るまでのハードルが高くなる。さらに、田垣内義浩 (2022)により、地方の中でも「非都市部」に当たる高校では、学校が進学のために生徒にさけるリソースを一部の生徒に絞り、進学に不利な地域からの「国公立大学への進学ルート」を確保しようとする動きがあることが指摘されているなど、地方の進学先の少なさが生徒の大学進学を阻む要因になっていることが分かる。韓国においても、ソウル出身者と非ソウル出身者との間で潜在能力といえる生徒の学業能力の順位による進学率の差は小さいが、実際のソウル大学進学率はソウル—非ソウル出身者の間で 2.6 倍の差が生じるという実証分析の結果がある。日本と韓国は都市部と地方という地域間の格差が大学進学や大学受験に影響を与えていることが分かる。この問題の改善のために、日本の一部の大学の医学部受験で用いられている「地域枠」としての入試制度を幅広い学部や大学に拡大していくことが有効なのではないだろうか。居住地域という学生個人の努力ではどうしてもできない格差により大学受験で不利になる学生がいるのであれば、公正な受験環境を整えるためにも地方学生へのチャンスを増やすよ

うな制度は必要であると思う。

女子部 1 年 唐澤茜里

① 日本と韓国の大学生生活の違い

日本と韓国の就活に関する特徴を考えながら、日韓の大学生生活の違いを考えていく。マイナビ 2025 年卒企業新卒採用予定調査によると、日本の就職活動において、企業が最も重視するのが「素直さや誠実さなどの人柄」、次いで「コミュニケーションの能力などの対人スキル」、その次が「学生の自社に対する熱意や意欲」となっており、人柄や熱意という部分が重視されていることがわかる。また、学業成績をどの程度考慮するかについて、調査では「重視する」と「ある程度考慮する」の合計が 44.2%で、「あまり考慮しない」と「まったく考慮しない」の合計が 55.8%となっていた。そして、GPA(Grade Point Average)の提出を義務づける企業はほとんどない。このように日本では大学での勉強が就活において必ずしも重視されていないと考えられる。一方で、韓国の就職活動ではスペック(その人の能力や経歴、保有している資格のこと)が特に重視される。日本でも重視されることの多い、英語力(TOEIC など)や資格や技術(第 2 外国語、コンピュータースキルなど)の他に GPA といった大学の成績、複数専攻などを含めた学歴も重視される。そのため、韓国の学生は GPA をあげるために熱心に勉強する人が多く、そして自分が興味のある学科+就職の際に有利な学科を同時に履修する韓国人学生が多い。就職に有利な学科としては文系では経営学・経済学、理系では PC 工学を学ぶ学生が多いそうだ。日本では GPA を重視して勉強したり、複数専攻をしたりする学生は少なく、サークル活動やアルバイトに時間をかける学生が多いように感じる。

② 厳しい受験戦争・学歴社会の改善策

このレポートにおいては、大学受験における教育費の問題を考える。

韓国統計庁の調査によると 2022 年、高校生で学習塾などを利用している生徒にかかった学校外での教育費は 1 人当たり月平均で 69.7 万ウォン(約 7 万 7 千円)だった。日本の場合は、文部科学省が発表した 2021 年の「子供の学習費調査」に基づく、公立高校に通う高校生(塾に通っていない生徒を除く)1 人にかかる月平均は 30,250 円、私立高校に通う生徒の場合だと、37,250 円となっている。比較してわかる通り、特に韓国では教育に大きなお金を使う家庭が多い。このように高い学歴を得るためにはお金が必要となり、教育格差を生んでいることも事実だ。これは韓国だけの問題ではなく日本にも言える問題である。

教育格差の改善策としては、貧困家庭に対する支援があげられる。まずは、奨学金制度の充実や生活費支援を図ることで、子どもが平等に勉強できる環境を作ることが重要であると考えられる。これらの施策を通して、短期的な経済負担を軽減するだけでなく、長期的な教育を通じた貧困の連鎖を断ち切る必要がある。

女子部3年 西山湖心

① 日本と韓国の大学生活の違い

日本と韓国の大学生活で大きく異なる点の1つに、学業への意識の高さがある。韓国では就活の際に学業成績が重視されるため、学業に専念して必死で良い成績を取りに行く。一方、日本の大学生は課外活動やアルバイトなどにも注力しつつ、最低限の卒業単位を取りに行く人が多い印象がある。以下、日韓の意識の違いが表れる部分を何点か紹介する。

1.履修登録システム

日本の大学では、履修登録は抽選または期間内の登録で受講できることがほとんど。一方、韓国の大学では、履修登録は수강신청 (=スガンシンチョン, 受講申請) と呼ばれ、すべて先着順で行われる。申請当日はPCバン (韓国のネカフェ) での争奪戦となる。練習サイトもある。

2.図書館

日本の大学の図書館は、毎日開いてはいるものの土日は営業時間が短縮されるなど一般的な店舗と同様。韓国では大学の図書館は24時間開いていることが一般的で、韓国の大学生は日頃から図書館に通って熱心に勉強する。テスト

前は図書館に寝泊まりすることもあるそう。夜食が配られることもあるらしい。

② 厳しい受験競争・学歴社会の改善策

学歴社会の先にある、大企業志向と中小企業の低評価について考える。日韓で共通する社会問題として、若者が大企業への就職を目指し、中小企業が人材不足に悩む問題や、中小企業の労働条件が大企業と比較して劣りがちな問題がある。これについて、日本には一般財団法人日本次世代企業普及機構による「ホワイト企業認定」というものがあり、「働きやすさ」や「働きがい」に関する項目を審査する。認定された企業は、就職活動を行う学生や転職者に対して信頼性をアピールできる。韓国においても、このような統一的な制度を設けることで、政府や民間団体を中心に企業の労働環境改善に取り組むことが解決策になるかもしれない。

女子部1年近藤美崎

はじめに

韓国合宿においてソウル大学との交流をするにあたり、韓国の大学生活について知り、日本の大学生活との違いをあらかじめ認識することでより深い議論が可能になる。韓国の大学生活の主軸となる活動はどのようなもので、それは日本においてはどのような認識を受けているのか、それらを調べ、互いの認識を改めて正すことでより良い議論になることを期待している。

① 日本と韓国の大学生活の違い

1. 学業の厳しさ

韓国の大学は、特に競争が激しく、入試から学業に至るまで非常に厳しい。韓国では「スヌン(수시)」や「スシ(수시)」などを通じて入試が行われ、大学生活もプレッシャーが大きい。特に試験前の勉強時間が長く、学業に対する真剣度が高いとされている。一方、日本では、大学進学後は比較的自由な時間が多く、学業に対するプレッシャーは韓国ほど強くない。定期試験や授業の評価も韓国に比べてゆるやかな傾向がある。

2. キャンパス文化

韓国の大学では、サークル活動やクラブ活動が非常に盛んで、学生同士のつながりが強い。学内のイベントや、グループ活動を通じて協力することが重要視され、学生同士の結束力が高い。日本の大学でもサークル活動は一般的だが、韓国ほど学生同士の密接な関わりは少なく、個人の自由な時間が尊重されることが多い。

3. 就職活動の違い

韓国では、大学生活の初めから就職活動を意識し、インターンシップやアルバイトを通じてキャリア形成を早い段階から始める文化がある。就職活動は非常に競争が激しく、企業への就職に向けて準備が進められる。以下の図より、韓国は自身のスキルアップのために休学をとる人の割合が高いことがわかる。

< 大卒者の休学経験 >

(単位：千人、%、%p)

	2018. 5			2019. 5					
		男性	女性		増減	男性	増減	女性	増減
全体	2,926	1,175	1,751	2,967	41	1,228	53	1,740	-11
休学した 経験がある	1,298 (44.4)	913 (77.7)	385 (22.0)	1,360 (45.8)	62 (1.4)	957 (77.9)	44 (0.2)	403 (23.2)	18 (1.2)
3年制以下	1,163	459	704	1,193	30	506	46	687	-17
休学した 経験がある	363 (31.2)	305 (66.3)	58 (8.2)	396 (33.2)	34 (2.0)	341 (67.3)	36 (1.0)	55 (8.1)	-3 (-0.1)
4年制	1,763	716	1,047	1,775	11	722	6	1,053	5
休学した 経験がある	935 (53.0)	609 (85.0)	327 (31.2)	964 (54.3)	28 (1.5)	616 (85.3)	7 (0.3)	347 (33.0)	21 (1.8)

日本では、就職活動は大学の終盤に集中し、早い段階から本格的に就職活動を始めることは少ない。アルバイトやサークル活動が中心で、就職に対する意識は韓国に比べると遅い場合が多い。

②「厳しい受験競争・学歴社会の改善策」

1. 多様な評価基準の導入

韓国と日本の学歴競争を改善するためには、入試や学業の評価基準を一元化せず、多様化することが必要だという意見がある。現在、両国では主に大学入試の成績や学力だけが重要視されており、学生が試験の点数だけに集中している。しかし、これを改善するために、課外活動や社会貢献活動、インターンシップ経験なども評価基準に加えることで、学生の個性や能力を多面的に評価することができるとされている。

2. 精神的サポートとメンタルヘルスの充実

学歴競争が激しい背景には、学生がプレッシャーにさらされていることが多い。特に韓国では「スンモン(寸痛)」という大学入試に向けた過度なストレスが問題視されている。日本でも、受験勉強のプレッシャーが学生に負担をかけ、心身に影響を与えることがある。OECDによると、パンデミック後にうつ病と診断された人の割合は、韓国が36.8% (世界1位)、日本が17.3% (世界13位) と高い水準にあることがわかる。これを改善するために、精神的なサポートを充実させることが求められている。カウンセリングサービスの強化や、ストレス管理の教育を取り入れることで、学生が健全な方法で学び続けることができる環境を作る必要がある。

3. 早期のキャリア教育と社会経験の強化

学歴偏重の社会を改善するためには、学生が早期に社会経験を積み、キャリア教育を受けることが重要だとされている。韓国や日本では、大学進学がゴールとされがちだが、職業選択や社会貢献の重要性を早い段階から学ぶことで、学生の視野を広げ、学歴だけでなく多様な成功の道を認識できるようにすることが必要である。例えば、大学入学前や入学後のインターンシッププログラムや職業体験が効果的だ。

以上の改善策は、学歴競争を減らし、学生一人ひとりの能力や可能性を最大限に引き出すための手段として、今後の教育改革に必要な方向性を示している。

男子部1年 加藤豪

① 日本と韓国の大学生活の違い

日本では飲み会は学生生活の一部として認識されていて、乾杯のあとは自分のペースで飲むことが一般的です。それに対し韓国では飲み会は非常に重要な役割を果たしており、社会的つながりを築くために欠かせないイベントである。特に「회식 (フェシク)」という集まりが企業でも見られ、大学生間でも頻繁に行われている。韓国では飲み会がもっと強制的で上司や年上の人に対して経緯やマナーが非常に重要視される。具体的な飲み方のスタイルとしては、韓国ではソジュ (焼酎) を飲むことが一般的で、乾杯のあと年長者がグラスを空けるまで次の一杯を注がないというマナーが重要。飲み会の目的も日本と韓国では違ってきます。日本の飲み会の主な目的は親睦を深めることであり仕事のような形式的な目的は少ないです。一方韓国では親睦を深めるだけでなく、社会的な地位を確立する手段としても捉えられることがある。

② 韓国の厳しい受験戦争・学歴社会の改善策

韓国では大学進学がほぼすべての職業の出発点とされており、スヌンと呼ばれる、日本という共通テストの結果がすべてを左右している。キラー問題と呼ばれる正答率が3%以下の問題が解けるか否かが難関大学の合否を左右している。日本では韓国と比べると学歴至上主義的な考え方は弱まってきている傾向にある。この学歴社会に対する改善策として、人間力を高める教育の強化を提案する。勉強ができるだけで人間力が足りないような人は世の中に多くいると思う。大企業でも面接のときに見るのは学歴よりも人柄だと思う。その人の人柄を形作る期間といえば、小学校や中学校の義務教育の期間だろう。そのため大人になるうえで学歴よりも大切なものがあり、それはその人の人間

力であるという考え方を義務教育の期間中に教え込む教育体制の構築がカギだと思う。
時間はかかるかもしれないが、有効な策だと思う。

男子部 1 年三上久遠

1. 異なる点

1.1 大学受験の競争と進学文化

韓国では、「スヌン（大学修学能力試験）」が大学進学において非常に重要であり、一流大学への進学が将来を左右するとされています。そのため、受験競争が激しく、多くの学生が予備校（ハグウォン）に通います。一方、日本では大学受験も重要ですが、推薦入試や AO 入試など、学力試験以外の選抜方法が多様化しており、競争は韓国ほど厳しくありません。浪人はどちらも一定数存在しますが、もちろん韓国のほうが多いです。韓国では大学二年生から TOEIC の勉強等を始め就活に備えるそうです。800点から900点が目安だとか。

1.2 キャンパスライフの特徴

韓国の大学生は、MT（Membership Training）と呼ばれる合宿形式の交流や学内外の活動に積極的に参加する傾向があります。また、資格取得やアルバイトに取り組む学生も多いです。（就活のため）一方、日本では部活やサークル活動が中心となり、自由な時間が比較的多い傾向があります。また、日本特有の飲み会文化が存在し、学生同士や先輩後輩との交流の場として重要視されています。

2. 似ている点

2.1 アルバイトの普及

韓国と日本の大学生の多くが学費や生活費を補うためにアルバイトをしています。特に飲食業や塾講師といった職種が人気であり、学生生活における共通の特徴として挙げられます。韓国は時給が800円程度、日本は1500円から2000円程度が相場らしいです。

2.2 就職準備の重要性

両国とも大学生活の中で就職活動が大きな比重を占めています。インターンシップへの参加や資格取得、自己PRの準備に多くの学生が力を入れており、就職市場への適応に備える点で共通しています。ただし、韓国では「スペック」と呼ばれる、資格や経験の蓄積が特に重要視される点が特徴的です。

3. 韓国や日本における受験戦争の激化の改善策

両国における受験戦争はいい企業に就職するためのものなので、企業が非大学進学者の能力を測る新たな基準を設ける必要があると考える。例えば、スキルや資格に頼らずとも人とのコミュニケーションスキルもある一定の水準を設けて人を選ぶことや、協調性の有無などが挙げられる。大学に行くために膨大な時間を費やすのが主流となっている分、それとは逆に勉強以外に時間を費やして結果を出し、吟味してもらおうというシステムも評価されるべきだろう。

男子部 2年 新屋貴之

【テーマ 1】日本と韓国の大学生活の違い

まずはテーマ 1 の日本と韓国の大学生活の違いについて考えていく。まず両国の大学生活の一番大きな違いとしてあげられるものは兵役である。韓国では男性は満 19 歳で徴兵検査を受け、満 20 歳から満 28 歳までに軍隊に入る必要があり、韓国では多くの人が社会人で兵役を受けるのではなく、20 歳から 21 歳の大学生の間に大学を休学して兵役を受けることが多い。この兵役は陸軍が 18 ヶ月、海軍が 20 ヶ月、空軍が 22 ヶ月という期間が設定されており、多くの学生が特別な希望を出さずに陸軍へと配属される。この兵役の最初にある 5 週間の新兵訓練では社会との関係は一切遮断され、食事の時間や入浴も制限されるなど非常に厳しいもので、その後の所属部隊でももちろん日本の大学生徒は全く違った生活を送ることになる。しかしこの生活は韓国の若者のなかでは自分たちの中での一つの大きな経験となっているようだ。次に卒業という点にフォーカスして考えると、韓国では就活の形が大きく違っている。まず韓国では大学を卒業して、入社するのが 27~29 歳と日本よりだいぶ遅くなっている。その理由は大学を 4 年で卒業する学生が少なく、ほとんどの学生が大学を休学するためである。その休学の理由は大きく二つあり、一つははじめに紹介した兵役による休学、そして二つ目は就活準備のための休学という二つある。さらにこの就活について見ていくと、この就活のための休学が頻繁に行われている背景には韓国の企業が即戦力となる人材を求めていることがある。そのため、韓国の大学では競争社会となり、在学中に資格を取得することやインターンに参加することを強く求められ、また大学の成績も就活時には重視される。このように日本よりもより就活に向けた準備が韓国の大学生に求められているといえる。

【テーマ 2】厳しい受験戦争・学歴社会の改善策

次にテーマ 2 の韓国における厳しい受験戦争と学歴社会について考えていく。まず韓国の受験制度は二種類存在し、一つが日本でいう推薦入試と呼ばれるような随時募集、もう一つは日本でいう共通テストを受けるテレビでよく紹介されている定時募集である。この二種

類のテストがある中で、実は多くの定員が随時募集に割り振られている。よって多くの学生がこの随時募集を利用していく。この随時募集は高校三年生のときの成績によって決まり、普通の教科だけでなく、課外活動なども評価に大きく影響する。そしてこの随時募集から漏れた人が受けるのが定時募集である。この定時募集は日本の共通テストのようなもので、普段の教科のテストを受け、合否を決めるというものである。そしてこういった制度の中で、なぜ韓国では激しい受験戦争が繰り広げられているかというと、この大学受験の結果によって人生が大きく決定づけられてしまうためである。この受験の結果は韓国では就職に直結し、この大学受験が人生を決めるものであるため、ここまで激しい競争が行われている。そしてこの受験競争の問題点として、随時募集の高校三年次の評価があげられる。この評価では課外活動が大きな割合を占めることからくる受験のマネーゲーム化や評価基準の曖昧さがあげられる。よってこの問題点への改善策として、より明確な評価で、公平なものとするために例えば学生全員が受けるテストを全員に課すことや、明確な評価基準の作成や、貧困層に配慮した課外活動の多様化などがあげられるだろう。

男子部2年 大川碧渚

① 日本と韓国の大学生活の違い

韓国では、履修登録は先着順であり、人気の授業は登録開始から数秒足らずで枠が埋まってしまうと聞いた。単位のことを学点と呼び、良い企業に就職するためには GPA が重要で、大学入学後も熱心に授業を受け勉強に励む人が多いようだ。また、ゼミや卒論などはない大学が多いらしい。大学や学科ごとにデザインされたクアジャムというジャンパーがあり、大学と学科が一目でわかるようになっており、街中で着ている人も多いらしい。一方日本では、履修登録は抽選が多く、全ての人に平等に機会が与えられていることが多い。良い企業に就職するのに GPA はそれほど重要でなく、大学入学後は部活やサークル、バイトなど学外での活動に励み自由な生活を送る人が多い印象を受ける。また、ゼミや卒論はない大学の方が珍しいだろう。大学名がデザインされたTシャツやパーカーがある場合もあるが、部活、サークル単位で独自に作っていることが多く、街中で着ている人はあまり見かけない。

韓国は日本よりも学歴重視であり、授業で単位を取るだけでなく就職のために良い成績を取ろうとする意識の高さを感じる。日本はどちらかというと大学入学がゴールのように感じられ、ある程度上位の大学に入ってしまうえば就職も上手くいくという風潮があるように思う。また、韓国の方が大学での勉強中心という印象を受け、日本の方が学外での活動中心という印象を受ける。私は授業の成績を重視しすぎず自分の好きなこと

を自由にできる日本の風潮の方が好きだが、韓国の様子を知ったことで、せっかく望む大学に入れたのだから、この大学で得られる学びをもう少し大事にしても良いと思い始めている。

② 厳しい受験競争・学歴社会の改善策

韓国の大学入試制度としては、随時募集と定時募集の二種類があり、随時募集の中心が学生生活記録簿選考で、定時募集の中心が大学修学能力試験である。学生生活記録簿選考においては、小論文作成、クラブ活動、ボランティア活動などといった学外での努力を要するものを基準に能力が測られる。大学修学能力試験は、通称「修能（スヌン）」と呼ばれ、いわば日本の共通テストにあたる。この修能の出来によって大学が決まるため、韓国の受験生らは修能のために必死に勉強する。

受験競争において学校外での教育が必要になり、どうしても富裕層が有利になってしまうのは問題があるのではないかと思う。随時募集においては学校教育では身につけられないスキルの習得に私教育が必要になり、塾に通わせるなどして費用がかかる。修能では学校教育の内容では解ききれないほど難しい問題が出題されることもあるようで、そのような問題を解くためにはやはり塾で対策するしかないようである。そうすると子を塾に通わせられる金銭的余裕がある家庭が有利ということになってしまう。この点は日本とも共通しているのではないだろうか。対策としては、随時募集の枠を減らしたうえで、修能の問題を精査し、学校教育の範囲で解けないような問題は出題しないようにすべきだと考える。学校教育の範囲を超えた問題を出すことで上位層の選別を行いたいのかかもしれないが、学力というより親がどれだけ教育の機会を与えられたかが測られているように思う。それは本来の試験の趣旨とは異なってくるのではないか。

男子部 1年 梶原慧大

① 日本と韓国の大学生活の違い

日本の大学では、基本的に自主性が求められ、授業は比較的少なく、自己学習が重要とされている。一方で韓国では、授業の進行が日本よりも速いことが一般的であり、授業中に積極的に参加することが求められ、質問やディスカッションが多い。また授業外の活動として、日本の大学ではサークル活動が活発で、多くの学生が何らかのサークルに参加している。サークルの種類も豊富で、趣味やスポーツ、文化活動など幅広い分野で活動できる。その一方で、サークル活動に対する参加の頻度は比較的軽めで、私生活とのバランスをとることが一般的。韓国の大学では「学外活動」が非常に盛んで、学生たちは学業と並行して多くのクラ

ブや学外イベントに参加する。特に「学生会」や「学外団体」の活動が重要視されており、仲間とのつながりが強い傾向にある。日本よりも忙しいがち。日本の大学では、学生と教授の関係は距離があり、教授に質問するのは学生にとって少しハードルが高いと感じる。また、授業も講義形式が多く、直接的なやり取りは少ない。一方韓国では、教授との関係がより密接で、質問や意見交換が頻繁に行われる。授業でディスカッションが重視されることが多いため、学生と教授の距離は近い。さらに、韓国は大学の学費が比較的高額で、私立大学の学費は特に高くなることがある。多くの学生は奨学金やアルバイトを通じて学費を賄っている。

② 厳しい受験競争・学歴社会の改善策

日本も韓国もともに受験競争が厳しく、どちらも大勢の人が一斉に同一のテストを受けて競うという特徴がある(日本には例外あり)。しかし、その競争の熾烈さは韓国の方が大きく、日本では私立大学の受験は個別入試となることがあり、同世代の全員と競うという側面はそこまで感じられないが、韓国では全員が同一の試験であるスヌンを受けて、その成績によりすべての人は入学可能な大学が決められてしまう。そのため、韓国では学校や塾だけでなく、家庭教師までも利用し、入試への投資を惜しまない。国全体としてもスヌンは特別な行事らしく、リスニングが行われるタイミングには車のクラクションや飛行機の離着陸が規制されるようだ。学歴社会の傾向としても両国ともに強く、就職の場面では学生は在籍する大学の学力の水準をもとに評価されることが多い。特に韓国は日本以上に厳格で、学歴が個人の社会的地位や職業の選択に大きな影響を与えるとされている。ソウル大学などの名門大学を卒業した学生は、企業や政府機関で高い地位に就くことが一般的。このような状況下で、学生は親や周囲の人、社会からのプレッシャーを感じてしまい、受験に失敗してしまった学生が大きな不安を抱えることもあるため極端な学歴社会には見直しが必要。そのためにも、競争だけでなく、協力や共生の精神を大切に教育や社会制度を導入し、他者と協力して成功することが社会的に評価されるようにすることや、すべての学生に同じ目標を設定するのではなく、個々の成長や努力を重視するようなシステムを作ることで、学生一人ひとりの進歩が認められる社会とすることが重要。個人としても、他人から与えられた尺度でモノを計らず、自身のもつ価値観をもとに思考し、評価する必要がある。

男子部 2年 王徳叡

テーマ①：「日本と韓国の大学生活の違い」

One big difference between Japanese and Korean university life is the military service that male Korean students must complete. Many Korean students do their service during their first

or second year of university. This is because they want to focus on studying and preparing for their future jobs after they return. In Japan, there is no such duty, so most students finish university in four years without any interruption. Personally, I would not want to do military service, and I think many Korean students feel the same. One of my Korean friends even called it "crazy work." But for Korea, it is very important to train people to protect the country. Also, those who complete military service become stronger in their body and mind. They also learn teamwork and leadership skills. I really respect them.

Another difference I noticed is how students date and have relationships. In Korea, students often meet through blind dates arranged by friends, called **sogaeting**, or in group activities like Membership Training (MT). MT is similar to welcome retreats in Japan, where students meet new friends. Korean students are more direct and confident when they start a relationship. They also stay connected through social media, sometimes sharing couple accounts. Korean couples celebrate anniversaries, meet more often, and are open about their relationship. On the other hand, Japanese couples are usually more private. These differences show how unique and exciting Korean university life can be.

テーマ②：「厳しい受験競争・学歴社会の改善策」

The entrance exam for Korean universities is famous for being very hard. Many students spend years preparing for it, and their scores have a big impact on their future. This has created a society where academic success is more important than anything else. It causes a lot of stress and makes social problems worse. Japan also has competitive exams, but the situation in Korea is even tougher because of the central role of the **Suneung** (College Scholastic Ability Test).

To solve this problem, there are a few ideas. First, companies should care less about academic records and more about practical skills. For example, they could focus on internships and work experience. This would make students feel less pressure to only get high test scores.

Second, there should be more opportunities outside big cities like Seoul and Tokyo. Both cities have most of the top universities and jobs. Local governments could attract big companies and create new universities in smaller towns by offering tax benefits. This would make it easier for people in rural areas to succeed.

Finally, changing the entrance exam system might help. For example, using recommendation letters or portfolios instead of one big test could reduce the pressure. But we have to be careful. In countries like the United States, these systems can make things worse because only rich families can afford special activities like studying abroad or starting their own projects.

By making these changes, both Japan and Korea could create a better system for students and reduce the stress caused by exams.

毎日韓国語

【毎日韓国語】 #1 ハングルは、母音(14個)と子音(10個)の組み合わせです。まずは母音の紹介

ㅏ(a), ㅑ(ya), ㅓ(eo), ㅕ(yeo), ㅗ(o), ㅛ(yo), ㅜ(u), ㅠ(yu), ㅡ(eu), ㅣ(i)
〈母音だけ使った単語〉 아이(ai) - 子供 오이(oi) - きゅうり 우유(uyu) - 牛乳

【毎日韓国語】 #2 子音の紹介

ㄱ(k/g), ㄴ(n), ㄷ(d), ㄹ(r/l), ㄹ(m), ㅂ(b/p), ㅅ(s), ㅇ(ng/無音), ㅇ(j)
〈パッチムがない単語〉 가수(gasu) - 歌手 바다(bada) - 海 나무(namu) - 木 모자(moja) - 帽子 사자(saja) - ライオン

【毎日韓国語】 #3 パッチムの紹介。パッチムとは、ハングル文字の最後に位置する子音のことを指します。

밥(bap) - ご飯 책(chaeck) - 本 꽃(kkot) - 花

【毎日韓国語】 #4 韓国のコンビニ (편의점 (ピョンニジヨム)) について。

CU、GS25、セブンイレブンなど

- ・「1+1」や「2+1」など、一つ買うともう一つ無料というプロモーションがあります
- ・마이픽 (マイピック) というヨーグルトや바나나맛우유 (バナナマッウユ、맛→味) が人気です

【毎日韓国語】 #5 飲食店に入った時に使えるフレーズを紹介。

- ・이거 많이 매워요?: (イゴ マニ メウオヨ?) 「これすごく辛いですか?」
 - ・덜 맵게 해주세요 : (トル メッケ ヘジュセヨ) 「辛さ控え目にしてください」
- ↑辛いのが苦手な方はぜひ現地で使ってみてください

【毎日韓国語】 #6 緊急時に役立つフレーズを紹介

- ・나는 배가 아파요. (ナヌン ペガ アパヨ) 「私はお腹が痛いです」
- ・화장실은 어디에 있나요? (ファジャンシルン オディエ イナヨ?) 「トイレはどこですか?」
- ・빨리 나오세요. (パリ ナウセヨ) 「早く出てきて下さい」
- ・서둘러주세요. (ソドゥロチュセヨ) 「急いでください」
- ・아직인가요? (アジギンガヨ?) 「まだですか?」
- ・아아.....! (アア……!) 「ああ…!」
- ・구급차를 불러주세요. (クグチャルル プラチュセヨ) 「救急車を呼んでください」

【毎日韓国語】 #7 韓国語表記のご飯について。

- ・ 비빔밥 = 비빔·밥(混ぜる·ご飯)
- ・ 「キンパ」 = 김·밥(のり·ご飯)
- ・ チゲ=찌개(鍋) *チゲ鍋は鍋鍋という意味なってます

【毎日韓国語】 #8 今日は街中でスターに会った時に使えるフレーズを紹介

- ・ 만나서 반가워요. (マンナソ パンガウォヨ) 「お会いできて嬉しいです。」
- ・ 항상 응원하고 있어요! (ハンサン ウンウォンハゴ イッソヨ!) 「いつも応援しています!」
- ・ 건강 조심하세요. (コンガン チョシムハセヨ) 「お体に気をつけてください。」
- ・ 앞으로도 화이팅! (アプロド ファイティン) 「これからも頑張ってください!」

【毎日韓国語】#9 今日はショッピングで役立つフレーズを紹介。

- 이건 얼마예요? (イゴン オルマイェヨ?) 「これはいくらですか?」
- 입어봐도 돼요? (イボバド デヨ?) 「試着してもいいですか?」
- 다른 색이 있어요? (タルン セギ イッソヨ?) 「色違いはありますか?」
- 다른 사이즈 있어요 (タルン サイジュ イッソヨ?) 「違うサイズはありますか?」
- 반품 하고 싶어요 (パンプム ハゴシippoヨ) 「返品したいです」

【毎日韓国語】 #10 人を誘う時のフレーズを紹介

- 시간이 있어요? (シガニイッソヨ?) 「時間ありますか?」
- 놀러가지 않을래요? (ノロカジアヌレヨ?) 「遊びに行きませんか?」
- 언제 한가해? (オンジェハンガヘ?) 「いつ暇?」
- 여기 가자 (ヨギガジャ) 「ここに行こうよ」
- 밥을 먹으러 가자 (パブルモグロカジャ) 「ご飯食べに行こうよ」

【毎日韓国語】 #11 飲食店で使えるフレーズを紹介

- 주문할게요. (チュムナルケヨ) 「注文お願いします」

이거 주세요. (이고ジュセヨ) 「これください」

계산해 주세요. (케사네ジュセヨ) 「お会計お願いします」

【毎日韓国語】#12 自己紹介で使えるフレーズを紹介

저는 ○○라고 해요. (チョヌン ○○ラゴ ヘヨ) 「私は○○です。」

【例】

저는 오우시에이라고 해요. (チョヌン オウシエイラゴ 헤ヨ) 「私は王偲叡です。」

만나서 반가워요. (만나소 반가우오요) 「お会いできて嬉しいです。」

일본 사람이예요. (일본사라미에요) 「日本人です。」

취미는 ○○예요/이에요. (츠히미ヌン ○○에요/이에요) 「趣味は○○です。」

고향은 ○○예요. (코히얀운 ○○에요) 「故郷は○○です。」

【例】

고향은 도쿄예요예요. (코히얀운 토키오에요) 「故郷は東京です。」

【毎日韓国語】#13 寒い時に役立つフレーズを紹介

춥습니다 (츠프스무니다) 「寒いです」

난방을 켜십시오 (난단닐 키오십시오) 「暖房をつけてください」

설정 온도를 높여주세요 (살르잔 온돌르 누피오츠후세요) 「設定温度を上げて주세요」

난방이 고장났습니다 (난단닐이 고잔나스무니다) 「暖房が壊れています」

난방을 수리하십시오 (난단닐 수리하십시오) 「暖房を修理してください」

업체를 불러주세요 (오츠퉈러플라츠후세요) 「業者を呼んで주세요」

아아...! (아아...!) 「ああ...!」

구급차를 불러주세요 (クグチャルル プラチュセヨ) 「救急車を呼んでください」

【毎日韓国語】#14 韓国の宗教について紹介

韓国では約 55%が無宗教、プロテスタントが 20%、仏教が 15%、カトリックが 8%と意外にもキリスト教が多い国です。

理由としては、19 世紀後半に海外に門戸が開かれ、その際にプロテスタントの宣教師が普及されたと言われています。

日本と比べて、宗教を信仰する人の割合が高い理由として、非常に厳しい競争社会である韓国において、宗教に救いを求める人が多いことが理由の一つとされています。

【毎日韓国語】#15 相槌の紹介

はい : 예 (イエ) / 네 (ネ)

いいえ: 아닙니다 (アニムニダ) / 아니에요 (アニエヨ)

〈同意を示す〉

そうですね: 그렇죠(クロッチョ)

その通りです: 맞아요 (マジャヨ)

いいですね: 좋아요 (チョアヨ)

そうですね: 그러게요 (クロゲヨ)

〈理解を示す〉

わかります: 알아요 (アラヨ)

もちろんです: 물론이죠 (ムルロニジョ)

【毎日韓国語】#16 食事の時のマナーについて紹介

①箸とスプーンは縦向きに置く

韓国では、箸とスプーンをワンセットで使うのが一般的で、箸は右側に、スプーンは左側に置きます。

②お皿は持ち上げない

韓国で食事をするとき、手はお皿の縁に添えるようにして、食事中はお皿は持ち上げない

ようにしましょう。

③取り箸は使わない

韓国では自分の箸を使って直接大皿から小皿に取り分けるのが一般的です。小皿がない場合は、大皿から直接食べることもあります。

【毎日韓国語】#17 人を褒めるフレーズを紹介

잘하네요 (チャラネヨ) 「上手ですね」

멋지네요 (モチネヨ) 「かっこいいですね」

귀여워요 (キヨウウォヨ) 「かわいいです」

잘했어 (チャレツソ) 「よくやった」

짱👍 (ジャン👍) 「すごい」

【毎日韓国語】#18 数字の紹介

0 영 (ヨン) /공 (コン)

1 일 (イル)

2 이 (イー)

3 삼 (サム)

4 사 (サー)

5 오 (オー)

6 육 (ユッ)

7 칠 (チル)

8 팔 (パル)

9 구 (クー)

10 십 (シブ)

ちなみに韓国アイドルが番組の挨拶などで使う、「(せーの!)、こんにちは、TWICE です!」の「せーの!」はハナドゥルセッ!(1, 2, 3!)とよく言われます。

【毎日韓国語】#19 韓国の若者がよく使う言葉を紹介

① 짱세다 (パクセダ) 「きつい」

【例】 오늘 수업 끝나고 알바도 있어…진짜 짱세다…
(今日授業終わったらアルバイトもある…まじきつい…)

대박 (テバッ) 「やばい」
日本語の「やばい」と同じように使えます。

맛집 (マッチブ) 「美味しいお店」
맛있는 집 (美味しいお店) を省略したもので、[○○맛집] というように地域名とセットで調べてみると人気な美味しいお店を探せます！

짱 (チャン) 「最高、イケてる」
この単語を他の単語と組み合わせることで、新しい韓国語の単語を作れます。
【例】얼굴 (オルグル、訳:顔) + 짱 = 얼짱 (オルチャン) は「最高に可愛い、最高にかっこいい」という意味になります。

【毎日韓国語】#20 バレーボールの用語を紹介

배구 (ペグ) 「バレーボール」

스파이크 (スパイク) 「スパイク」

블록 (ブロック) 「ブロック」

리시브 (リシブ) 「レシーブ」

소리내 (ソリネ) 「声出せ」

【毎日韓国語】#21 道に迷った時に使えるフレーズを紹介

저기요 (チョギヨ) 「すみません、あの」

길 좀 가르쳐 주시겠습니까? (キル チョン カルチョ ジュシゲッスムニカ) 「道を教えてくださいませんか？」

어떻게 가면 돼요? (オットツケ カミョン トウエヨ) 「どうやって行ったらいいですか？」

혹시 여기서 몇 분정도 걸려요? (ホクシ ヨギソ ミョップンチョンド コルリョヨ)
「ここからだと何分くらいかかりますか？」

【毎日韓国語】#22 部活に関連する語句を紹介

선배 (センベ) 「先輩」

후배 (フベ) 「後輩」

동기화 (トゥンギファ) 「同期」

감독 (カントク) 「監督」

지각 (チガク) 「遅刻」

결석 (キョルソク) 「欠席」

돌아가라 (トゥラカラ) 「帰れ」

아니요 (アニヨ) 「いいえ」

돌아갑니다 (トゥラカムニダ) 「帰ります」

정말 돌아가는 사람이 있을까? (チョンマル トウラガヌン サلامي 이스ル카?)
「本当に帰るやつがいるのだろうか？」

이봐요 잠깐만요! (イガヨ チャンガンマニョ) 「おい、ちょ待てよ」

용서해줘 (ユンソヘジョ) 「許してくれ」

【毎日韓国語】#23 韓国の食事のマナーについて

韓国では、年長者を敬う文化が強くあります。

例えば、年長者よりもさきに食べ始めてはいけません。お酒を注ぐ時は、左手を右手に添える。

そのほかにもマナーとして器は持ち上げない、などがあります！

もしかしたら、年長者と食事をともにする機会があるかもしれないのでその際は気をつけ

ましょう！

【毎日韓国語】#24 韓国の徴兵制について

男性として生まれた以上は特別な事情がなければ兵役に服す義務があり、満19歳になれば徴兵身体検査を受けます。身体検査で身長と体重、視力によって階級分けをされ、陸軍26ヶ月、海軍28ヶ月、海兵隊26ヶ月、空軍30ヶ月、公益勤務要員26ヶ月の兵役につくことになります。大学生の場合には24歳まで入隊が延期されます。4年制大学に通う場合、2年生を半ばまで通って入隊するパターンが最も多いそうです。軍隊に行っている間は大学を休学することになります。

↓最近のニュースです

<https://www.cnn.co.jp/world/35226566.html>

【毎日韓国語】#25 韓国の地下鉄に関する基本情報を紹介します

韓国の地下鉄の基本料金は、10kmまでは一律1,350ウォン（約136円）です。10km以上の場合5kmごとに100ウォン、50km以上は800ウォンずつ料金が上がります。

チャージ式のプリペイドカード「T-money」を利用すると、100ウォン安く電車に乗ることができるのでオススメ。「T-money」とは、日本でいう「PASMO」や「Suica」のようなものです。カードはコンビニで購入できるので、ぜひチェックしてみてください。

【毎日韓国語】#26 最近流行りのAPT.について、ちゃんとした歌詞の発音と日本語訳について少し紹介

채영이가 좋아하는 (チェヨンイガ チョアハヌン) 「チェヨンお気に入りの」
랜덤 게임 (ランダム ゲーム) 랜덤 게임 (ランダム 게임) 「ランダムゲームランダムゲーム」

아파트, 아파트 (アパトゥ、アパトゥ) 「アパート、アパート」

I'm talkin' drink, dance, smoke, freak, party all night (Come on)

건배, 건배 (コンベ、コンベ), girl, what's up Oh-oh, oh

건배 (コンベ) 「乾杯」

【毎日韓国語#27】 韓国の通貨について

韓国ではウォン（KRW）という通貨単位が使用されます。

1KRW=0.11 円なので、およそ 1/10 倍すると日本円に戻すことができます。

また、硬貨や紙幣は以下のとおりです。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E9%9F%93%E6%B0%91%E5%9B%BD%E3%82%A6%E3%82%A9%E3%83%B3>

【毎日韓国語】#28 ハングルの復習

このハングル読めますか??

- ①마라톤
- ②아르바이트
- ③커피
- ④컴퓨터
- ⑤햄버거

〈解答〉

- ①マラトン（意味:マラソン）
- ②アルバイトウ（意味:アルバイト）
- ③コピ（意味:コーヒー）
- ④コムピユート（意味:コンピュータ）
- ⑤ヘムボゴ（意味:ハンバーガー）

【毎日韓国語】#29 カンナムスタイルのサビ前からの和訳を紹介。現地で歌いましょう。

아름다워 사랑스러워 （アルムダウォ サランスロウォ） 「美しくて愛おしい」

그래 너 （クレノ） 「そう君」

Hey!

그래 바로 너 （クレ パロノ） 「まさに君」

Hey!

아름다워 사랑스러워 （アルムダウォ サラン스ロウォ） 「美しくて愛おしい」

그래 너 (クレノ) 「そう君」

그래 바로 너 (クレ パロ ノ) 「まさに君」

Hey!

지금부터 갈 데까지 가볼까 (チグムブト カル テッカジ カボルッカ) 「これから行けるとこまで 行ってみようか」

오빤 강남스타일 (오ッパン 칸ナム스타일) 「俺はカンナムスタイル」

【毎日韓国語】#30 韓国はカジノが有名ということでカジノで使える用語を紹介

まずは数字の言い方です

1 일 (イル)

2 이 (イ)

3 삼 (サム)

4 사 (サ)

5 오 (オ)

6 육 (ユク)

7 칠 (チル)

8 팔 (バル)

9 구 (ク)

10 십 (シプ)

100 백 (ペク)

1,000 천 (チョン)

10,000 만 (マン)

嘘 폰카 (뽕카)

콜 콜 (콜)

IV 參考資料

収支報告書

作成(提出)日: 2025年 3月 3日

作成者名: 宮川遥菜

連絡先: ensei2024@gmail.com

<収入>

		参加人数: 38名	日程: 2025年 2月6日~2月10日				
日付	項目	金額			計(円)	備考	
	OBOG会支援金	-	946,976	-	-	946,976	
	海外遠征特別寄付金	-	704,656			704,656	
	参加者個人負担費	-	3,040,000	80,000	38	3,040,000	参加者徴収分(キャンセルとなった鷹田さんを除く)
	参加者個人負担費	-	25,344	25,344	1	25,344	キャンセル費用(鷹田さん)
	参加者返金	-	-555,000	-15,000	37	-555,000	現役参加分を返金
	如水会国際交流助成金	-	902,066	902,066	1	902,066	金額は未確定(OBOG会が建て替え)
	収入計	-	¥5,064,042		-	¥5,064,042	

<支出>

日付	項目	領収書番号	領収書金額	単価	人数	計(円)	備考
	航空券費用	1	2,574,000	66,000	39	2,574,000	大韓航空 エコノミークラス 韓国-羽田往復
	燃油サーチャージ,TAX等	1	513,630	13,170	39	513,630	
	宿泊費(ツイン)	1	1,240,200	31,800	39	1,240,200	東横INNソウル江南 朝食付き
	宿泊費(シングル料金)	1	31,785	815	39	31,785	東横INNソウル江南 朝食付き
	空港送迎バス往復・ガイド付き	1	192,504	4,936	39	192,504	
	旅行代理店企画料金	1	390,000	10,000	39	390,000	
	ソウル大学持参お土産代	2	65,450	1,309	50	65,450	ソウル大学へのお土産として、記念タオル作成・発注
	企業訪問時お土産代	3	7,560	7,560	1	7,560	訪問先企業へのお土産として、洋菓子を5個
	ソウル大学懇親会費用	4	135,293	135,293	1	135,293	懇親会費用として、ソウル大学に100万KRWを現金で支払い
	特別寄付OBOG御礼品	5	13,787	13,787	1	13,787	ソウル大学ショップにて、カードケースを購入
	旅行代理店振込手数料	-	1,210	1,210	1	1,210	
	キャンセル(1名)返金手続き		-101,377	-101,377	1	-101,377	
	支出計		5,064,042			¥5,064,042	

参加者名簿

男子部		女子部	
学年	氏名	学年	氏名
4年	酒井雄太	3年	西山湖心
4年	坂上光	3年	宮川遥菜
4年	羽鳥邦彦	2年	高橋優奈
3年	山口堅大	2年	入江万愛
3年	島田寧桜	2年	田村彩佳
3年	河野右京	2年	高橋舞衣
3年	松本希海	2年	腰原弘乃
2年	今村信吾	1年	唐澤茜里
2年	梶本剛志	1年	近藤美崎
2年	向井蒼太	1年	千代田奈々
2年	新屋貴之		
2年	王偲叡		
2年	大川碧渚		
2年	岩佐歩実		
1年	梶原慧大		
1年	加藤豪		
1年	後藤ひな乃		
1年	椎千悠		
1年	高橋靖智		
1年	山本華乃		
1年	糸長篤哉		
1年	北畑嵩虎		
1年	小林由依		
1年	三上久遠		
1年	蛭子倫	引率 OB	
1年	藤原聖也	S54 卒	細井裕嗣
1年	林陸	S53 卒	鷹田芳明 <small>※私用によりキャンセル</small>

そのほかに、男子部中島監督、女子部竹内監督・山浦コーチにお越しいただきました。

交流計画書

2025 韓国遠征 一橋大学・ソウル大学 交流要綱

男子部2年 海外遠征担当
王 偲叡

日時：2月8日（土）、9日（日）

概要：8日に交流試合・討論会、9日に合同でソウル市内視察。8日については、確保できたのが1コートのみなので、先に女子部が試合をして、その裏で男子部が討論会を行い、15時をめぐりに交代する。

●2月8日（交流1日目）

会場：ソウル大学校体育館（71-1棟）、講義棟

チームの持ち物：部旗、救急バッグ、撮影機材、お土産のタオル

個人の持ち物：ユニフォーム、シューズ、その他バレー用具、着替え、ノートパソコン

11:00頃 ホテル出発

11:40 ソウル大学前駅 到着

11:50 ソウル大学体育館（71-1棟）到着

12:00 体育館開場

・開会式（5分ほど）

男子部は体育館併設の講義室に移動

女子部は体育館に残って練習開始

[女子交流試合]

～12:30 ウォーミングアップ

12:30～女子本戦（2セット先取の3セットマッチ）

女子新人戦（2セット先取の3セットマッチ）

・ネットは224cm、ボールはミカサ（ソウル大が貸してくれる）

15:00 女子部と男子部の入れ替え、ネット張り替え

[男子交流試合]

～15:30 ウォーミングアップ

15:00～男子本戦（2セット先取の3セットマッチ）

男子新人戦（2セット先取の3セットマッチ）

・ネットは243 cm、ボールはミカサ（ソウル大が貸してくれる）

18:00 終了、体育館から撤収

19:00 頃 夕食会

ソウル大近くの飲食店にて全体で食事

23:00 ホテル門限

[討論会]

男子部も女子部も同じ内容を約2時間かけて行う。

○タイムテーブル

・説明5分

・自己紹介10分

・討論①30分

・発表①10分弱

・休憩5分

・討論②30分

・発表②10分弱

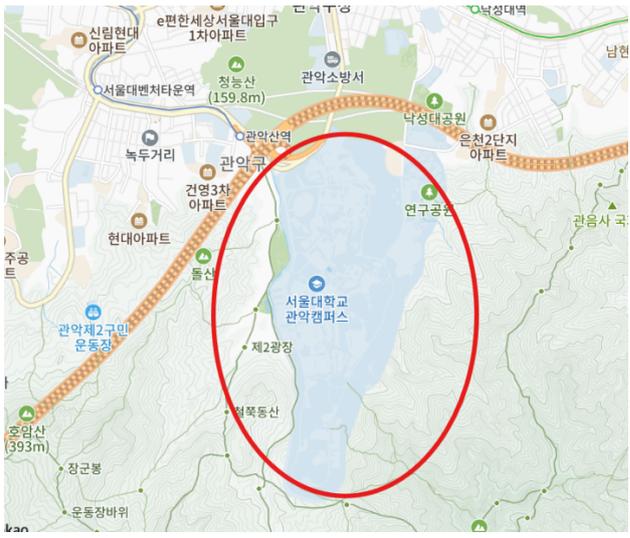
終了次第、体育館に戻り試合を観戦・応援する

～討論会のグループ分け（縦で見てください）～

それぞれのグループにソウル大の人が入ります

男子部						
F	G	H	I	J	K	L
羽鳥邦彦	坂上光	酒井雄太	島田寧桜	山口堅大	松本希海	河野右京
新屋貴之	王偲叡	大川碧渚	加藤豪	梶本剛志	今村信吾	向井蒼太
蛭子倫	岩佐歩実	糸長篤哉	山本華乃	藤原聖也	林陸	三上久遠
小林由依	北畑嵩虎	梶原慧太		椎千悠	高橋靖智	後藤ひな乃
女子部						
A	B	C	D	E		
西山湖心	宮川遥菜	田村彩佳	高橋優奈	高橋舞衣		
入江万愛	腰原弘乃	千代田奈々	近藤美崎	唐澤茜里		

[アクセス]



ソウル大学校 冠岳キャンパス



赤丸：体育館（71棟）

緑丸：正門

青丸：体育館の最寄りバス停（正門から体育館まで、徒歩だと8分ほど）

●2月9日（交流2日目）

集合場所：班によって異なる

持ち物：（渡したい人は）お土産、お金、貴重品

13:00 班ごと集合

～ソウル市内・近郊をソウル大学と合同で班別行動～

20:00（目安）夕食後、解散

23:00 ホテル門限

討論会進行スライド



서울대학교
SEOUL NATIONAL UNIVERSITY



一橋大学
HITOTSUBASHI UNIVERSITY

Discussion Meeting 2025.2.8

Today's outline

1. Group classification
2. Self-introduction
3. **Discussion#1** (differences of school life between us)
4. Presentation by some groups
5. 5-minute break
6. **Discussion#2** (entrance exam competition and academic credential society)
7. Presentation by the other groups



Discussion # 1



**What are differences in university life
between Korea and Japan?**



School Fes?



Cafeteria?





Holidays?



Let's talk in the groups!

What differences can you find?

If you have nice photos, please show them to the members!

Please chose the most interesting difference in the group!

Then, make a presentation to share it to everyone!



~ 5-minute break ~



Discussion # 2



How to improve the hardness in entrance exam competition and academic credential society?

Do you remember your entrance exams?



Why did you study so hard?



Higher quality education
Higher grades

Stable career
in Large companies

- job hunting
- system of entrance exams
- gap between city and country
- economic gap between the rich and the poor
- stress of students

What should be done? What should be improved?

Then, make a presentation to share it to everyone!

Thank you !!!